



TITLE:

秦始皇陵と兵馬俑に関する試論

AUTHOR(S):

曾布川, 寛

CITATION:

曾布川, 寛. 秦始皇陵と兵馬俑に関する試論. 東方學報 1986, 58: 355-462

ISSUE DATE:

1986-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66654>

RIGHT:

秦始皇陵と兵馬俑に關する試論

曾 布 川 寛

はじめに

一 秦始皇陵	三五八頁	(2) 珍禽異獸坑	四〇九頁
二 兵馬俑坑	三六四頁	(3) 馬廐坑	四〇九頁
三 兵馬俑の寫實	三八八頁	六 陵寢制度と靈魂觀	四一三頁
四 兵馬俑と秦の軍隊	三八三頁	七 始皇陵の前漢初期への影響	四二三頁
五 陪葬坑	四〇二頁	(1) 楊家灣漢墓	四二三頁
(1) 銅車馬坑	四〇二頁	(2) 馬王堆三號漢墓	四三一頁
		おわりに	

はじめに

近年、中國において墳墓や遺跡の發掘が相次いで行なわれる中で、最大の發掘といえは、誰しもが秦始皇陵の兵馬俑坑を擧げるであろう。一號坑から三號坑までの坑の規模といい、七千體餘り出土するであろうと推定される陶俑の質と量といい、或はそこに投入された勞力と財力といい、どれをとつても最大級の遺構といえよう。それは、既に項羽によつて發き盡され、もはや墳丘を遺すのみと一般に信じ込まれてきた始皇陵に對して、再檢討を迫るとともに、その豪勢さを改めて認識させるものであった。その後、この發見を契機として、陵園一帯が徹底的に調査され、銅車馬坑、珍禽異獸坑、馬廐坑などの陪葬坑、或は地上の建築遺跡、或は陵造營のための關連遺跡などが次々と發掘されつつある。これらの發掘の餘りの盛況ぶりは、今後

おいて、始皇陵全體の復元もあながち不可能ではないと思わせる程である。

しかし、こうした發掘の盛況ぶりにもかかわらず、その出土文物に對する研究の方は、必ずしも進んでいるとはいえないのが現状である。特に兵馬俑坑についていうならば、一九七四年の一號坑發見以來、既に十年餘りを経過しているにもかかわらず、いまだに基本的なことが解明されていないように見受けられる。その原因がどこにあったかといえ、これまで兵馬俑について幾多の論考が發表されてきたが、その多くが兵馬俑の等身大という大きさ、何千體もの量の多さ、そして一體一體の迫眞的な寫實に感嘆し、それに終始してしまつたからである。確かに兵馬俑が軍陣をなして整列する有様は壯觀であるが、もはや感嘆だけの時期は終つたように思われる。

また、これまでの美術史、考古學の側からの兵馬俑研究をみて氣が附くことは、極く専門的な研究は別にして、多くの場合、様式論の立場からのみなされていることである。例えば誰もが驚嘆する兵馬俑の寫實について、様式論の見地から、その一體一體異なる眞に迫つた表現を指摘し、これ程徹底した寫實は全く前例がないという。恐らく様式論にのみよる限り、前の場合と同様、こうした感嘆の言葉しか出て來まい。というのは、兵馬俑の寫實表現が餘りにも突然に出現し過ぎて、比較すべき相手を全く缺いているからである。様式論はつまり様式變遷論であり、年代の不明の遺物に對する編年的試みとしては有効な方法であるが、兵馬俑のように年代がほぼ明らかなうえに、比較すべき相手を缺く場合には、あまり有効性を發揮しない。従つてここで必要なのは、兵馬俑を單に詠嘆の對象として終らせてしまふような方法ではなく、表現された物に則して、その表現意圖を汲取りながら考察を進める實りある方法である。兵馬俑の寫實についていえば、ここでは寧ろ、彫塑史上、比較すべき相手がない程突然出現した異常さにこそ注目し、それを實現せしめた強力な意志、そこに隱された意味を考慮すべきである。兵馬俑は軍隊という點では自明であっても、それが更に何の軍隊を表わしているのか、どのような機能をもつて地下に置かれたのかは自明ではない。古代にあっては、表現されたものは全て何らかの意味、機能を擔っており、我々に自明とみえるものが、實は自明ではないのである。

そこで、筆者は兵馬俑を考察するに當って、一種の圖像學的方法を適用する。先に兵馬俑の迫眞的な寫實について觸れたが、一口に寫實といっても千差萬別であり、ましてや古代の場合は尙更である。兵馬俑の寫實は、その容貌が極めて個性的で一體一體異なるように、明らかにモデルを使って正確に寫すことを至上命令とした寫實であると看取される。それならば一體案のどの軍隊をモデルに寫したのであろうか。議論はここまで徹底すべきである。これまで眞に迫った寫實は異口同音にいつても、その寫實がどういう性質の寫實であるのか、更にその眞は何に對して眞であるのか、つまり兵馬俑の軍隊の同定にまで議論を押進めることはしなかった。また、たとえしても嚴密な考證を缺き漠然たる見解の域を出なかった。筆者はこれを解明するために、まず兵馬俑の軍陣を可能な限り復元することに努めた。またそのために、正式な發掘調査報告はもとより、たとえ正式の報告でなくても、發掘關係者によって書かれた記事はなるべく採用することにし、最大限資料の収集に努めた。何故ならば、兵馬坑俑を含めた始皇陵の陵園内は、今なお發掘調査が行なわれて、次々と重要な新しい事實が明るみに出ており、斷片的ではあるけれども、これらの新しい情報を抜きにして語れないからである。こうすることによって、各坑ごとの軍陣の編成方法、指揮系統、攜帶武器などを解明する。またこの他に軍隊の性格を示す符牒として、特に冠に注目する。そしてこれらを「史記」「漢書」等の文獻史料に照らし合わせ、兵馬俑の軍隊の同定を行なうのである。この方法は銅車馬坑の銅車馬にも適用されるが、事實、兵馬俑も銅車馬も、實際の軍隊と車馬を正確に同定出来る程に、異常な執念をもって精巧に寫實的に作られていたのである。

さて、この論考において取上げたもう一つの大きな問題は、始皇陵全體の構想に關係した陵寢制度と死者の靈魂の問題である。始皇帝は戰國の亂世を統一し、初めて皇帝を稱して數々の革新的政策を打出したように、彼自身が構想し營んだ始皇陵も、墓葬形制史上、革新的意義を有するものであった。それが後漢の蔡邕の指摘した陵寢制度であり、究極的には死者の靈魂に關わることであった。筆者は先に長沙馬王堆漢墓出土のT字型帛畫を中心に、戰國から前漢にかけての繪畫資料に對して圖像學の解釋を行なったが、そこでの問題も靈魂に關わることであった。即ち死者の靈魂は、天上世界と地上世界の中間に位置する

不死の聖域、崑崙山へと昇仙するというのが、南の楚の地方を中心に考えられた靈魂觀ないし死生觀であり、この考え方に立って、戰國中期の陳家大山楚墓出土帛畫（所謂晚周帛畫）から前漢初期の馬王堆漢墓のT字型帛畫に至る昇仙圖が制作されたのである。ところがこのような靈魂觀は、文獻史料のどこにも明記されていず、帛畫の出現によって初めて明らかになったのである。明記されているのは、儒家を中心に考えられた靈魂觀、つまり死後、人間は精神的魂と肉體的魄とに分解し、魄は土に歸するのに対して、魂は天に昇るという考え方だけである。果してこれが古代における唯一の靈魂觀であつたろうか。昇仙圖はこの鐵案に一石を投じるものであったが、陵寢制度に則って造營された始皇陵も、新たに地下の世界を提示し、これに對して大々的な一石を投じるものである。あの巨大な兵馬俑坑が作られた理由も、全てここに存し、始皇陵に初めて體現された陵寢制度並びに靈魂觀が、大きな影響力をもって漢代へと引繼がれて行ったのである。

それはさておき、これらの問題に立入る前に、始皇陵の現況並びに造營經過、そして兵馬俑坑の發掘狀況についてみておく必要がある。

一 秦始皇陵

秦始皇陵（圖1）は、陝西臨潼縣の縣城東方五km、秦嶺の支脈驪山の北麓に位置し、方形覆斗式の小高い墳丘が、なだらかなスロープを描いて横たわっている。墳丘の現在の大きさは、東西三四五m、南北三五〇m、高さは四三mである。^②當初は無論今より大きく、自然の侵蝕と人爲的破壊によって現在の大きさになったのである。「漢書」劉向傳に載せる前漢末の劉向の上疏文^③によれば、「その高さ五十餘丈、周回五里有餘」とあり、換算すると高さ約一一六m餘り、周圍二〇八八m餘りになる。この墳丘は、殘存する城壁土臺部分から推して、長方形をした内城と外城の二重の城壁によって圍まれ、殆んど中心線と同じくする内城と外城^④の南側半分に偏よっていた。内城は東西五八〇m、南北一三五五mで、幅は約一〇mあり、外城は東西九四

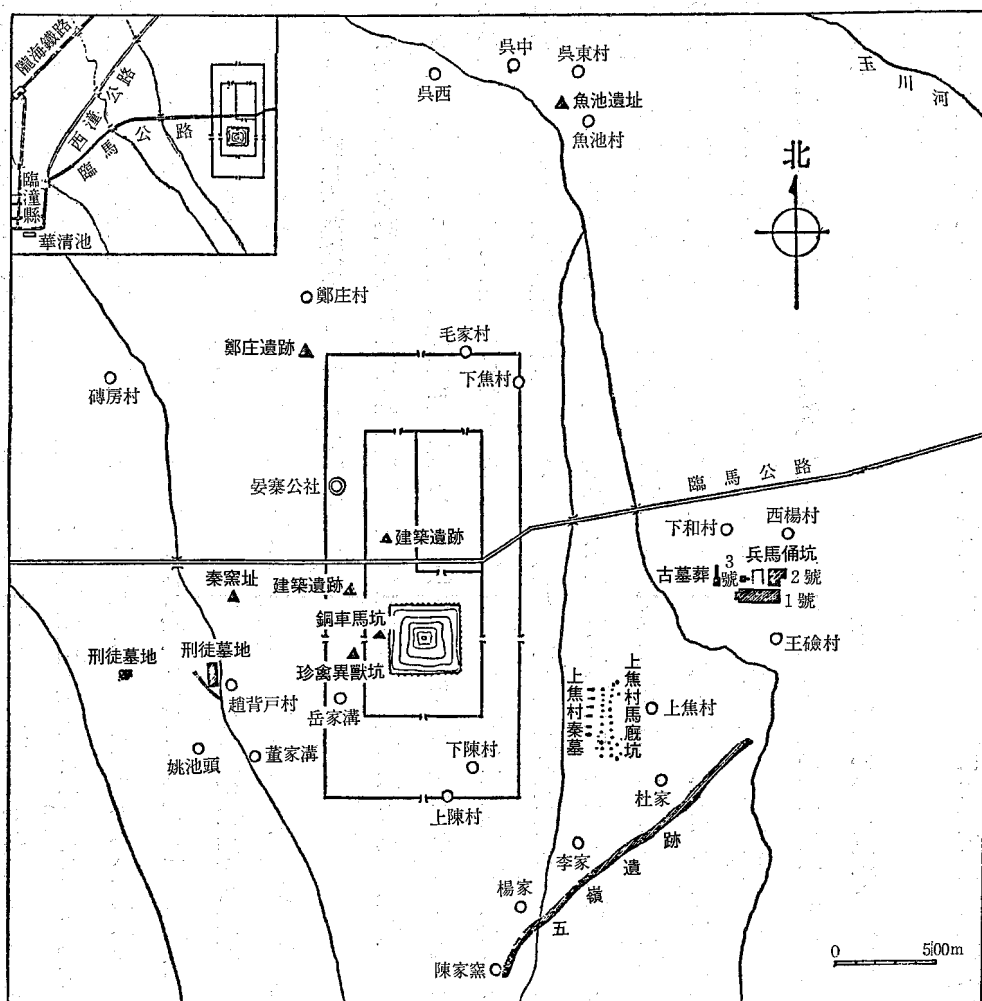


圖1 秦始皇陵位置圖

○m、南北二一六五mで、幅は六一七mであった。この外城で囲まれた領域が始皇陵である。

この始皇陵の沿革に関する史料としては、「史記」秦始皇本紀の記事が最も古く、次のように述べる。

始皇初めて位に即くや、酈山を穿ち治む。天下を并すに及んで、天下の徒、送詣すること七十餘萬人。

これによって、まずこの陵は、始皇帝（嬴政 前五九—二一〇）が、前二四六年、僅か十三歳で秦王に即位すると同時に造営に着手したことが知れる。そして「酈山を穿ち治む」とあるが、ここで酈山（酈山、驪山）とは、自然の山の驪山ではなく、始皇陵を指す。天子の冢を漢代では陵といったが、秦では山といい、始皇

陵は驪山と呼ばれたのである。これは、一九五八年、外城北壁の外で発見された銅鍾に「麗山園」と銘があり、一九七二年以後、陵内で発見された二件の陶壺の蓋(圖44)にも、「麗山飢官」とあること⁽⁶⁾によって證される。しかるに始皇陵の造營が本格化したのは、始皇二六年(前二二一)の天下統一以後で、全國の刑徒七十餘萬人を動員したとある。恐らくこの時、秦王の墓から皇帝の墓へと計畫の大變更がなされたと思われるが、これより先、統一前の十六年(前二三二)、秦はここに驪邑を置き、統一後の二七年(前二二〇)には、都咸陽の信宮(咸陽宮)から驪山に通ずる關道を作った⁽⁷⁾。そして三五年(前二二二)頃になると、阿房宮の造營も平行して行われ、秦始皇本紀には「⁽⁸⁾隱宮徒刑者七十餘萬人、乃ち分れて阿房宮を作り、或は麗山を作る」とあり、同時に三萬家を驪邑に移している。

このように始皇陵の造營には、天文學的數字の勞力と財力が費やされ、長城、阿房宮、馳道、直道の建設など⁽⁹⁾と並ぶ秦の大土木工事であった。墳丘の盛土は、墳丘の東北二・五kmにある魚池村から運ばれ⁽¹⁰⁾、現在の魚池村の南には確かに大坑があり、その容積は盛土體積を上回るといふ。また陵の造營に要した石は、驪山の石が石材に適さないため、渭水の北の北山から運ばれた。北山の青石は肌理が密で、石碑や石槨に適していた。一九六二年の始皇陵調査の際、陵内の晏家寨村(晏塞公社)附近で下水用と思われる石の水道設備が見附かったが、これは二箇の青石(石灰岩)を重ね合わせたもので、北山の石とみられている⁽¹¹⁾。これらの石が、一九七三年、始皇陵西北角で発見された鄭庄石材加工場に運ばれ、加工が施されたのである。鄭庄遺跡⁽¹²⁾は東西一五〇〇m、南北五〇〇mにも及び、大量の石材、半製品、石屑、そして鑿、錘などの鐵製加工具が出土した。また注目すべきことに、鐵製の馬蹄形鉗や鎖附きの桎(欬)といった刑具も発見され、刑徒の動員が裏附けられた。

また陵の外でも關連工事が營まれ、陵の南側、西南から東北の方向に一五〇〇mにわたって走る五嶺遺跡⁽¹³⁾は、幅四〇—八〇mもある一種の人工防水堤であった。驪山の谷の水が土地の低い始皇陵へと直撃するのを恐れ、流れを東北の方向に變えるために築かれた。

こうした始皇陵の造營に刑徒が動員されたことは、鄭庄遺跡によって實證された通りだが、一九七九年十二月、陵の西一・

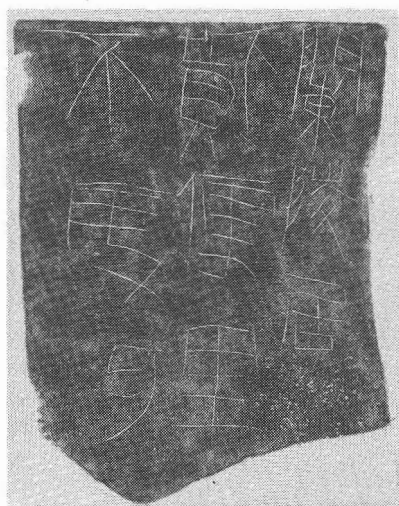


図2 始皇陵西側勞役夫墓地出土
瓦文（拓本）高 22.7 cm

五kmの趙背戸村で、造營に従事した勞役夫や刑徒のためのものとみられる墓地が見附かった¹⁴。南北長さ一八〇m、東西幅四五mにわたって一一四基あるうち、秦墓三二基、骨架一〇〇體が整理された。全て堅穴土坑で、一つの坑に小さい坑は二、三體、大きい坑は十四體も直接葬り、その多くは屈肢葬であった。ここで興味深いのは、遺體に被さっていた板瓦や筒瓦に刻された瓦文で、計十八件出土した。それには、例えば「闌（蘭）陵居賁便里不更牙」（圖2）というように、姓名（牙）、籍貫（蘭陵）、鄉里名（便里）、不更（爵名）、勞役名（居賁）が記され、或はこれらを省略して記していた。つまり一種の簡略な墓誌であるが、初め居賁を刑名と解釋して一律に刑徒の墓誌とされた。しかし居賁は、一九七五年、湖北雲夢睡虎地十一號秦墓出土の秦の律を記した竹簡（「雲夢秦簡」）によると、公の債務を償還する能力のない者に對して課する勞役であって、刑罰ではない。また十八件の瓦文墓誌には、公主、上造、不更といった秦の爵位を記すものが十一件もあり、刑徒が爵位を有する筈はないので、勞役夫と訂正する見解が出た。¹⁶尤もな見解である。従って趙背戸村墓地の被葬者を一概に刑徒と斷定するのは明らかに誤まりであるが、被葬者の骨には刀傷、支解、腰斬の痕を留める者がかかなり認められ、刑徒も含まれていたと考えるのが妥當であろう。また先の瓦文をみると、籍貫が山東（四件）、河南（三件）、河北（二件）、江蘇（一件）などと各地に散らばっており、秦始皇本紀のいう通り、全國各地から勞役夫、刑徒が集められたことがわかる。

そしてこれら勞役夫や刑徒を管轄したのが中央官署の役人達である。始皇陵及びその周辺の陵園内で出土した磚や瓦には、官署名と名前を記した印文（陶文）が捺されていることがあるが、その陶文をみると、都司空、左右司空、大匠、寺水、宮水、大水、左右水、北司などの官署を識別し得る。このうち數量的に最も多かった左右司空は、少府の屬官で、寺水、宮水、左右水、北司もこれに所屬するとみられる。その他、都司空は宗正の

屬官、大匠は將作大匠のことと思われるが、これらの數量はそれ程多くなかった。従つて始皇陵の磚や瓦の製造に關する限り、少府、とりわけ左右司空が擔當したといえよう。⁽¹⁸⁾少府は、「漢書」百官公卿表によると、⁽¹⁹⁾屬官に若盧、考工室、左右司空、東園匠などがあり、これら全てが秦の官であつたわけではないが、武器、器械、陵内器物の製造を掌つた。因みに始皇陵で使した磚や瓦を焼いた窯跡が、陵の西側で發見されているが、詳しい調査報告は未だ出ていない。

こうして始皇陵の造營は着々と進められ、三十七年（前二一〇）には、既にかなり出来上つていたと思われるが、⁽²⁰⁾その年、始皇帝は第五次地方巡幸の途次、山東平原津に至つて突然發病し、七月、河北沙丘（巨鹿縣東南）の平臺で崩御した。遺體は直ちに輜輶車で咸陽に運ばれて、喪が發せられ、次いで位を繼いだ二世皇帝胡亥によつて驪山陵に葬られた。そして七箇月後の二世皇帝元年四月、土を埋め戻して更に盛土し、ここに驪山陵に關する一切の仕事は終つた。⁽²¹⁾

では、秦王即位以來、三十七年を費やして出来上つた陵とは、とりわけ最も肝腎の陵の内部はどんなであつたろうか。これについて、「史記」秦始皇本紀は先の記事に續けて次のように述べる。⁽²²⁾

三泉を穿ち、銅を下して椁を致す。宮觀、百官、奇器、珍怪、臧に徙してこれを滿たす。匠をして機じかけの弩矢を作らしめ、穿ち近づく所の者あれば輒ちこれを射る。水銀を以て百川、江河、大海と爲し、機もて相い灌ぎ輸らす。上は天文を具え、下は地理を具え、人魚の膏を以て燭と爲す。滅えざること、これを久しうせんと度るなり。

即ちまず地下第三層の水脈まで深々と掘り下げたことを述べ、そこに廣大な地下空間を築いて槨をおさめ、宮觀や諸々の官吏、珍貴な器物を運び込んで滿たしたのみならず、一つの世界を作り出し、天井には日月星辰の天文、床には水銀を流して江海の地理を象つたことを述べる。また盜掘に備えて、近附くと自動的に矢が放たれる弩の仕掛けを作り、燈が永遠に消えないように人魚の膏をともしたという。一般に墓の内部のことは嚴重に祕されるので、この「史記」の記述もどれだけ信憑性があるのか、今後の問題とせねばならぬが、司馬遷にも何か據る所があつたと思われる。事實、一九八一年、魚池から驪山に至る始皇陵一帯の土中の水銀の含有量を科學的に測定してみたところ、⁽²³⁾墳丘（盛土）の部分において異常に高い數値を示したという。

秦始皇本紀には、川や海に水銀を流したとあったが、これによって墳丘の下の墓室内に大量の水銀が埋まっていることが、ほぼ確かめられたのである。

ところが、かくも豪盛を極め、盗掘に備えて工夫を凝らした始皇陵も、始皇帝が死去してから僅か三年後に、項羽によって發かれてしまったという。二世皇帝の即位後、始皇陵の完成に向けての工事、次いでなお未完成であった阿房宮の大土木工事への動員など、秦朝の苛酷な支配に耐えかねて、各地で反亂が勃發した。二世皇帝元年（前二〇九）七月の陳勝、吳廣の亂を皮切りに、これに呼應して劉邦、項羽も舉兵し、關中目指して進撃した。先に關中に入った劉邦に對して、二世皇帝を繼いだ秦王嬰は降服して玉璽を渡し、ここにあえなく秦王朝は滅亡した。しかし遅れて入った項羽は、咸陽の宮殿を焼き、造營途中の阿房宮に火をかけ、そして驪山陵を焼いたというのである。但しここで注意しなければならぬのは、項羽が始皇陵を發いたことについて、司馬遷の「史記」は、項羽の罪狀をならべあげた劉邦の口を借りて、²⁴「始皇帝の冢を堀り、私にその財物を收む」（高祖本紀）と簡単に觸れるのみである。また班固の「漢書」も劉向の上疏文の中で、²⁵「項籍（羽）その宮室營宇を燔ぎ、往く者みな見て發き掘る」と簡単に述べ、更にその後の事に觸れ、「牧兒羊を亡い、羊その鑿に入る。牧者火を持ち照し羊を求むれば、失火してその臧槨を燒く」と述べる。ところが「水經注」に至ると、²⁶「項羽關に入り、これを發くに三十萬人を以てし、三十日物を運ぶも窮むるあたわず」といい、「牧人羊を尋ねてこれを燒き、火九十日に延べ、滅するあたわず」（渭水條）といい、前二者の記事を敷衍し話が具體性を帯びて大きくなるばかりか、關東の盜賊が槨を鎗かして銅を取ったことを附け加える。確かに項羽が始皇陵の地上建築の「宮室營宇」を燒き、地下の遺構を發いたことは事實であろうが、具體的にどの程度發いたのかについて、最も信憑すべき「史記」と「漢書」が、何も觸れていないことも重要である。最近、正式の報告ではないが、始皇陵發掘關係者の語るところによれば、²⁷墳丘の下部をボーリング調査した結果、遂に地宮（地下宮殿）の宮牆と、地宮の深部に通ずる墓道（甬道）を採し當てたといい、更に注目すべきことに、盜掘坑は二本見附かっただけで、しかもその盜掘坑は地宮に達していないという。始皇陵は果して發かれているのかいないのか、今後の詳しい調査結果が待たれる次第である。

このようにして、始皇陵はただ墳丘を遺すのみで、餘は全て焼き盡されたという風聞の下に、長く世間から忘れ去られていた時、突如地下から姿を現わしたのが、あの巨大な兵馬俑坑であった。兵馬俑坑の出現によって、人々は改めて始皇陵の壮大さ、或は想像を絶した構想に目を見張り、その結果、兵馬俑坑の大々的な發掘調査のみならず、これを契機に廣大な陵園一帯が虱潰しに調査され、多くの新しい知見をもたらしたのである。

二 兵馬俑坑

兵馬俑坑は、現在一號坑から三號坑まで發見されている。第一號兵馬俑坑(圖3)は、一九七四年二月、始皇陵外城東壁から東へ一二三五mの地點で發見された(圖1)。東西の長さ二二〇m、南北の幅六〇mで、東西に長い長方形をなし、そこに四・五mから六mの深さの坑が堀られていた。その形制は、まず東西兩端、南北兩側にそれぞれ五條の斜坡門道があり、門道の幅は兩端が三・八一六・六m、兩側は一・六一四・八mあった。そして坑は、東西兩端に各々南北の長さ六〇m、東西の幅三・四五mの長廊、南北兩側に各々長さ約一八〇m、幅約二mの側廊、これらに圍まれて内側には、長さ一八〇m、幅三・五mの過洞が東西に九條(側廊を含めれば十一條)走り、過洞と過洞との間は、幅約二・五mの版築の土の壁(土隔壁)で相い隔てられていた。坑の構築方法(圖4)は、まず形に従って深さ

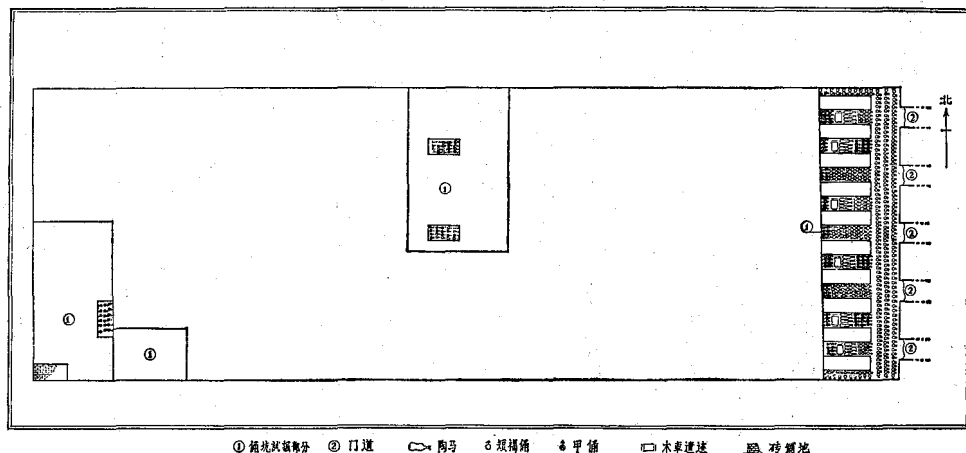


圖3 兵馬俑一號坑平面圖(1975年試掘段階)

約5mの土坑を掘って、周囲の壁及び土隔壁を突き固め、長廊、側廊、過洞の壁際に一・一一・五m間隔で柱を立て、その上端に梁を渡して、柱と直角に丸太を密にのせ、更にむしろをかけて土で被っていた。つまり地下坑道式の構造をなし、下に磚を敷き、高さ約三・二mの坑道空間を作っていた。これは二、三號坑とも基本的に同じである。

そして陶製の兵馬俑は、この坑内に東を向いて整然と並べられ、歩兵と戦車から成る大型の軍陣を構成していた。武士俑は鎧甲もしくは長襦に身を固めて、實戦用武器を持ち、身長は一・七五―一・九六mあった。現在未だ発掘は完了しておらず、一號坑全體の上に巨大なドーム式屋根をかぶせ、「秦始皇兵馬俑博物館」として公開する一方、その中で発掘が進行中であるが、全て発掘した暁には、六千體餘りの兵馬俑が出土するであろうと推定されている。また戦車は過洞の東寄りで六輛出土し、木製の車體を高さ一・五―一・七m、長さ二・二―二・二mの四頭の陶馬がひき、御手を含め三人の乗員俑は車體の後ろに立っていた。但し兵馬俑は東向きといったけれども、全て東向きというわけではなく、南北兩側の外側の一列だけはそれぞれ外を向き、西端の最後の一列だけは西（後方）を向いていた。

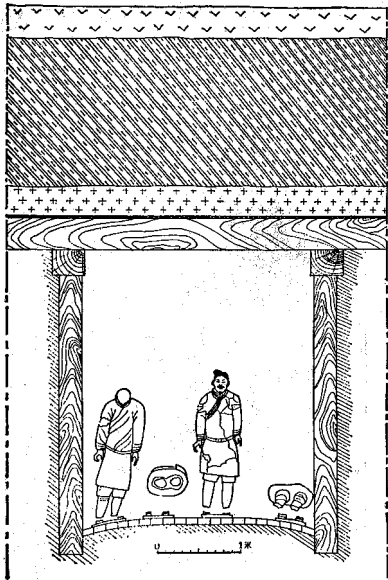


圖4 兵馬俑坑過洞構築断面圖

次に二號坑²⁹は、一九七六年五月、一號坑の東端北側の所で発見され、兩坑は二〇m離れているだけであった。十八箇所（T1~T18）を試掘したところによると、坑は全體として曲尺形をなし、東西九六m、南北八四m（門道含まず）と、面積はおよそ一號坑の半分の六〇〇〇m²であったが、新たに大量の戦車と騎兵の俑を投入し、やはり東を向いて一層複雑な陣形をなしていた。形制は東西兩端に各二條、北側に一條の斜坡門道があり、そして環廊、過洞、土隔壁とから成っていた。全體の構成は、兵種の違いによって四つの部分に分けられる。第一區は坑の東北隅の突出した部分で、四面に幅三・二mの環廊、内側に幅二・二mの過洞が四條あった。全て歩兵で、環廊には長襦を着て



圖5 兵馬俑二號坑出土跪射俑

矢を射かける姿勢をとった立射式武士俑（圖14）、過洞には各二列、計八列縦隊で鎧甲を着た跪射式武士俑（圖5）が配されていた。

第二區は坑の南半部に當り、東西兩端に各一條の長廊があり、その間に幅三・二mの過洞が八條走っていた。過洞には乘員三人（圖24）の四頭立て戦車が、各過洞に八輛ずつ、計六四輛整列していた。

第三區は第二區の北側の中央部分で、西端に長廊があり、その東に過洞が三條走っていた。構成は複雑で、三人乗員の四頭立て戦車十九輛に多くの歩兵（徒）が付き従い、最後尾には騎兵が八騎配されていた。

第四區は北側の部分で、西端に長廊があり、三條の過洞部分には、東寄り前方に二人乗員の四頭立て戦車六輛、後方に十二列縦隊の騎兵（圖6）が、全部で一〇八騎配されていた。但し騎兵は馬に乗らず、鞍をつけた馬（鞍馬）の左前に轡をとって立っていた。

最後に三號坑³⁰（圖7）は、一九七六年六月に發見され、一號坑の西端北側二五mのところ、即ち二號坑の西方に位置していた。特殊な坑で、前二坑と比べ極端に小さいばかりか、形制、配置とも全く異っていた。坑の平面は凹字形をなし、東西一七・六m、南北二一・四mで、東側に斜坡門道があった。坑は、門道を入れて正面に車馬房、その南と北に長廊があり、更に長廊に續けて東西方向の南廂房、北廂房があった。車馬房に四頭立て戦車一輛と乘員俑四體が配されていた他、南側長廊に八體、南廂房に三四體、北廂房には二二體の武士俑が置かれていた。但し配列の仕方が特殊で、南側長廊では四體ずつ東西の壁際に分かれて向合い、南廂房では半分ずつ南北に分かれて向合い、北廂房でも半分ずつ南北に分かれ、東端の二體が東を向く他は互に向合っていた。またこの坑の特殊さは帷幕にも窺われ、南側長廊北入口と北廂房東入口には、木製門楣の跡が認められ、同

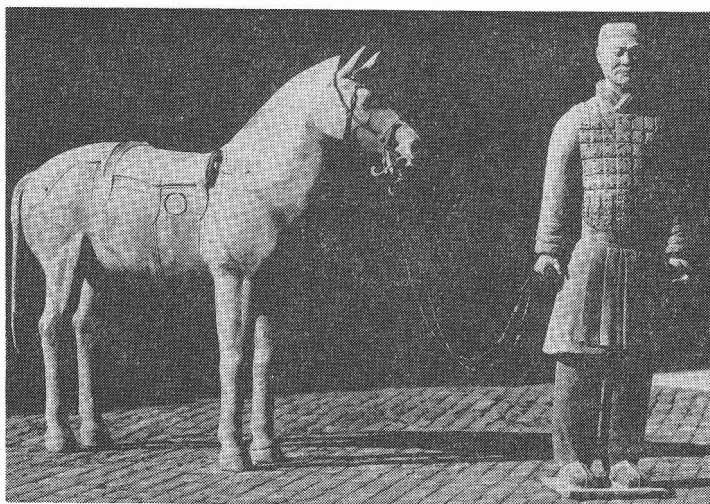


圖6 兵馬俑二號坑出土鞍馬並びに騎兵俑
鞍馬 長 203cm 騎兵 高 180cm

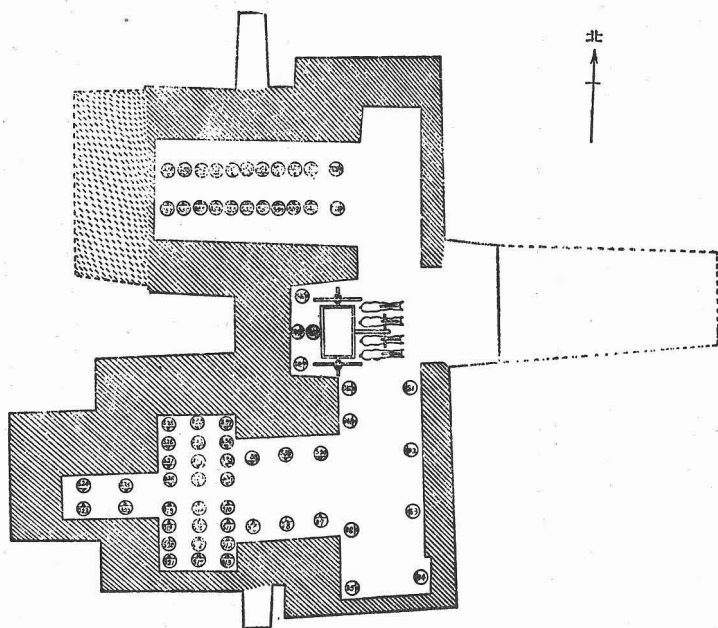


圖7 兵馬俑三號坑平面圖

じ所から出土した柄附きの銅環(圖8)とともに、ここに帷幕をかけていたことが推測された。つまり三號坑は、帷幕によって部屋を仕切った詰所のようなものであった。因みに巨大な土木建築である兵馬俑坑は、一、二號坑が火によって崩れ落ち、兵馬俑も火を被っていたが、三號坑は火に遭っておらず、自然倒壊と人爲的破壊によって破損の程度は甚しかったものの、兵馬俑の彩色などは比較的よく残っていた。

また以上の一、二、三號坑の他、一九七五年、二號坑と三號坑の間で未完成の廢棄坑が発見された⁽³⁾。坑は東西四八m、

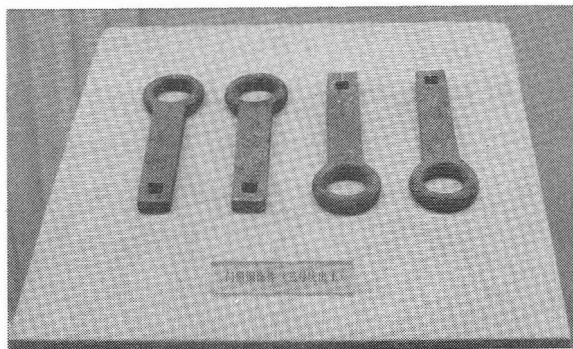


圖8 兵馬俑三號坑出土門櫛銅鑰 長 18cm

南北九六m（復原）、深さ約四・八m、總面積四六〇八²mを占め、坑の北邊及び東西兩邊の北側ははっきりしていたが、坑の南半分は水に押し流されて崩れ落ち不鮮明であった。そして土坑があるだけで、木構建築や陶俑、陶馬などの文物は一切見當らなかった。これについては、陳勝、吳廣の亂など秦末の反亂のため、未完成のまま放棄されたのではないかとの見解が出ている。しかし始皇陵の造營工事は、上述のように、二世皇帝元年四月をもって一應終了しており、始皇帝の突然の死などによって、計畫そのものが縮少されたとみるのがより妥當であろう。

三 兵馬俑の寫實

さて、兵馬俑坑から出土した大量の兵馬俑をみて、まず第一に驚かされるのは、その徹底した寫實である。もとより兵馬俑は群像表現であり、無論そうした觀點から全體的に把握する必要があるが、その前に個々の兵馬俑の寫實に注目してみよう。

一般に中國古代における寫實表現は、戰國時代から前漢にかけて著しく昂揚し、諸子百家に代表される合理思想の發達とともに、これまでの殷周の呪術的、神祕的造形は次第に影がうすれ、從來の自然の實態から程遠いぎこちない造形も、漸やく自然に近附くようになった。それを最も典型的に示すのが、陝西興平豆馬村から出土した戰國末期の銅犀尊³²である。なお體一面を金銅象嵌の雲紋で被い、神祕的色彩を遺しているものの、形のみならず量感において、自然のイメージに近い犀が寫實的に生き生きととらえられている。また江蘇漣水三里墩で出土した戰國末期の青銅臥鹿³³も、なお辟邪の機能を擔って角が異常に大きく強調されているものの、それ以外は柔和な顔附きなど全く自然の鹿の造形である。兵馬俑はこれらと殆んど時期を

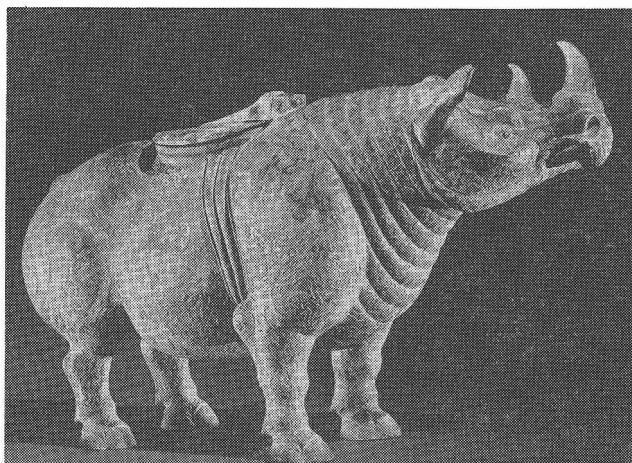


圖9 陝西興平豆馬村出土銅犀尊 長 58.1cm 戰國末期

同じくし、やはり寫實表現の高まりの中で制作されたが、その寫實は一層進んでいるといえよう。例えば陶馬を取上げてみた場合、もはや超自然の紋様もみられなければ、一部だけを強調した不自然な誇張もみられない。つまり兵馬俑は、純粹に造形的に見る限り、これまでの造形作品と異なつて、呪術的、神祕的性格を全く拂拭して、ひたすら寫實的造形を目指しており、その意味では驚異的發展を示しているといえる。しかし、それを寫實表現的發展として額面通り受取れるかといえ、このような寫實が兵馬俑において突然成就されたこと自體が、まさに異常であり、そこには何かしら強力な意志と明確な目的があつてのことに違いない。一口に寫實といっても千差萬別であり、兵馬俑の寫實はどのような寫實であり、どのようにして成遂げられたか、或はまた何を目的としていたか、以下において考察してみる必要がある。

まず兵馬俑の寫實と關連して、等身大という寸法が注目される。武士俑は長襦もしくは更にその上に鎧甲を身につけ、第二號坑の立射式と跪射式俑を除き、皆な少し足を開いて直立の姿勢をとり、その身長は上述の如く一・七五—一・九六m あつた。稍や體格が良過ぎるきらいがあるけれども、特殊な軍隊の性格上、特に立派な體格の持主が選ばれたこと、そして焼成時の若干の膨脹を考慮すれば、等身大とみなしても別段おかしくはない。しかし何よりも實戰に使用される武器を攜帶していたことが、等身大を目指したことの重要な證となろう。また陶馬は通高一・五一—一・七m、體長二・二〇—二・六m³⁴⁾あり、これも等身大とみて差支えあるまい。後述する通り、始皇陵東側の上焦村一帯の馬廐坑から當時の馬の骨格が出土しており、それと比べ餘り大差ないからである。但し二號坑から出土した鞍馬とその轡をとる騎兵俑とを並べると、馬が少し小さ過ぎるよう³⁵⁾にみえるけれども、漢の武帝の時代に西方から所謂汗血馬³⁵⁾が入る以前の中國の馬は、このよう

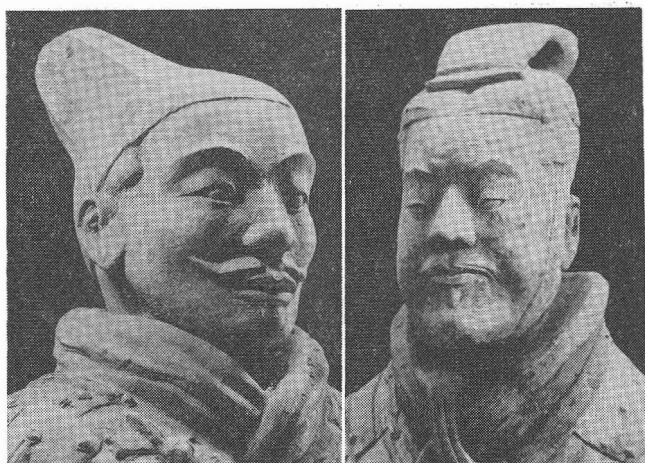


圖10 兵馬俑一號坑出土武士俑（部分）

に體型が餘り大きくなく、脚も短かったのである。いずれにせよ武士俑や陶馬が等身大であるという事實は、實物と同じ大きさに寫すことを目指したという意味で、それ自身一種の寫實的行為の現われといえよう。

しかし何にもまして、これこそまさに寫實と驚嘆させたのは、容貌の表現であった。武士俑の容貌（圖10）をみると、一體として同じものではなく、一體一體個別にその武士特有の個性を入念に表現していた。兵士という内容上の制約と、古代という時代の制約から、どの俑も表情が厳しく硬直し、後世の唐三彩俑にみるような表情の豊かさには乏しいけれども、群像表現にありがちな類型化を拒否し、年齢、階級、性格、種族の違いなどによって生じるさまざまな容貌の違いを、一體一體丁寧に作り分けていた。二十代の若々しい兵士の顔もあれば、五十代の老成した顔もみえる。また一介の兵卒と指揮官の武將とでは、自から威嚴の差が顔附きに現われている。また兵士の性格は、血氣盛んな精悍な者、おっとりした溫和しい者といった風に變化に富んでいる。正確に指摘することは難しいが、顔の

骨格から種族の違いを識別することも可能であろう。この容貌の表現と關連し、頭髮の表現も細かく見ればさまざまである。前から見てもそうであるが、武士俑は一つの完全な立體彫塑として背面にも神經が行届いており、後ろから見れば一層はつきりする。特に冠や帽子をつけない武士俑の頭髮表現（圖11）を見ると、大半は後頭部で辮髪を結い右上に高い髻を結んでいたが、三叉の辮髪の編み方や髻の形と位置がそれぞれ微妙に異なっているばかりか、毛髪もそれぞれ一本一本篋狀の道具で筋がいれられ、どれ一つとして同じものはいなかった。

このように頭髮を含め武士俑の容貌は、どれをとっても實に個性的かつ迫眞的な寫實表現を成就しているが、では、こうし

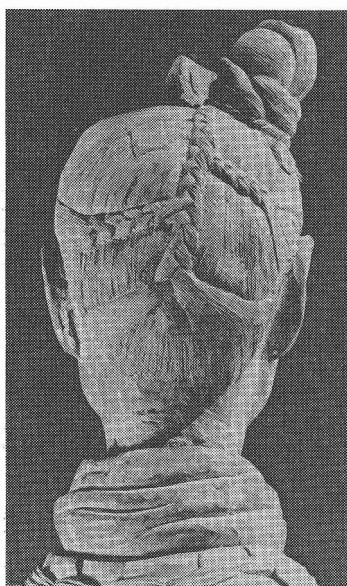


圖11 兵馬俑二號坑出土跪射俑
頭部背面

た寫實はどんな方法によって成就されたのであろうか。中國の彫塑史において全く前例がなく突如出現しただけに、重要な問題である。その問題と關連し、武士俑の顔を幾つか並べて念入りに觀察すると、これらの顔は工匠が想像によって創造したというようなものでは決してなく、現實に存在する雑多な顔をそのまま寫し取ったものではないか、ということに思い當る。容貌にみられた個性は、後世の藝術作品に見るような藝術家の創作過程を経た創造的個性ではなく、その前段階にあるなまの寫生的個性である。先に後頭部の辮髪や髻の表現における異常な執着振りをみたが、それはとりもなおさず、この寫生的方法にあつては頭髮の表現が、創造的方法において最も執心すべき眼、鼻、口などの表現と同等に扱われたことを暴露している。どこまでも寫生的正確さを期した表現といえよう。そして今一つ氣が附くことは、何千體もの個性の作り分けは、本來ならば非常な困難を伴うように思われるけれども、ここでは恰も當然のことの如く、いともたやすく成遂げているようにみえることである。これはある特別な方法を採用したからに違いなく、その歸結として存外容易に成遂げることが出来たのである。そしてその特別な方法とは、いうまでもなくモデルの使用である。實際の兵士をモデルに使い、ひたすらありのまま正確に寫すことを心掛けたために、上述の寫生的個性が生まれたのである。モデルを使わなければ、何千體もの各々異なる顔を作り出すことが心掛けたために、上述の寫生的個性が生まれたのである。モデルを使わなければ、何千體もの各々異なる顔を作り出すことが不可能と思われるが、また使わなかった場合には、人爲的創作を加えた結果として、もっと形式的かつ類型的なものになった筈である。ともかく曾て例をみぬ寫實的な兵馬俑の出現の背景には、これまた曾て例をみぬモデルの使用という方法があつたものと推測される。但し一口にモデルの使用といっても、兵馬俑は何千體もの群像表現であるから、そこに想像を絶した強大な意志と力が働かなければ、到底實現が覺束なかつたことも確かである。

それにしても、陶製でありながらも寫實的な表現は、技術的にどうして可能になったのであろうか。このような大型陶俑の場合、成

型は幾つかの部分に分けて行なうのが普通である。武士俑の場合は、⁽³⁶⁾下肢(脚、腿)、體腔(軀幹)、上肢(臂、手)、頭、そして踏板などの部分に分けられ、陶馬の場合は、脚、尾、體腔、頸部、頭などの部分に分けられた。そして仕事の効率を高めるために、型が用いられた。但し型はあくまで内層(初胎)のみで、その上の外層は、細泥を加えながら細かい彫塑的修飾を施していった。武士俑の頭部を例に説明すると、内層は左右に分かれた合わせ型によって作られ、それに細泥を二層加えたうえ、眼、耳、鼻、口などを刻み出したり貼ったりして、顔かたちを作ったのである。この型による模製と彫塑による修飾こそ兵馬俑制作の特徴をなし、特に細泥を用いた外層の彫塑的修飾によって、あの寫實的な容貌の表現が可能になったのである。恐らくモデルの使用も、外層を作る段階で行われたものと考えられる。

因みにその後の製作方法を述べると、まず出来上った各部を接着し、それから窯に入れて焼成した。焼成温度は、武士俑の場合は攝氏約九四〇度、陶馬の場合は約八〇五度という報告⁽³⁷⁾が出ている。焼成後の俑の表面が固く灰黄色を呈しているところから、還元焰で焼いたものと思われ、窯跡は未だ突き止められていないが、多分山や丘の傾斜した地形を利用した窯と考えられている。また陶馬の横腹もしくは背に直径七—十一cmの圓い孔があき、陶製圓盤でふさいでいたが、これは焼成の際、内外の温度差によって干割れを生ずるのを防ぐためと、中空の胴内部が熱で破裂するのを防ぐための空氣抜きと考えられる⁽³⁸⁾。

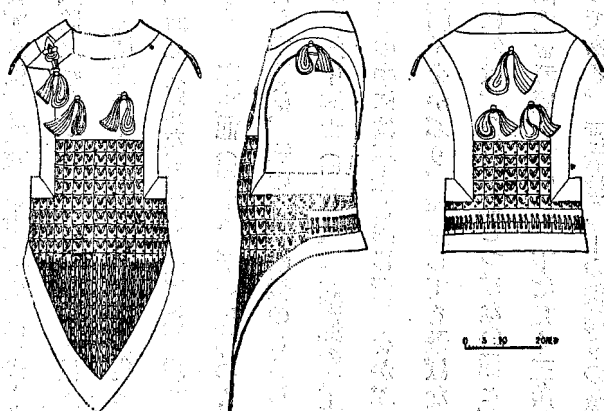
こうして焼上ると、次に彩色の作業に入る⁽³⁹⁾。まず表面全體に膠を塗って、それから彩色を施し、顔料には深紅、茜、淡紅、薄紫、黃、黃土、橙、深綠、淺綠、灰、黑、白などが用いられ、紅、黑、綠の三色を主色としていたという。出土した兵馬俑は、火に遭ったためと、永年にわたる土中での風化のために、彩色が剝落したり変色したりしていたけれども、當初は華麗な彩色が施されていた。特に三號坑だけは火を免れているために、それがよくわかった。鎧甲俑を例にとると、顔や手は淡紅色で、綠色の長襦は襟や袖口に紫色の圖案を施し、黒い鎧は甲釘を白く、緘し紐を紫で裝飾していた。また下は淡い藍色の裋褌をつけ、足には黒い履をはいていた。陶馬は黒色と褐色が主であった。

ところで、兵馬俑の寫實的表現について、特に容貌の表現を考察した結果、實際の兵士をモデルに使った可能性があることを述べたが、更に武士俑の兵士としての服裝も、兵種、階級に應じて、實に嚴密かつ正確に作り分けられていた。軍隊を編成する以上、異った兵種によって構成され、幾つかの階級に分かれて組織されるのは當然のことであるが、それが武士俑の服裝において嚴密に反映されていたのである。まず兵種は、俑の形狀から歩兵、車兵、騎兵の三種に分けられるが、更に冠、帽子、鎧、はきものなどの服裝をみていくと、階級が武將、軍吏、兵卒の三種に峻別されているのは無論のこと、これが兵種と組合わさって、少くとも武將、軍吏、御手、車士、鎧甲武士、長襦武士、跪射式武士、立射式武士、騎兵の九種類⁽⁴⁰⁾の兵士に分けることが可能である。

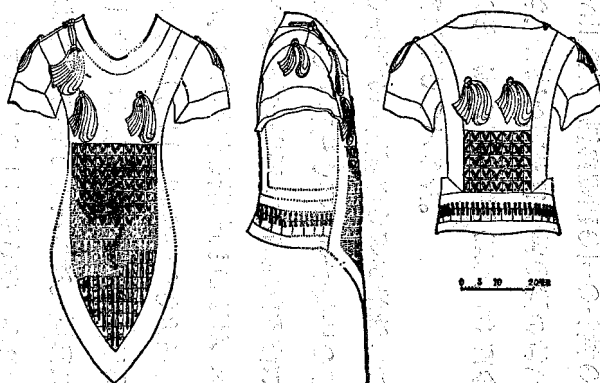
まず冠は、武將、軍吏、御手の全と、車士、鎧甲武士の一部がつけ、その冠には一式と二式の二種類あった。一式冠(圖30)は武將だけがつけ、二式冠(圖28)は上記の武將以外の俑がつけていた。冠は官位のしるしであり、戴冠の者が無冠の者に對して優位に立つことは勿論である。従って一、二式冠をかぶる者は全て何らかの指揮官もしくは上級兵士を示している。一式冠の武將俑(圖19左右、23右、25)は、現在までのところ一、二、三號坑あわせて計六體發見されているが、二式冠をかぶる者は更に多く、軍吏俑(圖20左、23左以外のものとして、特に戰車の御手俑(圖20右、24中、26)全てがつけていたことは注目される。

また帽子は、冠の如く階級のしるしとしてより、寧ろ機能本位に職種に應じてかぶっていた。纓がなく圓い一式帽子は、一號坑の鎧甲武士(圖10左)、二號坑の車士(圖24左右)の一部がつけ、うち車士の場合は、髻の根元の所を紐で縛っていた。二號坑の御手の中には車士と同じ帽子をかぶり、その上から二式冠をつける者がいた。また騎兵(圖6)は朱色の幾何紋をあしらった二式帽子をかぶり、疾驅しても飛ばないように纓がついていた。

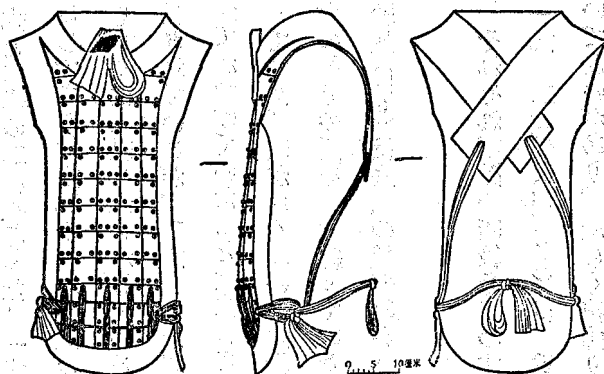
次に鎧は、つける俑とつけない俑とがあったが、およそ七種類⁽⁴¹⁾(圖12、13)に分けられ、それぞれ軍隊の階級を表わすとともに、機能性を考慮していた。下に長く三角狀に垂れ、胸部と背中に小札の綴られていない一式、二式鎧(圖12 a b)は、武將専用のものである。兩者は背中の總飾りの數(二個と三個)、或は腹部の下の小札の數において違いがあり、恐らく總飾りの多い一



a 一式



b 二式



c 三式

圖12 武士備鎧 (1)

式の方がより優位の武將用と考えられる。三式(圖12c)は軍吏備の鎧である。胸腹部は小札を綴り合わせて、その周圍に廣幅の皮製の縁をめぐるせ、背後は幅の廣い帶を襷狀に交叉させたところに特徴があった。軍吏は武將と同じく指揮官であつて戰闘要員ではないから、鎧も機能性より裝飾性が重視され、背部に小札がなかったのである。また四式、五式(圖13a、b)は戰車の御手備の鎧である。腕と手を保護する甲の有無に相違が認められ、甲のない四式は、武將備或は軍吏備が同乗する指揮車の御手(圖20右、26)がつけ、甲のある五式は、兩側に車士が同乗する戰闘用戰車(輕車)の御手(圖24中)がつけていた。五式鎧は後述する一般兵士の鎧(六式)よりも小札が多いうえに、首の左右に頸鎧がつき、腕の甲は轡を執る兩手を護るだけでなく、活動しやすくするために、小札と小札を織し紐で綴り合わせ伸縮自在にしていた。まさに重裝備である。六式(圖13c)は歩兵、

即ち鎧甲武士俑と跪射式武士俑、そして戦車の車士（圖24左右）がつけていた。最も一般的な鎧で、肩には披膊（袖）の甲があり、前後を被う甲の綴り方は、腰から上（上旅）は甲釘を用いて固定し、腰から下（下旅）は緘し紐を用いて可動式になっていた。最後に七式（圖13d）は騎兵（圖6）の鎧である。六式と比べ丈が短かいうえに披膊がなく、總じて騎乗、騎射に適するよう輕便に作られていた。

以上の七種の鎧は、全て綿入れ状の長襦の上に着ていたが、この他に鎧をつけず長襦だけの俑があり、歩兵の長襦武士俑と立射式武士俑（圖14）とがそれである。但し冠の場合と違って、鎧をつけない俑が鎧をつける俑より必ずしも階級が上とは限らず、一式冠をつけた武將俑にも鎧をつけない者（圖19右）があった。いずれにしても、階級、兵種、役割によって、鎧がこれ程嚴然と秩序正しく區別されていたことは注目され、實際の軍隊をモデルとして寫したと同時に、それが特殊な軍隊であったこ

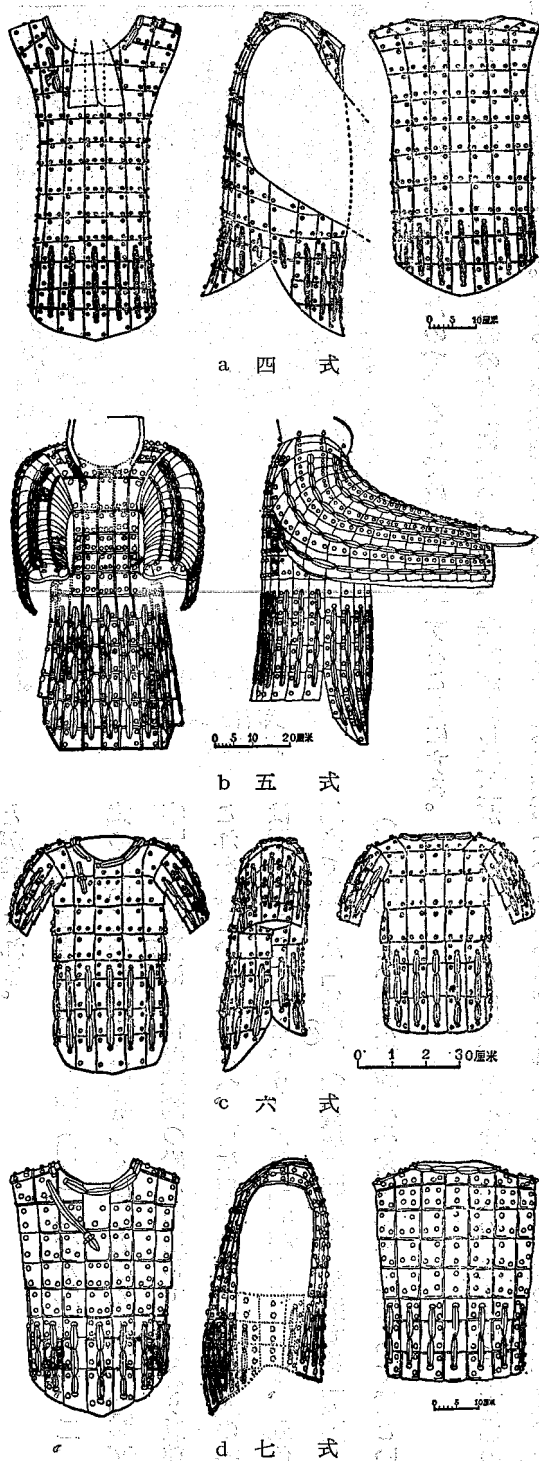


圖13 武士俑鎧(2)



圖14 兵馬俑二號坑出土立射俑
高 178cm

とが推測される。

また、はきものは四種類(圖15)に分かれる。一、二、三式の浅い靴を古代では屨もしくは履と呼んだが、「説文解字」段玉裁注に⁽⁴²⁾、晉の蔡謨の説を引用して、漢より以前はこれを屨といったと述べ、更に周末の諸子及び漢人の書では履(屨)とあるという。また「雲夢秦簡」には、五色の絹糸で織った「錦履」⁽⁴³⁾(法律答問)や、後述する「秦綦履」(封診式)といった言葉がみえ、既に秦において履という

言葉が確實に使われていたので、ここでは履で統一することにする。

さて、一式と二、三式は紐の有無に違いがあり、先端が少し跳上がった一式の方口翹頭履(圖15b)は、武將俑と軍吏俑の指揮官だけはいっていた。恐らく非戦闘要員であるから紐を結ぶ必要がないのである。これに對して二、三式の履は、踵の上邊近くから二本の平紐が出、兩側の孔を通して足首の前で結ばれていた。先端が少し尖った二式の方口翹尖履(圖15c)は御手、先端が平らな三式の方口齊頭履(圖15d)は車士と、立射式武士俑を除いた歩兵、即ち鎧甲武士、長襦武士、跪射式武士俑がはいっていた。また四式(圖15a)は、以上の三つの形式と異なり革製である。このような革製の靴については、「説文解字」⁽⁴⁴⁾に、

鞮は革の屨なり。胡人の屨の脛に連なる、これを絡鞮と謂う

とあるように、浅いものを鞮、深いものを特に絡鞮と呼んだ。四式の革靴は明らかにかなり深いので、絡鞮ということが出来、騎馬の風習とともに胡人から伝えられたものと思われる。兵馬俑でこれをはいていたのは、騎兵俑(圖6)と立射式武士俑(圖14)であった。

ところで、武士俑のはきものに關して一つ注目されるのは、「雲夢秦簡」に登場する秦綦履と呼ばれるはきものである。二

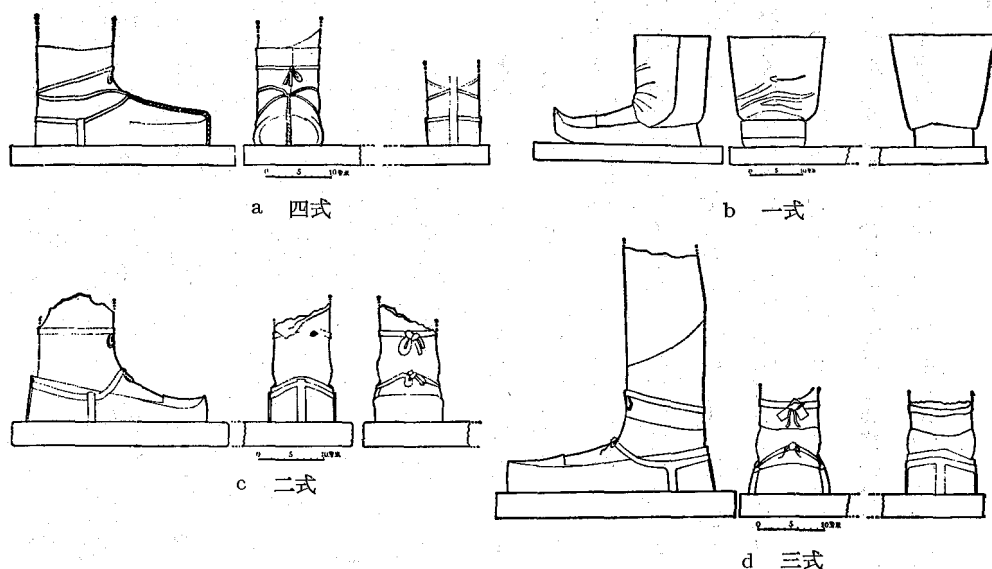


圖15 武士俑はきもの

號坑の第一區で出土した跪射式武士俑(圖5)は、跪射の姿勢をとり、左膝を立てて右膝を地につけ、右足の履の裏側を後ろに向けていたが、驚くことにどの俑も履の裏(圖16)には、穀物の粒狀の紋様が、一つ一つ丁寧に何列にも並べて表わされていた。これは兵馬俑が如何に細部まで細心の注意を拂って表現していたかの一つの證明であるが、それだけに止まらず、滑り止めであると同時に一種の飾りでもあるこの紋様は、當時綦と呼ばれ、更に綦のついた履を秦綦履と呼んだことが、「雲夢秦簡」によって知れたのである。「雲夢秦簡」封診式は、「穴盜」についての興味深い「爰書」⁽⁴⁶⁾をのせている。これは強盜が壁に穴をあけて家に押入り、側房に置いてあった「結衣」(綿入れ)を盗んだ事件を記した一種の調書で、その中で事件を擔當した「令史」(役人)は、秦綦履をはいた強盜の足跡について次の如く報告している。

外の壤に秦綦履の迹四か所あり、表さ尺二寸なり。その前の稠なる綦は表さ四寸、その中央の稀なる者は五寸、その踵(踵)の稠なる者は三寸なり。その履の迹は故履に類す。

即ち強盜がのこした足跡を調査した結果、強盜のはいた靴が秦綦履であり、長さは一尺二寸、そして裏の綦の紋様に稠密な部分と稀らな部分とがあり、稠密な爪先と踵の部分は、それぞれ幅が四寸と三寸、稀らな中央の部分は五寸あったというのである。興味深いことに、爰書のこの部

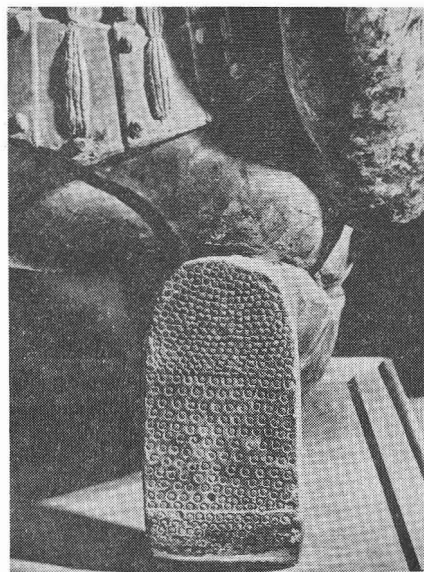


圖16 兵馬俑二號坑出土跪射俑履（裏側）

ることを證したものととして、甚だ貴重といえよう。

以上、武士俑の服裝を、冠、帽子、鎧、はきものについてみてきたが、これによって武士俑は、武將から軍吏、兵卒に至る階級秩序、或は各階級内部での一層細かい上下關係、また歩兵、車兵、騎兵の三兵種の擔う機能、或は各兵種内部での役割分擔が、服裝を通して明瞭に表わされていることがわかった。服裝をみただけで、階級間の縦の關係、兵種間の横の關係がはっきりみてとれ、それらを組合わせて軍隊という一つの整然とした組織が形作られていたのである。従って兵馬俑は全き意味で厳しく統制のとれた一つの軍隊であり、それは實際の軍隊と何ら變る所がないといっても過言ではあるまい。従って、先に個々の武士俑について、實際の兵士をモデルに使った可能性を指摘したが、群像としての兵馬俑全體も、實際に存在した軍隊をモデルに使って表わしたのではあるまいか。一體一體モデルを使って表わした何千體もの兵馬俑を、當時の軍隊組織にそのままなぞらえて配列したのではあるまいか。一體一體兵士をモデルに寫したことが事實ならば、これは當然あり得ることである。

分の報告は、跪射式武士俑の履の裏側（圖16）にそのままあてはまる。確かに中央の土踏まずの部分は綦の紋様の並び方が稀らで、かつ最も幅が廣く、これに對して爪先と踵の部分は紋様が稠密で、かつ幅が狭く、全體に三部分の五寸、四寸、三寸という比も、ほぼ當を得ている。つまりこれによって跪射式武士俑のはく方口齊頭履は、この履の裏側についてみる限り、「雲夢秦簡」の記す秦綦履とそっくりであり、當時秦綦履と呼ばれたことがわかる。このことは、極めて部分的とはいえ、兵馬俑が當時の秦の第一次史料によって裏附けられたこととして意義深く、また兵馬俑が單に寫實的であるだけでなく、當時の秦の風俗を正確に寫してい

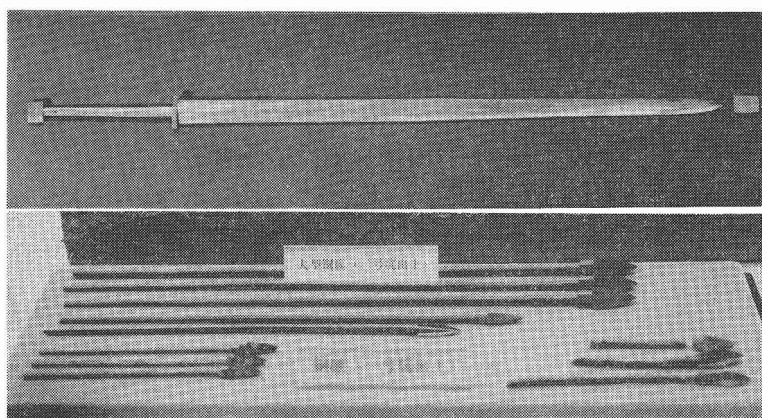


圖17 兵馬俑坑出土武器
(上) 銅劍(一號坑)長 91.5cm
(下) 銅簇(一、二號坑)

このように兵馬俑の寫實は、實際の軍隊をモデルとして、それをそのまま寫した實に即物的な寫實ということが出來、そのことを更に顯著に示すのが、武士俑の持つ武器が實戰用武器であつたという事實である。武士俑の裝備は、鎧は陶俑の一部として彫塑的に表わされていたけれども、武器だけは手に手に青銅の實戰武器を持っていたのである。とはいつても、發掘した時、全ての武士俑が武器を所持していたわけではなく、二號坑を例にとると、十八箇所を試掘した結果、歩兵俑が一六三體、

戰車十一輛、車兵俑二八體、騎兵俑三二體出土したにもかかわらず、武器は、銅鏃が一四六三件と稍や多かつたものの、その他は弩機六件、鉞一件、劍(破片)五件が出土したに過ぎなかつた。これは兵馬俑が發かれた時、武器が貴重な戰利品として持ち去られたためとみられ、當初はどの武士俑も武器を手にしていただけと思われる。少なくとも、兩手に轡を握る御手俑を除けば、どの武士俑も手に武器をとる動作をしており、武器を所持させるのが當初の計畫であつた。

これまで、一、二、三號坑から出土した武器の種類を挙げると、弩機、弓、銅鏃(圖17下)、劍(圖17上)、吳鉤、矛、戈、戟(圖18)、鉞、父(圖27)、鉞、標槍などがあり、他に樂器ではあるが、戰車に掛けて鳴らした甬鐘二件(圖21)も一號坑から出土している。このうち吳鉤は、兩面刃をもつた長さ六五・二cmの一種の彎刀であり、鉞は長さ約三五cmで短劍或は矛に似るが、薄く柳葉狀の身と扁平な莖が特徴で、これに柄をつけて突き刺すのに用いた長さ三・八mもの長兵である。また標槍は長さ二五・五—二六・五cmで、先端が筆の先のような形をし、一種の投擲武器として用いられた。

これらはいずれも正真正銘の實用武器で、秦の中央官署で作られたものであつ

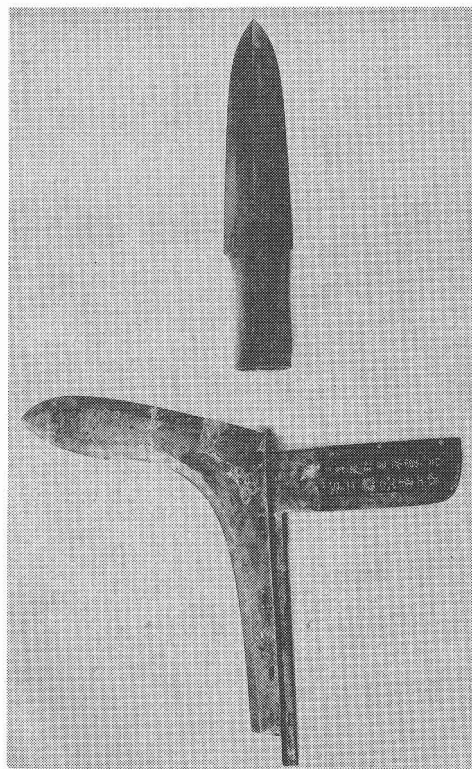


圖18 兵馬俑一號坑出土戟並びに鉞

た。即ち「雲夢秦簡」工律に、^{③2}

公の甲兵は、各々その官名を以てこれに刻久し、その刻久すべからざるものは、丹もしくは髹もてこれを書け

とある通り、秦では官の武器は刻銘することを厳しく義務づけていたが、出土した武器の一部にも銘が刻されていた。例えば一號坑^{③3}から出土した銅戟の戈の内の部分には、「三年相邦呂不韋造寺工讐丞義工寫」と刻銘（圖18）があり、同じく一號坑^{③4}から出土した銅鉞には、「十七年寺工鯨工寫」と刻銘があった。前者は統一前の秦始皇三年（前二四四）、丞相呂不韋を督造者として、寺工という官署で、工師讐を責任者に、義が丞（工官長）となって、工の寫が作ったことを示す。また後者は秦始皇十七年（前二三〇）、同じく寺工で、工師鯨を責任者に、工の寫が作ったことを示している。^{③5}寺工という官は文獻にみえないけれども、秦の刻名をもつ武器や車馬具、雜器に散見し、それらを総合すると、始皇帝の代になって初めて置かれ、宮廷のために武器や車馬具や生活用品を製作し、先述の磚瓦燒造機關の寺水や宮水と同じく、少府の屬官であったと考えられる。また上述の戟と鉞では工の寫が共通するが、工師の讐、丞の義も秦刻銘武器にたびたびみられる名である。因みに兵馬俑坑出土の武器で最も古い刻銘を有するのは、上引の秦始皇三年（前二四四）相邦呂不韋戟であり、最も新しいのは秦始皇十九年（前二三八）の寺工鉞であった。いずれにせよ武士俑の所持した武器は、紛れもなく秦のもので、現在判明している限りでは、統一前に秦の中央官署の寺工で作られた本物の武器であった。そしてこのように武士俑が秦の武器を攜帶していたという事實は、モデルに使われた兵士が當時の秦の兵士であり、軍隊も當時の秦の軍隊であったことを確證する。

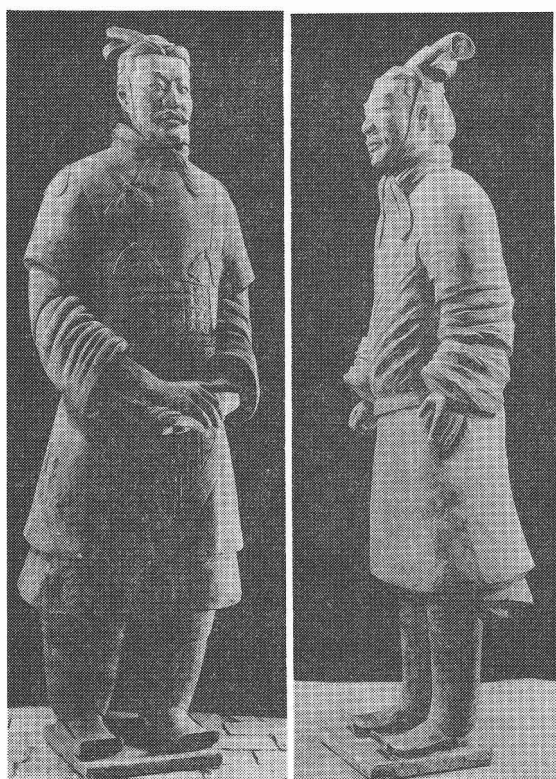


圖19 兵馬俑一號坑出土武將俑

しかし、實用武器を所持するとは、尋常でない。こうした俑の場合、俑自體が陶製であれば、その所持武器も陶製にするか、或は木製等のものによって代用するのが普通であるが、それをせず敢て高價な實用武器をあてがったのである。これは兵馬俑の寫實に對する異常な執念を示すことは勿論、その寫實が藝術的創造よりも、即物的再現を狙っていたことを暴露しよう。ここではあくまで實物の再現が至上目的であり、そのためには高價な實用武器の攜帶も辭さなかつたのである。そして實用武器を導入すれば、兵馬俑自體も等身大であることが要求され、また容貌も服裝もそれに見合つた高度の寫實が要求され、ここに秦の軍隊をモデルにした實物そのままの巨大な兵馬俑が誕生したのである。

このような陶俑群は、勿論大きさの點でも數量の點でも、また迫真性の點でも、陶俑の歴史、更に廣く俑の歴史に照しても、全く空前のことである。これまで陶俑といへば、最も古いものは、安陽殷墟第十五次發掘（一九三七年）の際、小屯窖穴（YN³⁵⁸）から出土した三體の男女俑で、男は後、女は前に手械（桎）をはめられていた。造形は至って簡略で、頭部も目、鼻、口を識別出来るに過ぎない。そしてその後、春秋に至るまで確かな出土例は殆んどなく、春秋末期の山東臨淄郎家庄一號殉人墓⁽⁵⁸⁾、戰國の山西長治分水嶺十四號墓⁽⁵⁹⁾で小型の陶俑が發見された程度である。前者は九人の殉死者を伴つた大型墓の陪葬坑から出土し、高さ一〇cm程の男女俑數體が舞蹈するさまに表わされていた。また後者は高さ5cm程度の素朴な立俑、坐俑

が十八體出土し、顔の作りは鼻筋を表わすだけだが、子供を抱いたり背負ったり、或は舞ったり拱手したりの動作をしていた。また最近では、陶俑ではないけれども、陝西銅川市北關郊區で春秋戰國時期の秦人墓が發掘され、高さ一五—一八cmの彩繪泥塑俑が數體出土したという報告も出て⁽⁶⁰⁾いる。以上が殆んど全てであり、これらをみても兵馬俑が如何に劃期的であつたかわからう。

但し、俑一般の出土例となると、もう少し件數が多く、特に南方の楚では、戰國の木俑が多數出土している。例えば信陽長臺關楚墓からは、高さ六四cmと六二・七cmの舞蹈俑（一號墓）、佩玉をしていた男俑一對（二號墓）などが出土し、⁽⁶¹⁾これらは木胎に漆で彩色していた。また長沙仰天湖二五號楚墓からは、高さ五〇—五三cmの彩繪を施した女侍俑、武士俑各四體⁽⁶²⁾が出土し、武士俑は木製の戈や劍を手にしていた。

元來、俑は副葬用の模型である明器の一種であり、殉葬の代用品である。古く殷代には王や貴族の埋葬には大量の殉死が行なわれ、例えば殷後期の大型墓である安陽殷墟侯家庄一〇〇一號墓では、墓の内外に一六四人もの殉死者（牲人を含む）を埋葬していた。その後、西周は勿論、春秋、戰國初期の大墓でも依然として殉葬が行なわれ、戰國初期の湖北隨州擂鼓墩曾侯乙墓⁽⁶⁴⁾では、二人の若い女性を陪棺内に殉葬していた。また秦國でも依然として行なわれ、穆公が死んだ時（前六二一）には、從死者が一七七人にも⁽⁶⁵⁾のぼり、從死した秦の良臣三人を哀れんで有名な「黃鳥」の詩が作られたが、⁽⁶⁶⁾實際に春秋の陝西鳳翔八旗屯秦墓⁽⁶⁶⁾では、八基の墓から二十人の殉葬奴隸が發見され、戰國初期の鳳翔高庄秦墓⁽⁶⁷⁾では、四基の墓で、殉葬奴隸と從葬者を區別して計八人の殉葬者が發見された。秦國のこれらの墓は、圓形の穀物倉を象った陶甕や、双轆の陶製牛車などの明器を出すことも、極く早い例として特徴的である。しかし漸やく文明の發達とともに殉葬の風習も廢れ、秦國では、戰國中期の獻公元年（前三八四）、從死禁止令が出て⁽⁶⁸⁾いる。そしてこれに代って、先にみた如く既に春秋の頃から、人間を象った木俑や陶俑が登場したのである。「禮記」檀弓下にも、

孔子 芻靈をつくる者は善しと謂い、俑をつくる者は不仁、人を用いるにちかからずやと謂えり

とあるように、孔子の活躍した春秋の時代には、既に相當現實味を帯びた俑が作られていたことがわかる。しかし孔子自身の考えは、殉死を思い起させる現實味のある俑を嫌い、俑を含めて明器は、實用に適さず不完全なものを善しとした。「禮記」檀弓上に、

この故に竹は用を成さず、瓦は味を成さず、木は斷を成さず、琴瑟張るも平ならず、竽笙備うるも和さず、鐘磬あるも簨簴なし。その明器と曰うは、これを神明にすればなり

と述べる通りである。つまり死者を生とも死ともつかぬ神明扱いにして、中途半端な不完全さによって、その不思議さを象徴したのである。こうした考えが當時どれだけ普及していたかは正確にはわからないけれども、出土資料に徴する限り、大型の現實味を帯びた俑が出ていないので、ある程度當時の考え方を代辯していたといえよう。しかるに戰國の頃から再び厚葬の風習が起こり、俑こそなお小型であつたけれども、副葬品がますます豪華になるとともに、大型の車馬坑などが盛んに作られるようになった。始皇帝はこうした機運を受け繼いで、また一方でこれまでの因習を大膽に打破して、あの寫實的な現實味を帯びた大量の兵馬俑を作つたのである。

四 兵馬俑と秦の軍隊

さて、前節での考察によって、兵馬俑が秦の軍隊をモデルとして實物そのままに寫していることがわかつた。この節ではそれを更に補足するとともに、一層論を進めて、寫したとするならば、一體秦のどの軍隊を寫したのか、一、二、三號坑の各坑について、布陣の仕方と指揮系統を中心にみながら考察してみたい。

まず、一號坑は歩兵を主體として六千體以上の武士俑から成る大軍陣である。歩兵は長襦俑と鎧甲俑の二種類あるが、全體からすれば長襦俑の数は少なく、東向きの前列を占めるだけである。即ち南北の側廊は別にして、東側の長廊部分の三列横隊



圖20 兵馬俑一號坑第十過洞戰車乘員俑
(左)軍吏 (中)甲士 (右)御手

と、内側の九條の過洞（但し、側廊を含め南から数えて第三、五、九過洞を除く）の前列に、三列ないし八列を占めていた。特に長廊の⁽⁷¹⁾一列六六體から成る三列横隊は、一號坑全體の先鋒を形成し、先鋒であるが故に身を軽くするため鎧をつけていない。この三列横隊は弩或は長兵武器を持っていたが、隊としての纏まりを有し、第二列左右兩脇の二體の鎧甲俑⁽⁷²⁾によって統率されていた。長廊内で発見された二本の劍は、指揮者の攜帶武器として、この鎧甲俑のものと思われる。

そして東側長廊部分を先鋒とすれば、後尾に位置する西側長廊部分の三列横隊は後衛、南側と北側の側廊部分の二列縦隊は側翼衛隊となる。⁽⁷³⁾西側長廊の最後列は反對の西を向き、兩側廊の外側の一列もそれぞれ外を向き見張っていた。そして残りの九條の過洞の三六列縦隊がこの軍陣の本體である。第二、三、五、七、九、十過洞の東前列寄りには、それぞれ戦車一輛、計六輛が配され、木製の車體は朽ち果てていたが、各々三體の乗員俑

（圖20）がその後ろに立っていた。

この六輛の戦車は戦闘用の一般戦車ではなく、歩兵の指揮車とみなすのが妥當である。現在わかっている限り、六輛のうち二輛には指揮者として武將俑が乗り、他の二輛にも軍吏俑が乗っていたからである。二體の武將俑は南側の第二、第三過洞に片寄り配されていたが、各々服裝と戦車の形式を異にし、第三過洞の武將俑⁽⁷⁴⁾は一式冠、一式鎧をつけ、車上に圓形華蓋をつけ甬鐘を掛けた戦車に乗るのに對して、第二過洞の武將俑⁽⁷⁵⁾は一式冠をつけるが鎧をつけず、車蓋も甬鐘もない戦車に乗っていた。また軍吏俑の乗る戦車は、第七、第十過洞⁽⁷⁶⁾（圖20）の戦車に見る如く、他に御手と車士（甲士）が乗り、うち一輛の



圖21 兵馬俑一號坑出土銅甬鐘
高 27 cm

戦車の附近から甬鐘が発見された。武將俑の戦車にも御手と車士が乗っていた筈である。甬鐘(圖21)は高さ二七cm、變形夔鳳紋で飾られ、戦車に掛けて鳴らし歩兵に號令した。このように一號坑の戦車はどれも指揮者が乗り、そのしるしとして右手に劍を握る動作をしていたが、指揮者相互にも上下の秩序があり、車蓋附きの戦車に乗った武將俑が優位の指揮者と思われる。この他、一號坑からは武將俑が、現在までのところ、もう二體出土したことが判明している。一體(圖19左)は本體の前列中央附近⁽⁷⁷⁾で、歩兵に雜って発見され、一式冠、一式鎧をつけ、劍をつき腹の前で兩手を組んでいた。堂々たる體格の威嚴に満ちた武將俑であった。しかしもう一體は現在修理中で、どこで発見されたかも不明である。いずれにしても一號坑の歩兵の軍隊は、戦車に乗った武將俑が指揮する一方、戦車に乗らない武將俑によっても指揮されたことが、これでわかる。

この歩兵主體の一號坑に對して、二號坑(圖22)は歩兵、戦車、騎兵を組合わせた混成軍である。まず前面に當たる東北端の第一區は、全體として方陣をなし、弓を持つ跪射式鎧甲俑を内側の過洞、弩を持つ立射式長襦俑をまわりの環廊に配した歩兵部隊である。立射式俑(圖14)は足を廣げて前足と後足を直角にし、今まさに弩を射かけんとする姿勢をとり、跪射式俑(圖5)は左膝を立てて右膝を地につけ、弓を豎にして、右脇にまわした左手は弓杆、後ろの少し下げた右手は弦をつかんで、待機の姿勢⁽⁷⁹⁾をとっていた。この方陣の指揮者は、西側環廊内の第四過洞後方に當る場所におり、左側に一式冠と二式鎧をつけ、劍を

ついて兩手を組む動作をした武將俑(圖23右)が立ち、右側に副官の軍吏俑(圖23左)が劍を握る動作をして立っていた。武將俑の旁からは、特大の劍の鞘の頭部が発見されている。

次に南側の二、三區は戦車の部隊で、うち二區は計六四輛の戦車だけから成るのに對して、三區は十九輛の戦車と、各戦車の後ろに従う八體から三六體の歩兵(徒)俑から成っていた。戦車は中央に御手、左右に六式鎧をつけ長兵を持った車士二の計三體(圖24)

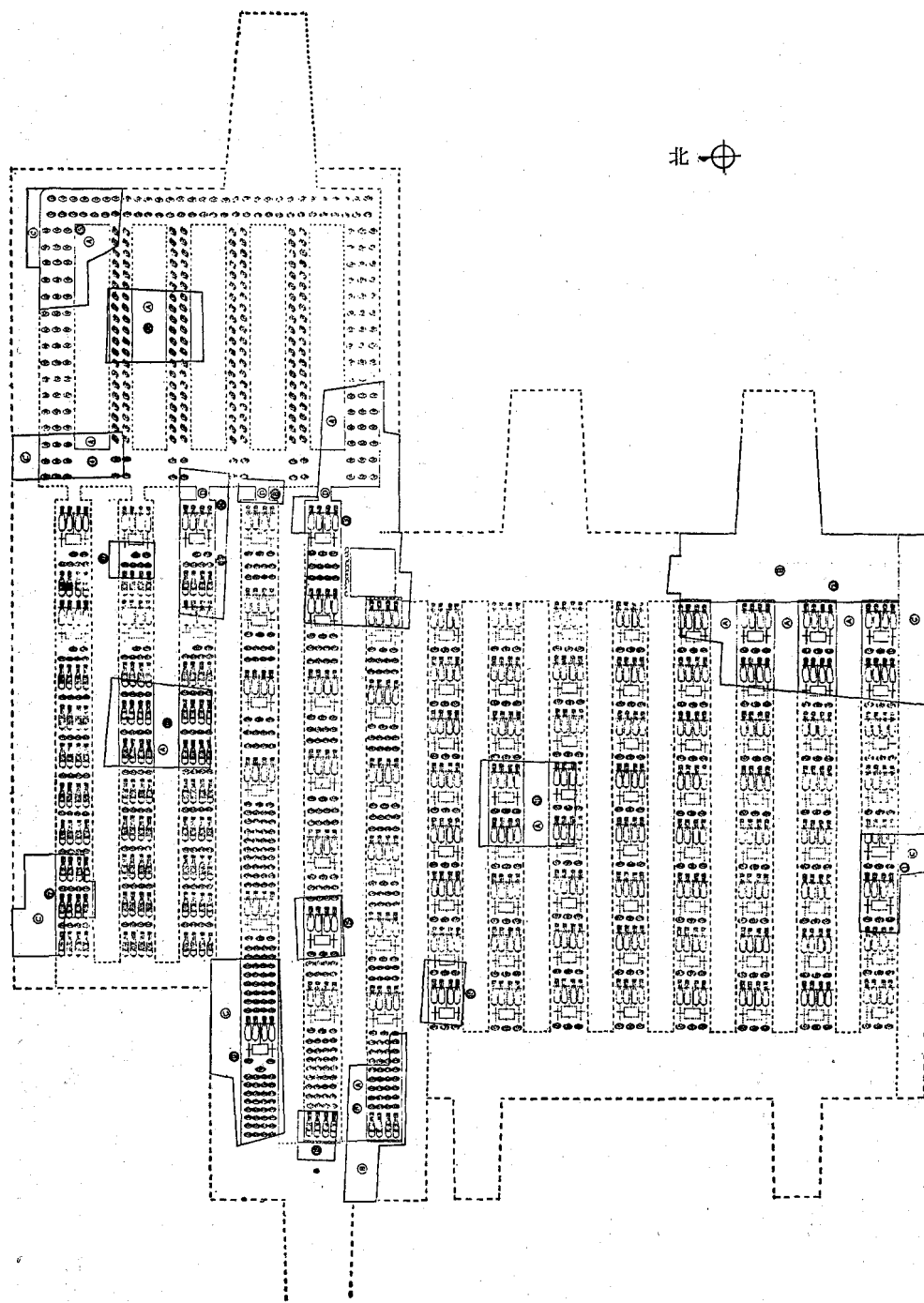


圖22 兵馬俑二號坑平面圖



圖23 兵馬俑二號坑出土指揮官俑
(左) 軍吏俑 (右) 武將俑 高 196cm



圖24 兵馬俑二號坑出土戰車乘員俑
(中) 御手 (左右) 車士 高 190cm

が乗り、特に二區 (T15) の戦車の旁らからは、強弩に用いた長さ四一cm、重さ約一〇〇gの大型銅鏃(圖17下、重さ二・一五kgの銅鏃、そして戟類の長兵につけた四・三mの木柄とその後端の銅鏃が発見された。⁽⁸⁰⁾これらの戦車は一號坑の指揮車と異なり、敵陣に突撃して長兵を揮い馳射する戦闘用戦車で、「周禮」春官 車僕の鄭玄注に、
輕車はもって敵に馳せ師を致す所の車なり

とあるように輕車と呼ばれ、その名は「雲夢秦簡」秦律雜抄にも登場する。御手が轡を握る手を手甲で、首を頸鎧で嚴重に保



圖25 兵馬俑二號坑出土武將俑
高 196 cm

將俑、右に四式鎧の御手俑、そして後列に二式冠をつけた車士を配し、刻銘の矛が発見された。

四區は騎兵主體の部隊で、三條の過洞に合計一〇八騎配されていた。鞍馬(圖6)はまだ蹬がなく、背に韁を置いて肚帶で固定し、その上に革製の鞍を置いていた。そして騎兵は鞍馬の左前に立ち、右手に轡、左手は半ば握って弓を提げ持つ動作をしていた。騎兵俑の足下で八〇本から一〇〇本の矢の束をいれた簞が発見され、また旁らで弩機も見附かった。弓または弩を騎射したのである。但し四區は騎兵だけでなく、前方に二列に分れて計六輛の戦車が配され、これらの戦車には右に軍吏俑、左に四式鎧の御手(圖26)が乗るだけであった。従ってこれは戦闘用の軽車ではなく、一種の指揮車であり、或は二列の戦車の間に騎兵が一行夾まり互いに密接であるところから、騎兵部隊に屬してこれを指圖する指揮車ではあるまいか。部將俑であれ軍吏俑であれ、指揮官の服裝は騎乗向きではなく、騎兵を指揮するとなれば、戦車に乗る以外に手はないと思うからである。

最後に三號坑(圖7)は、先に指摘したように、一、二號坑と全く性格を異にした部隊であった。一號坑の三七分の一という大きさもさることながら、何よりも南側長廊入口と北廂房入口の二箇所、木製門楣に帷幕をかけた跡が発見された如く、一、二號坑の野外の軍隊と異なり、屋内の部隊を表わしていた。従って武士俑の配列の仕方も獨特で、まず南側の長廊と、甬道、

護するのも、戦闘用の軽車にふさわしい裝備である。また三區の軽車に従う歩兵は、徒もしくは歩卒と呼ばれた⁽⁸²⁾。では、この二、三區の戦車部隊の指揮者がどこに配されていたかという、或は今後の發掘次第では二區からも発見されるかもしれぬが、三區の北側過洞の最後尾戦車に乗っていた武將俑(圖25)がそれである。この指揮車は、前の列左に一式冠と一式鎧をつけた武旁らから武將俑の劍の柄、車士用と思われる「寺工」



圖26 兵馬俑二號坑出土戰車御手俑 高 190cm

前室、後室の三つに分かれた南廂房とをみると、長廊と甬道の武士俑十四體は、壁際に半分ずつ分かれて互に向合って立ち、恰も通路の警衛をしているかの如くであり、前室と後室においても、やはり左右二手に分かれて向合った二八體の武士俑は、何か待機しているかのようである。また北廂房は、一番東側の二體の武士俑が東面するのを除き、二〇體の武士俑は半分ずつ二列に分かれて向合っていた。これも何か待機しているかのようであった。

しかしここで最も注目すべきは、北廂房から銅爰二〇件(圖27)が発見されたことである。報告によると、三號坑から銅爰が全部で三〇件出土し、うち二〇件は一束になって北廂房の北壁寄りで見えたとした。銅爰は圓筒形をして、長さ一〇・五cm、徑二・三cmで、先端が三稜錐状をなし、なお一mの木柄残骸がついていたという。爰の出土例としては、他に戰國初期の湖北隨州擂鼓墩曾侯乙墓から、先端が三稜の矛形で、長さ三・二九—三・四mの柄附きの爰七件が出土し、うち一件には「曾侯乙之用爰」と銘があった。また同じく戰國中期の湖北江陵天星觀一號楚墓からは、割り竹(積竹)の柄のもの四件、木質の柄のもの二件が出土し、いずれも柄の長さは三・四—三・五五mあり、一端に圓形の銅帽、一端に八稜の銅鐃をつけていた。この爰の用途については、「説文解字」に⁽⁸⁶⁾

爰は杖を以て人を殊つなり。周禮に、爰は積竹を以てし、八觚、長さ丈二尺、兵車に建つと。旅賁は以て先驅す

とあり、また「詩」衛風 伯兮⁽⁸⁸⁾に、

伯や爰を執り、王のために前驅す

とある。即ち王の行列の先拂いに用いる一種の儀仗用武器で、引用の「周禮」(考工記)に、竹材を貼り合せ、長さ一丈二尺(二七〇cm)というのは、上述の天星觀一號楚墓のものとはほぼ似る。しかし三號坑の場合、曾侯乙墓と同じく三稜で、これに長い木柄をつけ

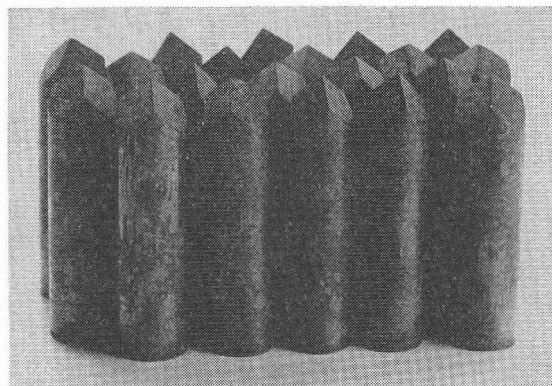


圖27 兵馬俑三號坑出土銅矢 長 10.5cm

て用いたものと考えられる。いずれにせよ、三號坑から矢が多數發見されたことは、これらの武士俑が儀衛武士であることを示し、特に北廂房の場合、銅矢の出土件數二〇と、互に向合った武士俑の數二〇とが合致し、しかも矢が束ねて置いてあったということは、これらの儀衛武士が屋内では矢を攜帶せずに待機していたことを物語る。

待機中であることは、車馬房の戦車も同様である。戦車は門道を進むとすぐ正面に配され、車の後ろに四體の乗員俑が立って、恰も現代消防署の消防車の如く、直ちに出勤出来る態勢をとっていた。乗員は前列一、後列三に分かれ、前列の一體は鎧甲武士俑、後列は左が御手俑、中が軍吏俑、右が長兵を持つ動作をした車士俑であった。一輛に四體の武士俑が乗るのは、現在までのところ、この戦車だけであるが、圓形華蓋をつけ車體に漆の彩繪を施していた點は、一號坑の武將俑の乗る指揮車と同じであった。但し後者は方形車輿（廂）の幅一五〇cm、奥行き一二〇cmと更に大きく、こちらは奥行き約一〇八cmで、幅は一m以上としかわからなかった。それはともかく、この戦車は指揮車であり、何か事があれば、指揮者の軍吏が待機中の兵士達を率いて出勤したものと思われる。

このように三號坑の兵馬俑は、明らかに野外の戦闘部隊ではなく、詰所の如き所に待機する儀衛關係の兵士達と思われる。三號坑については、帷幕をかけた跡が發見されたことから、これを直ちに軍幕もしくは幕府とみなし、一、二號坑の大型軍陣を指揮する指令部とする説⁹⁾が出た。しかしこの説にとって致命的な缺陷は、三號坑から武將もしくは武將以上の指揮官の俑が遂に發見されなかったことである。また銅矢が多數發見されたことは、これを持つ武士俑が儀衛部隊であることを證しても、決して指令部とする證しにはならないのである。

以上、兵馬俑一、二、三號坑の各坑について、その布陣の仕方と指揮系統をみてきた。これによって、先に兵馬俑の服装を通してみた細かく分れた階級が、軍隊として秩序正しく、また歩、車、騎の三兵種が、軍隊として機能的に編成され、兩者を複雑に組合わせて有機的な纏まりある軍陣を構成していることがわかった。そしてこれ程大型の軍陣を構成しながら、こうした俑の群像表現にありがちな簡略化、類型化がみられないのも大きな特色であった。例えば、第二號坑の三區の場合、戦車に従う歩卒の数は八、二八、三二、三六體と一定でなく、四區の騎兵部隊も、わざわざ戦車を雑えているといった風である。これらの構成はまさに實際の軍隊そのままに違いない。こうして兵馬俑が當時の秦の軍隊をモデルに寫した可能性は、ますます強まる一方である。

それでは寫したとするならば、兵馬俑は一體秦のどの軍隊をモデルとして寫したのであろうか。これこそ兵馬俑の核心に觸れる問題であり、兵馬俑研究の一つの歸着點もここにある。この問題と関連し、兵馬俑坑の發掘に従事し、數々の有意義な研究成果を發表している袁仲一氏は、兵馬俑坑は始皇陵の東側にあって、京師咸陽に駐屯する宿衛軍を象徴しているようだという⁽⁹²⁾。そして更に續けて、一號坑の軍陣は宿衛軍の右軍、二號坑は左軍、未完成の廢棄坑は中軍だとし、殘った三號坑は以上の右、左、中の三軍を統帥する幕府だという。確かに「史記」秦始皇本紀には、二世皇帝元年（前二〇九）のこととして、

盡くその材士五萬人を徴して、咸陽に屯衛となし、狗馬禽獸を射るを教えしむ

とあり、始皇帝の死後、二世胡亥が咸陽の守りを固めるために屯衛五萬人を徴集したことが記されている。また「漢書」百官公卿表によれば、秦の官制に中尉の官があり、京師の警備を掌った。この中尉の率いる軍は漢代には北軍と呼ばれ、長安並びにその近傍の地域の兵とを交代番上させて、長安並びに内史地區の警備に當らせた。袁仲一氏は、この京師防衛のために駐屯する宿衛軍を兵馬俑坑の軍隊に當てたのである。この見解は、兵馬俑を單に寫實的であるとするとするに止めず、更に一步踏み込んで、實際の秦の軍隊に引當てた點に意義があったけれども、その檢證が嚴密さを缺いていることは否めない。

そこで、ここでは兵馬俑を秦の兵制と関連させながら、更に詳しく考察することにしよう。まず兵馬俑全體の印象として、

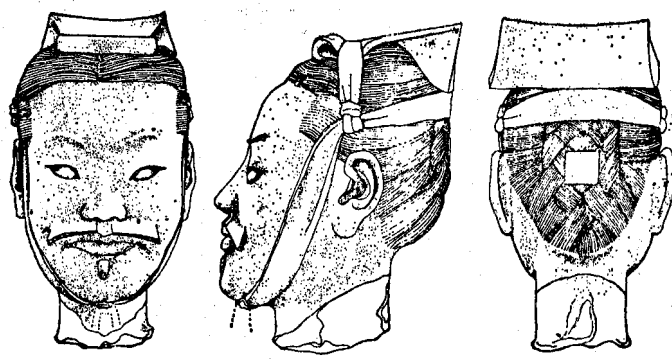


圖28 武士俑二式冠

宮城の警衛に當たる近衛兵ではないかという推測が成立つ。等身大の俑として、身長一・七五—一・九六mという武士俑の體格は、當時の徵兵制による一般兵士としては立派に過ぎ、宮城の警備に當てるため、多くの兵士の中から特に體格のよい者を選びすぐったのではないかと思うのである。また兵馬俑の裝備、服裝をみると、元來西方出身のそれ程豊かでない秦の軍隊としては、階級、兵種に應じて餘りに整い過ぎているのを始めとして、そこに裝飾過剰が認められ、實用性本位の一般軍隊より、儀仗的機能を併せもった近衛兵にふさわしいと考えるからである。例えば、上述の如く、一號坑や三號坑の戰車の車廂には、漆の彩繪圖案が施され、鎧も、武將俑の披膊や胸腹部の緣、或は軍吏俑の背部の襷狀帶には、幾何紋の彩繪が施されていた⁽⁹⁵⁾。

しかし、兵馬俑を近衛兵とみなす一層有力な根據は、武將俑、軍吏俑などが冠をつけていたことと、その二種類の冠の性格である。兵馬俑の大きな特徴の一つとして、既に殷代から戰爭の際には冑がさかんに着用されており、ここでも戦さの軍陣を組んでいるにもかかわらず、一體として冑をつけた武士俑が発見されなかったことが挙げられる。

これは近衛兵と大いに關係がある。というのは、嚴密に立證することは難しいが、近衛兵の少なくとも上層階級は、冑をつけず冠を着用したことが證せられるからである。例えば「續漢書」輿服志には、⁽⁹⁶⁾

武冠、俗にこれを大冠と謂う。纓を環らして蕤なく、青系を以て緄と爲し、雙つの鷩の尾を加え、左右に堅てるを鷩冠と爲す云々。五官、左、右、虎賁、羽林の五中郎將、羽林左、右監、皆な鷩冠を冠し、紗縠單衣なり⁽⁹⁷⁾

とある。これは、期門が虎賁郎と改稱され、虎賁中郎將の置かれたのが平帝の元始元年（後一）のことであるから、前漢末以後の冠制を述べたものと考えられるが、ここである五官中郎將以下の官は全て宮殿の門戸を掌る近衛の官であり、それらが武

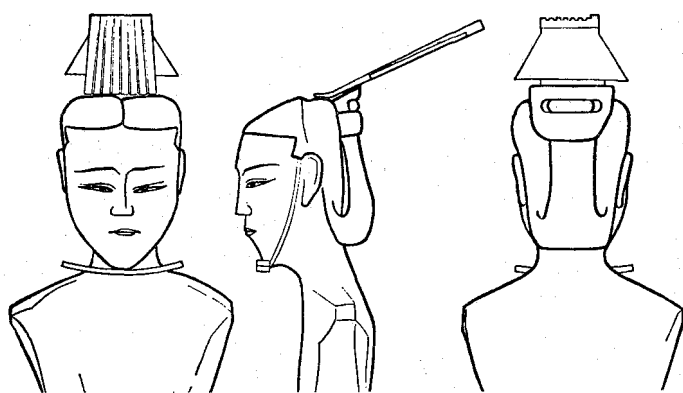


圖29 長沙馬王堆一號漢墓出土男俑長冠 前漢初期

冠に鷗の尾を挿した鷗冠をつけたというのである。従つてその官制が漢代へと繼承された秦においても、近衛兵の上層階級が冑をつけずに冠をつけたことは、當然あり得よう。

冑の着用の問題はさておき、それでは二種類の冠は、當時何と呼ばれ、どの官が使用したのであろうか。最初に軍吏俑と上級兵士がつけた二式冠(圖28)を取上げると、これは布製の逆梯形状のものをうい、前頭部から後頭部へと次第に上に起し、末端を下に折曲げていた。⁽⁹⁹⁾そして纓は、前頭部で冠を押さえつけた紐を、後頭部にまわした紐にこめかみの邊で結びつけ、顎の下で結んでいた。一見長冠のようにみえるので、長冠とする説が出た。長冠については、

「續漢書」輿服志に、⁽¹⁰⁰⁾

長冠一に齋冠と曰う。高さ七寸廣さ三寸、漆纒を促してこれを作る。制は板の如く、竹を以て裏を爲る。初め高祖微なる時、竹の皮を以てこれを爲り、これを劉氏冠と謂う。楚の冠制なり。民これを鷗尾冠と謂うは非なり。宗廟を祀る諸々の祀に則ちこれを冠す

とある。これを具體的な出土例に徴すれば、長沙馬王堆一號漢墓出土の木製男俑のかぶる冠(圖29)がこれに相當し、同墓出土のT字型帛畫⁽¹⁰¹⁾においても、下方の白い臺上で祭祀を行なう男達がこの冠をつけていた。即ち頭頂から板状のものが後ろに向かって斜め上に伸び、後半部の板の裏は逆梯形の板を重ね合わせていた。大きさと形状の點、楚地方の冠制である點、祭祀の際に用いられている點など、長冠とみなして間違ひあるまい。⁽¹⁰²⁾ところが二式冠をこの長冠に較べると、長冠程板状に平らでないこと、後ろへ行くに従い幅が廣くなる點などが相違し、漢の高祖が發明した冠を秦の兵士が着用するということのも矛盾する。

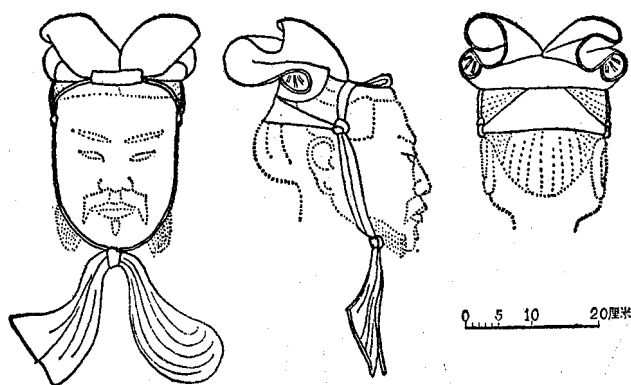


圖30 武士俑一式冠

では何かといえ、却非冠とするのが妥當と思われる。却非冠については、「續漢書」輿服志に、

却非冠、制は長冠に似るも、下に促す。宮殿の門吏、僕射これを冠す

とある。甚だ簡略であるけれども、長冠に似ることがまず注目される。そして「下促」とは、二式冠にみられるように、長冠と同じく後方に伸上がった布が、今度は長冠と違って突然下方に折れ、その角度が直角より鋭角的につまることをいうのではなからうかとすれば、「宮殿門吏、僕射冠之」とあり、門吏はもちろん、僕射にも宮中や宮殿の門の警備に當る者がいたから、これをつけたのは宮殿の警備を掌った役人、即ち近衛兵ということになり、ここに武士俑を近衛兵とする有力な旁證が得られたことになる。

次に武將俑の一式冠(圖30)は、前頭部は二式冠と同じく折返し狀の二枚の布が紐で押えられていたが、頭頂附近から二枚の筒狀に巻かれた布が左右の斜め上に伸びて開き、後頭部はこの筒を下から支えるように横に一枚の布がわたされていた。稍や複雑な形をしたこの冠について、二號坑の報告書では長冠と呼び、特に單卷尾長冠と名づけた二式冠と區別して雙冠尾長冠と呼ばれた。しかしその後、袁仲一氏は鵠冠と呼び、更に最近では、これと同一の冠をつけた始皇陵西側出土銅車馬の御官俑の説明の中で、鵠冠は鵠冠の別名であるとして、鵠冠の名を提示した。そこでこれらの説を改めて検討してみると、まず鵠冠は、先に「續漢書」輿服志を引用した如く、武冠に左右二本の鵠の尾羽根を立てたもので、五官、左右中郎將など近衛の上層階級がつけるとあった。そして輿服志は更に續けて、鵠は勇猛な雉で、相手が死ぬまで闘うと述べ、故に趙の武靈王はこれを武士のしるしとして冠につけさせ、趙を倒した秦も、この冠を下臣に着用させたという。だが輿服志の鵠冠は、「纓を環らして蕤なし」とあったように、結び目もなければ結び目から垂れる飾り紐(蕤)もないから、飾り紐の垂

れる一式冠とはっきり區別されるばかりか、趙の武靈王の故事も、後述するように、鷩冠との混亂が認められる。鷩冠は、「漢官儀」(「北堂書鈔」卷六三所引)に、

孝武皇帝初めて期門を置き、平帝名を虎賁中郎將と更め、冠には兩鷩尾を挿す

と述べる通り、前漢末の平帝以後の冠とみなすべきである。これに對して鷩冠は、「說文解字」に、

秦漢の初め、侍中、駿驥を冠す

という如く、秦、前漢初期の冠である。袁仲一氏も引用したように、「史記」佞幸列傳には、

孝惠の際、郎、侍中皆な鷩冠を冠し、貝帶す

とある。即ち前漢初期の惠帝(前一九四—一八八)の時、宮殿の門戸を掌る郎や、禁中に出入りする侍中は、皆な鷩冠をつけたというのである。また「淮南子」主術訓によれば、

趙の武靈王は貝帶鷩冠して朝し、趙國これに化せらる

とあり、更に佞幸列傳「索隱」注の引く「漢官儀」には、「秦は趙を破り、その冠を以て侍中に賜う」とある。つまりこれらによつて、鷩冠を創始したのは、胡服騎射の風習を遊牧民族から最初に取入れたことで有名な趙の武靈王で、後に秦は趙を破つた時、この趙の冠を近臣の侍中に與え、その冠制が更に前漢初期の惠帝時期に及んだことがわかる。鷩冠は鳥の名で、羽根を冠の飾りとしたのであろうと應劭はいう。しかし肝腎の鷩冠の具體的形狀については、文獻は何も傳えず、一式冠が鷩冠であるとする決定的證據はどこにも見當らない。

しかるにここで唯一の救いは、近年出土した銅製馬車の御官俑である。御官俑(圖38)は既述の如く武將俑と同じ一式冠をつけていたが、その御官俑の御す馬車は後述の如く安車と呼ばれ、皇帝が法駕の際に、屬車三六乗を従えて、侍中を參乗、奉車郎を御者として乗るものであった。従つて御官俑の官名は當然奉車郎であり、その奉車郎、即ち宮殿内の警護を擔當する郎(中)の一員が一式冠をつけていたということは、とりもなおさず一式冠が郎(中)の冠ということになる。また一方、「史記」

倭幸列傳には、郎や侍中は皆な鵄鷄冠を冠すとあったから、一式冠の名は鵄鷄冠だということになるのである。こうして兵馬俑の武將俑のつける冠が鵄鷄冠であり、郎、侍中の冠であることがわかれば、卻非冠に次いで、兵馬俑が近衛兵であるという確證が得られたわけである。

それでは更に問題を押進めることにして、兵馬俑坑各坑の軍隊の俑は、秦の近衛兵の中でもどの軍隊に相當するのであろうか。⁽¹⁷⁾そこで「漢書」百官公卿表によると、都咸陽の警備と宮城、宮殿の宿衛に當てるため、秦官として郎中令、衛尉、中尉の三官が設置されていたことがわかる。これら三官の職掌と組織とを概略述べると、次の如くである。まず郎中令は、⁽¹⁸⁾宮殿の門戸及び宮殿内の警衛に當たり、屬官に大夫、郎、謁者があつた。とりわけ郎は皇帝の近邊の宿衛を専門に掌り、中郎、郎中などに分かれ、郎中には更に郎中車將、戸將、騎將の三將があつた。刺客荊軻が咸陽宮で秦王（始皇帝）を刺さんと匕首を持つて追回した時、⁽¹⁹⁾警護の郎中達が武器を持って階下に居並びながら、下臣が宮殿に上る際は、身に尺寸の武器も帶びてはならぬという秦の法律のため、手のくだしようがなかったことは有名な話である。また衛尉は、⁽²⁰⁾主として宮城の城門及び宮城内の警備に當たり、屬官に公車司馬、衛士、旅賁の三令、丞があり、衛士だけは丞が三人であつた。特に宮城内に屯衛する衛士の數は多く、前漢には一二萬人にも及び、南軍と呼ばれた。中尉は宮城外の咸陽一帯の警備に當り、これまた多數の兵士を擁した。上述のように、二世皇帝元年、材士五萬人を徴して咸陽を屯衛させたのも、この中尉の軍と關わりがあり、前漢では北軍と呼ばれた。これら郎中令、衛尉、中尉が率いる軍隊のうち、近衛兵とは宮城より内側の警備を掌る者、つまり郎中令、衛尉の軍隊を指すことはいうまでもない。

ところで、二世皇帝三年（前二〇七）、この近衛兵と中尉の軍隊が關係した興味深い事件が起き、これによって三者の所轄範圍をより具體的に知り得る。即ち二世皇帝胡亥が望夷宮で齎戒していた時、各地の盜賊が一向に鎮まらぬので、時の丞相趙高の責任を追求したところ、趙高はひそかに女婿の咸陽令閻樂、弟の趙成と謀って、逆に二世を廢して公子嬰を立てる計畫をめぐらした。秦始皇本紀は更に續けて、次のように述べる。⁽²¹⁾

郎中令をして内應をなさしめ、詐りて大賊ありとなし、(閭)樂をして吏を召し卒を發せしめ、樂の母を追劫し(趙)高の舎に置く。樂を遣わし吏卒千餘人をひきいて望夷宮の殿門に至らしめ、衛令、僕射を縛りて曰く、賊の此に入れる、何ぞ止めざるやと。衛令曰く、廬を周らし卒を設け甚だ謹む、いづくぞ賊の敢て宮に入るを得んやと。樂遂に衛令を斬り、直ちに吏をひきいて入り、行くゆく射れば、郎、宦者大いに驚き、或は走り或は格し、格する者は輒ち死し、死者數十人あり。郎中令、樂と俱に入り、上の幄坐の幃を射る。二世怒り、左右を召すも、左右皆な惶擾して鬪わず。

この結果、二世皇帝は自殺の已むなきに至るが、ここで咸陽令は中尉、衛令は衛士令に相當しよう。軍吏、兵卒千餘人を率いた咸陽令の軍隊は、まず宮門を守る衛令の詰問にあつて、これを殺し、それから軍吏を率いて宮殿内を守る郎と格闘し、更に内通していた郎中令と一緒に、皇帝のいる奥の間へと侵入したのである。この事件は、あくまで咸陽の東南八里にあつた望夷宮での事であり、咸陽宮の警備は一層嚴重であつたと思われる。しかしそれでも衛令の返答にあつたように、賊の侵入する隙間がない程、宮城内に宿衛のための廬舎がめぐらされ、そこに多くの兵士が詰めていたことは注目に値する。

さて、一、二、三號坑の兵馬俑は、これら郎中令、衛尉を長官とする近衛の軍隊をモデルとしていた。どの坑の兵馬俑が、近衛のどの軍隊に相當するであろうか。まず一號坑と二號坑の軍陣をみて氣附くのは、兩者はともに東を向き隣り合っているにもかかわらず、互いに全く無關係といった風に獨立的に布陣していることである。例えば、ともに先陣をつとめる兩坑東端の歩兵同志の間に何の連關も見出されないし、また一號坑の北側一列の側翼衛隊の兵士達は、すぐ北側の二號坑に自軍の戦車部隊がいるにもかかわらず、そちらを向いて警戒の姿勢をとっているといった風である。これは、一號坑と二號坑の軍隊が同じく近衛兵でありながら、所屬を異にすることを示唆しているよう。

そこで二號坑から取上げると、この軍隊は先にみた如く、はっきり歩兵、戦車、騎兵の三部隊から構成され、騎兵の部隊は未だ武將俑が見附かっていないものの、前二者の部隊はそれぞれ左後方で指揮者の武將俑(圖23右、25)が各一體發見された。こ

れは、「門戸を守るを掌り、出ては車騎に充て」(百官公卿表)られた郎⁽¹²⁾、即ち内には宮殿の門戸を警衛し、外には車騎で征伐に従うこともあった郎官のうちでも、特に郎中、郎中車將、戸將、騎將の三將に率いられた郎中の軍隊を表わしてまい。か。そのように推測する理由の一是、この坑の兵馬俑が餘りにも明確に車(戰車)、戸(歩兵)、騎(騎兵)の三部隊に分かれ、しかも各部隊がそれぞれ武將俑に統率されて、獨自の指揮系統をもっていたからである。とすれば、これらの武將俑は、郎中車將、郎中戸將、兵士は車郎、戸郎、騎郎に該當することになるが、こうした呼稱も「史記」の列傳や高祖功臣侯者年表など、前漢初期のことを記す史料に散見され、秦の官制にあったものと考えられる。理由の二は、二號坑の武士俑の数が、文獻の傳える郎中の員數とほぼ合致するからである。この坑の武士俑の數は、試掘によって一區が三三三體、二區が一九二體、三區が三三三體、四區が一二〇體、合計九七七體と推定される。一方、「漢書」百官公卿表によると、郎には定員がなく、多い時は千人にも達したとある。また百官公卿表によると、郎には他に議郎、中郎、侍郎などがあつたから、千人という數は、郎中が全部を占めたわけではないけれども、五官、左、右中郎將が率いた中郎の官の秦、前漢初期における存在は、王先謙「漢書補注」(卷一六)の⁽¹³⁾、

漢初には但だ郎中のみありて、中郎なし

という見解を始めとして、近年の研究では疑われており、秦代では郎中が郎の殆んどを占めたと考えられる。また「史記」叔孫通傳によると、漢の高祖七年(前二〇〇)十月、長樂宮の完成を祝う朝儀は、秦代に博士をつとめたことのある儒者叔孫通が、古の禮と秦の禮儀とを組合わせて作った禮に則って行なわれ、その有様は次の如くであつた。

儀は平明に先んじ、謁者禮を治め、引くに次を以て殿門より入らしむ。廷中に車騎、歩卒の官を衛るを陳べ、兵を設け旗志を張る。傳言すらく、趨れと。殿下に郎中陞を俟み、陞ごとに數百人なり。功臣の列侯、諸將軍、軍吏、次を以て西方に陳び東郷し、文官は丞相以下東方に陳び西郷す。

ここで郎中の數は、「陞ごとに數百人」と記され、陞は左右二つあつたとして、やはり千人前後であつたと推定される。この

ように二號坑は、軍陣の編成方法と武士俑の数によって、近衛兵の中でも郎中の軍隊を表わしたと考えられる⁽³⁴⁾。そして一區と三區に配された武將俑は、上述の如く郎中戸將、郎中車將を表わしたものと推測されるが、因みに兩者の秩祿は、「漢書」百官公卿表の記述に従えば、比千石であった。

さて、これに對して一號坑の兵馬俑は、衛尉の屬官である公車司馬令、衛士令、旅賁令のうち、衛士令の率いる衛士の軍隊を表わしたものと思われる。その理由の第一は、同じく近衛兵であっても、上述のように二號坑の兵馬俑とは互いに獨立して所屬を異にし、二號坑が郎中の軍隊ならば、それとは別の近衛の軍隊を考える必要があるからである。第二に歩兵主體であることが、宮城内の警備を擔當する衛士にふさわしいばかりか、全體が東を向きながら、南、北、西の最も外側の一列が各々外を向き監視しているのは、監視、防衛を本務とする衛士にやはりふさわしいと考えるからである。第三に、一號坑の武士俑の数は約六三〇〇體と推計されるが、これ程規模の大きい軍隊は、近衛兵の中では衛士を置いて他にないからである。上引の望夷宮の事件の際に衛令が返答した言葉⁽³⁵⁾、「廬を周らし卒を設け甚だ謹む。いずくんぞ賊の敢て宮に入るを得んや」からも、秦の衛士の数の多さが想像されるが、また「漢書」武帝紀の建元元年（前一四〇）の詔⁽³⁶⁾によって、前漢時代の衛士の膨大さが知れる。即ち、

秋七月、詔して曰く、衛士は轉置送迎して二萬人なり、それ萬人を省けと

とある。つまり前代の景帝の末頃、新舊交代して常に二萬人あったのを、武帝が即位して半数の一萬人に減したのである。これらの理由から一號坑の兵馬俑は、衛士の軍隊とするのが最も妥當であろう。そして既述の如く、一號坑から四體の武將俑が発見されたが、これらの武將俑については、うち一體は中央前列で歩兵に雜つて立ち、二體は南側前列の二輛の指揮車に乗り、残りの一體（修理中）は發見場所が不明であった。一方、衛士の指揮官は、百官公卿表の衛尉の條に、

屬官に公車司馬、衛士、旅賁の三令、丞あり。衛士のみ三丞あり

とあるように、衛士令が一人、衛士丞が三人いた。従つて一號坑の四體の武士俑は、この衛士令、衛士丞に相當するものと考

えられる。更に想像を逞しくすれば、劍について堂々と立った武將俑（圖19左）が衛士令であり、指揮車に乗った二體の武將俑（圖19右）と不明の一體が衛士丞であろうか。

次に三號坑の兵馬俑は、近衛兵のどれに相當するであろうか。これを解く鍵は、三號坑内で發見された銅爰（圖27）にあると思われる。爰は王の行列の先拂いに用いる一種の儀仗用武器であったが、これを誰が用いたかといえは、「說文解字」に「旅賁以て先驅す」とあったように、つまり旅賁が用いたのである。旅賁については、また「周禮」夏官に、

旅賁氏は戈盾を執りて王車を夾みて趨るを掌り、左八人、右八人、車止まれば輪を持つ

とある。戈盾を持つという點で相違するが、王車に従うという點では一致する。更に夏官は旅賁氏の員數について、中士二人、下士十六人、史二人、徒八人といひ、計二十八人である。これらを踏まえて、秦の近衛兵のうちで爰を持ち儀衛的役割を果す部隊を探せば、衛尉の屬官である旅賁令の率いる旅賁しかあるまい。この旅賁という名稱には、必ずやそれ以前の旅賁を踏襲した意味があった筈である。また員數の面でも、發掘の終った三號坑からは計六八體の武士俑が出土したが、一號坑の衛士、二號坑の郎中の軍隊などと較べ、極端に少數である點は、「周禮」において、王宮を守る虎賁氏の九〇四人に對する旅賁氏の二十八人と同様である。

しかし、ここで生ずる問題は、何故旅賁だけが屋舎内に表わされたのか、そしてこの屋舎は何かということである。後者の問題については、先に望夷宮の事件の際の衛令の言葉に「廬を周らし卒を設け甚だ謹む」とあった廬と考えられる。顏師古は「漢書」百官公卿表の衛尉に注して、胡廣の説を引用し次のように述べる。⁽¹⁸⁾

胡廣云えらく、宮闕を主るの門内衛士、周垣下において區廬を爲ると。區廬なる者は、今の仗の宿屋のごときなり。

即ち衛士が宮殿の外に宿衛する屋舎を廬もしくは區廬と呼び、城壁に沿って宮城内にたくさん作ったのである。班固「西都賦」⁽¹⁹⁾にも、「周廬千列し、徹道綺錯す」とある。「西都賦」の場合は前漢の長安未央宮であるが、秦の咸陽宮、望夷宮にも作られ、三號坑の帷幕のかかった屋舎も、廬という一種の詰所と考えるのが最も妥當であろう。そして廬は一般的には衛士の詰所であ

るが、同じく衛尉の屬官である旅賁にも同じような詰所があり、旅賁の場合は、員數的に一つの廬に収めることが出来たため、三號坑を廬にみたてて作り、その中に旅賁全部を配したと考えられる。従って三號坑は、當初いわれたような軍幕もしくは指令部などではなかったのである。また宮城内に宿衛する近衛兵のために、わざわざ帷幕つきの指令部を作るというのも奇妙な話で、近衛兵は皇帝を警護するための軍隊であるから、もし指令部があったとすれば、當然皇帝自身のいる宮殿内にあった筈である。故に三號坑から武將もしくは武將以上の指揮者の俑が発見されなくても、別段不思議はない。ただ旅賁の兵を率いる指揮者がいる筈であるが、それは車馬房の戦車に乗った軍吏俑であり、旅賁の場合は極く少數の部隊であるため、指揮者に武將ではなく、それに次ぐクラスが配されたと説明されよう。

しかるに始皇陵の兵馬俑坑は、以上の一、二、三號坑の他、二號坑と三號坑の間に、途中で計畫放棄された廢棄坑があった。これも當然近衛兵の兵馬俑を作る豫定であつたと思われるが、近衛兵のうち残つたのは、衛尉の屬官である公車司馬令が率いる公車司馬⁽¹⁰⁾の軍隊である。公車司馬は宮城の外門である司馬門の警備を掌り、實際に秦における司馬門の存在は、「史記」項羽本紀によつて確かめることが出来る。⁽¹¹⁾また公車司馬令は、前漢の文帝の時、張釋之が任命された公車令と同じであろう。従つて廢棄坑に作る豫定であつた近衛の兵馬俑を肯て求めれば、公車司馬の軍隊ということになる。そして、もし廢棄坑が完成しておれば、秦の近衛兵は一人として漏れることなく全員、しかも等身大で表現される筈であつたことになる。

このように兵馬俑は、當時の郎中、衛士、旅賁の近衛兵をモデルとして、それをそっくりそのまま寫して地下に再現したものであることがわかつた。では更にこれらの近衛兵が整列して軍陣を組んでいたことは、どのように説明されるであらうか。先に引用した「史記」叔孫通傳には、長樂宮の完成を祝う朝儀の様を敘述して、「廷中に車騎、歩卒の宮を衛るを陳べ、兵を設け旗志を張る」とあつた。⁽¹²⁾ここでいう「宮を衛る(衛宮)」とは、衛尉の率いる軍隊と考えられるが、また「歩卒」の他に「車騎」とあるから、郎中車將や騎將の率いる郎中の軍隊との混成軍ともとれよう。つまり郎中や衛士の近衛兵は、單に宮殿や宮城を警衛するだけでなく、儀式においては軍陣を組み參列することがあつたのである。兵馬俑においても、郎中や衛士の近衛

兵を表現するに際して、その形式が採用されたと説明されよう。そして王車、即ち皇帝の車に従う旅賁だけは、皇帝自身が登場しないため、詰所の廬の中に配され、待機中の所を表わされたと説明されよう。しかし何の目的でこのような兵馬俑の軍陣が表わされたかについては、秦始皇陵全體の構想にも關係するので、第六章で述べることにする。

五 陪 葬 坑

(1) 銅 車 馬 坑

さて、一九七四年に兵馬俑坑が発見されて以後、始皇陵の周邊が徹底的に調査され、數々の新しい事實が明るみに出て來た。始皇陵の本體に當たる墳丘の下部は未だ本格的な發掘には着手していないけれども、前述の如くボーリングの結果、地宮と墓道が探し當てられたという。後者の墓道については、東側に五本、北側に一本の他、西側にもあったといひ、特に東西の墓道の位置は、内城、外城の東西門と正しく相對應しているといふ⁽¹⁴⁾。このことは從來懸案であった始皇陵の向きの問題に關して、重要な手懸りを與えてくれる。即ちこれによって始皇陵の向きは少なくとも東西方向になり、しかも東側に墓道が五本もあったことや、始皇陵の東側に東向きの巨大な兵馬俑坑が発見されたことを考え併せると、東向きの説が斷然有力になってきたのである⁽¹⁵⁾。しかし墳丘下部は殆んど未發掘であり、墓道に關しても未だ正式の報告が出ていないので、周邊に目を轉ずると、墳丘の西側で、銅車馬坑、珍禽異獸坑、馬廐坑など、明らかに始皇陵に附屬する陪葬坑が次々と發見されている。

まず銅車馬坑⁽¹⁶⁾は、既に一九七八年六月に探出され、一九八〇年十一月から十二月にかけて發掘が行なわれた。場所は墳丘の西側二〇mの墓道附近という。但し始皇陵のもとの封土の西側境界は、ボーリングによって現在の封土の西側境界から六〇m西にあったことがわかっており、銅車馬坑は元來封土の下に位置していたことになる⁽¹⁷⁾。この邊は全體として大型の陪葬坑をなしており、現在そのうちの銅車馬坑の一つの過洞が發掘され、二輛の彩繪銅車馬が出土した。銅車馬は二輛ともに四頭

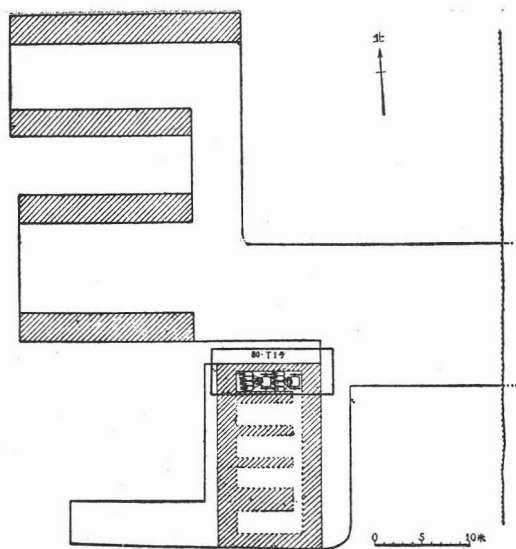


圖31 銅車馬坑平面位置圖

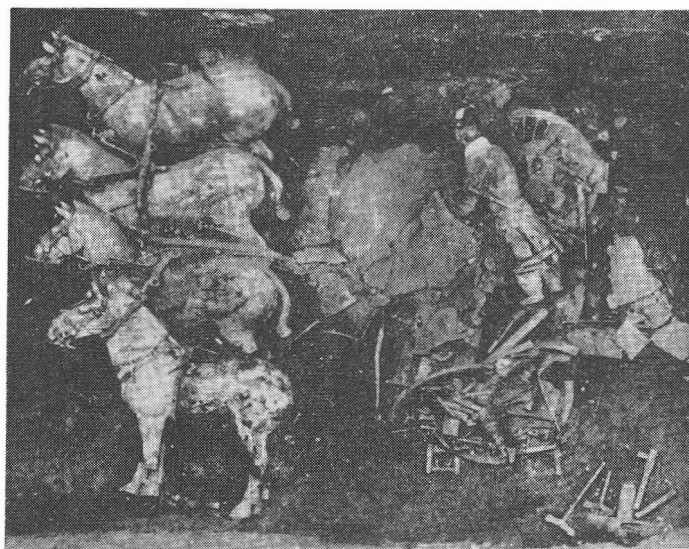


圖32 銅車馬坑一號銅車馬出土狀況

立てて、車上に各一體の御官俑が乗り、車馬、人物全て實物の約二分の一の大きさに作られていた。過洞は東西長さ十一m、幅三m、深さ七・八mで、南側過洞と土隔壁で隔てられ、底に長さ六・八m、幅二m、高さ二mの木槨を置いて、その中に西向きに前後二輛の銅製馬車をいれていた。前が一號銅車馬（圖32）、後が二號銅車馬（圖33）とされ、兩者は、一號車の御者が立乗するのに對して、二號車の御者は坐乗し、また一號車の車輿が上に長い柄の圓い車蓋をたてるのに對して、二號車のそれは上に橢圓半球型の車蓋で被うなど、部分的に異っていた。現在二輛のうち、二號銅車馬の修復が完成し詳しい報告が出ている

ので、こちらを中心に考察を進めることにする。

二號銅車馬（圖33）は、全長三一七cm、高一〇六・二cmあり、轅は一本で、方形の車輿は前後二室に分かれ、前室の狭い席に御者一人が坐し、幅七八cm、奥行八八cmと比較的廣い後室は、後ろに開閉可能な車扇門扉、前と左右に引戸式の窗があった。



圖33 銅車馬坑出土二號銅車馬 高 104.2cm

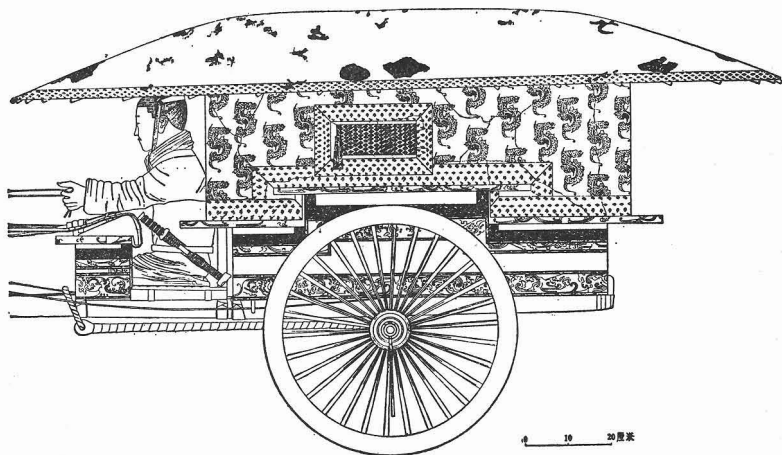


圖34 二號銅車馬車輿部分

稍や工藝的で物足りない感じがしないでもなかったけれども、その代り細部における實物を模した精巧さは兵馬俑以上であった。しかも全て銅製であるから、兵馬俑坑の木質戦車のように朽ち果てることもなく、横倒しに破砕していたとはいえ、まるごと再び地上に出現したのである。従って車馬の研究にとってこれ以上の資料はなく、これによって数々の新しい知見が得ら

そして前後車室の上に、二八本の蓋弓の骨組によって成る随圓半球型の車蓋がつき、下には輻三十本の車輪がついていた。車、馬、御者全て彩色が施され、車輿（圖34）は全體として乳白色の地に、紅、紫、藍などで精緻かつ華麗な紋様が描かれ、四頭の馬は白、御者も白い衣を着ていた。

この二號銅車馬をみて驚くのは、兵馬俑と同じくその徹底した寫實である。一九八三年十月、兵馬俑博物館で見學した時、二分の一の縮尺のため、兵馬俑の等身大の大きさに慣れた眼には、

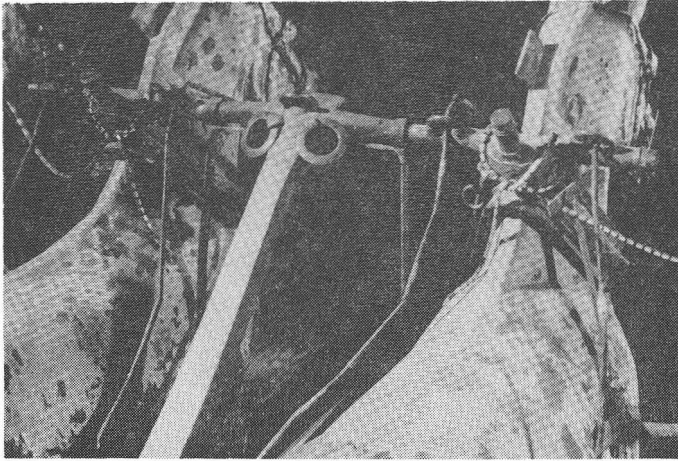


圖35 二號銅車馬服馬頸部繫駕法

れた。例えば繫駕法(圖35)をとってみると、轅(轡)、衡、軛、軛など繫駕の部品が全て揃い、それらの位置が正確であるばかりか、部品同志の革紐による結び方まで青銅によって克明に寫し取られ、まさに一目瞭然であった。要するにここでも即物的正確さが意圖されているのである。その繫駕法は、鞍で軛を支え、馬の肩に軛をつけて、それに軛の一端をつなぐ鞍套式繫駕法でもなければ、馬の頸に軛をつけて轅を支え、胸にかけた幅廣い帶に軛をつなぐ胸式繫駕法でもなかった。これらは、前者がほぼ元代以後、後者は前漢以後に行なわれたもので、ともに二本の軛を前提としている。⁽⁴⁹⁾これに對して二號銅車馬の場合

は、軛軛式繫駕法とも稱すべきもので、軛を着裝した衡を内側二頭の服馬の肩(頸)にわたして、これで一本の軛を支え、また軛は四頭の馬のそれぞれ内側にもつていき、服馬の軛は軛の内側の轡(軛脚)にかけ、外側二頭の驂馬の軛は直接馬の頸に縛りつけ、計四本の軛で車を引かせていた。⁽⁵⁰⁾

この他、興味深いのは轡と呼ばれる飾りである。これは「史記」項羽本紀に、漢將紀信が漢王劉邦の身代りになって項羽の前に出た時のことを、

紀信 黃屋車に乗り、左轡を傳く

と記すように、漢代には左轡と呼ばれ、犂牛の尾で作り、天子の車馬の左驂馬の頭上、或は衡の上につけた。しかし二號銅車馬の場合は、右驂馬の頭上(圖36)につけていたのである。また脅驅⁽⁵¹⁾という車馬具は、これまで位置が必ずしも明瞭でなかったけれども、二號銅車馬では、左右服馬の外脇腹(圖35右隅)に革帶を使って取附けられていた。飛鳥の形をして、二枚の廣げた羽根につく長い尾の末端は鋭く尖り、驂馬が服馬との距離(最低一四cm)を保って、それ以上内側に寄らないようにしていた。



圖36 二號銅車馬右驂馬頭飾

では、二號銅車馬は一體誰が乗り、當時何と呼ばれた車であろうか。前者については、車輿（圖34）の裝飾が華麗を極め、後室の四周箱板の内外上層は變形夔紋、下層は各種彩繪圖案を描き、また車蓋の内側も變形夔紋を散らしていた。そして馬の裝飾も、一般の車馬の比ではなく、右驂馬の頭上に上述の天子の車馬特有の纛の飾りをつけたり、右驂馬を除いて、頭の毛を左右に分ける文髦で飾ったり、また四頭ともに額の上に金の當盧をつけ、項の下に穗形の纓絡、即ち繁纓をつける（圖36）ことなどから判斷して、直ちに皇帝の乘輿とみなされる。

次に名稱の問題については、蔡邕の「獨斷」卷下によれば、⁽¹⁵⁾ 天子の車駕には大駕、法駕、小駕の三種類あるといい、そのうち法駕に關して、

法駕、上の乗る所を金根車と曰い、六馬を駕す。五色安車、五色立車各一あり、皆な四馬を駕し、これを五時副車となすとある。ここで金根車は六頭立てであるから別にして、法駕の際に使われた五色安車、五色立車を考える必要がある。安車は坐乗用、立車は立乗用であり、それぞれ銅車馬の二號車、一號車に對應する。だが五色というからには、「續漢書」輿服志が⁽¹⁶⁾ いうように、五行における五方の色、即ち青、白、朱、黒、黄の色を車、馬ともに區別した筈で、一、二號銅車馬の馬全てが白馬であったことと矛盾する。しかし秦において、五行思想が實際にどれだけ徹底していたかは、兵馬俑を始め秦代出土文物に徴する限り、大いに疑問のあるところで、⁽¹⁷⁾ ここではただ法駕に四頭立て安車と立車が使われたことに注目する。一方、始皇帝の乘輿として史書に記載される車に輶輶車がある。これは始皇帝が第五次地方巡幸の途次、沙丘平臺で崩じた時、その死を祕密にして遺體を咸陽まで運んだ車である。「史記」李斯列傳に、⁽¹⁸⁾

始皇の居を輜輳車中に置き、百官の奏事、上食故の如く、宦者輒ち輜輳車中より諸奏事を可とす

とある。この輜輳車について、孟康は「衣車の如く、窗牖あり、これを閉じれば則ち溫かく、これを開けば則ち涼し、故にこれを輜輳車と名づくるなり」という。また顔師古は「漢書」霍光傳にみえる霍光の柩を載せた輜輳車について、⁽¹⁹⁾

輜輳はもと安車なり、以て臥息すべし。後に載喪するによりて、飾るに柳絮を以てし、故に遂に喪車となすのみ

と注する。つまり輜輳車は漢代には喪車専用となったけれども、本來安車の別名で、臥して息むことが出来、開閉可能な窓があつて室溫を調節したというのである。二號銅車馬も左右と前に開閉可能な窓があり、車主の乗る後室(圖37)は、幅七八cm(實物約一五六cm)、奥行八八cm(約一七六cm)とゆったりしているうえに、床には厚い茵が敷き詰められて、確かに坐することも臥息することも出来よう。従つて二號銅車馬は安車とするのが妥當で、安車の中でも皇帝専用の大型安車であり、一號銅車馬は大型立車といえよう。

また二號車、一號車には、それぞれ坐乗、立乗の御官俑が乗っていた。前者⁽¹⁸⁾は高さ五一cm、跏坐(正座)して、兩腕

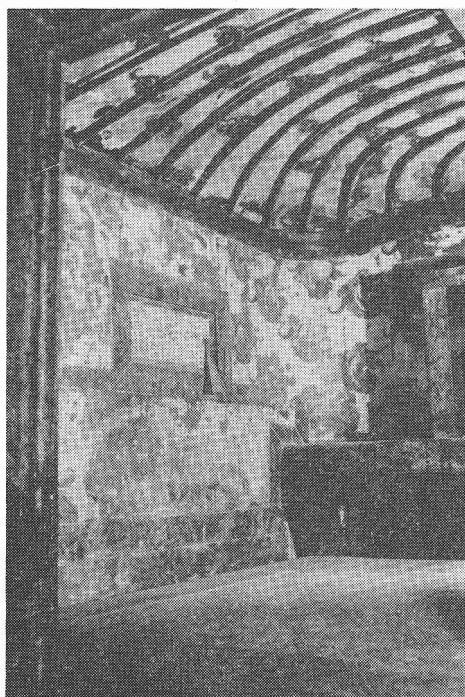


圖37 二號銅車馬車與内部

を前に舉げて六本の轡を握り、白い長襦を着て冠をつけ、腰には劍を佩びていた。また後者(圖32)の大きさは不明であるが、同じく轡を握り、紅と淡綠色の長襦を二枚重ねて着、白い長褌に方口齊頭翹尖履をはき、前者と同じ冠をつけて、腰には同じ型の劍と、更に璧を佩びていた。注目すべきは冠で、先にも述べたように兵馬俑坑の武將俑と同じく、鵠鵲冠と呼ばれる冠をつけていた。また佩劍は長さ二五・四cmの實用に適さぬ明器で、鞘には帶にはさんで止めるための璫がついていた。冠は勿論のこと、佩劍も佩玉も官の身分を示す一種のしるしであるが、で

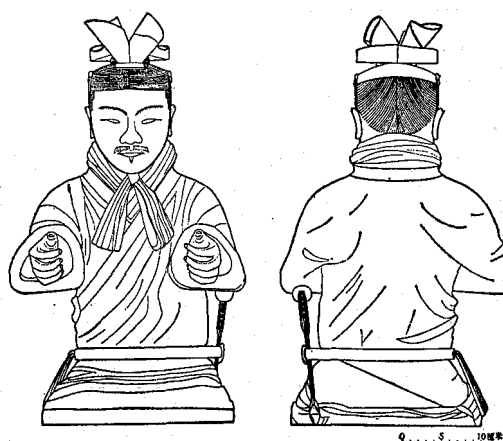


圖38 二號銅車馬御官俑 高 51cm

は何の官かといえは、「獨斷」卷下には、⁽¹⁹⁾

大駕には即ち公卿奉引し、大將軍參乘し、太僕御し、屬車八十一乘、(中略) 法駕には公卿、鹵簿の中に在らず、(中略) 侍中參乘し、奉車郎御し、屬車三十六乗とある。即ち大駕の車駕であれば、御者は當然太僕であるが、この二號車、一號車は法駕の際の安車、立車とみなされるから、御者は奉車郎とみなすのが妥當である。奉車郎は、「太平御覽」卷二二五所引の桓譚「新論」に、⁽²⁰⁾「余、年十七、奉車郎中となり、殿中の小苑西門を衛る」と記し、奉車郎中という官があったように、郎中の官の一つと考えられる。また、だからこそ「史記」佞幸列傳に「郎、侍中皆な鵷冠を冠す」とあった如く、皇帝の近衛指揮官や近臣が着用する鵷冠をつけていたのである。そしてその位はかなり高く、冠だけに着目するならば、兵馬備二號坑の武將俑、つまり先に考證した郎中戸將、車將と同じクラスであった。

ところで、この二輛の銅車馬は、車馬坑を構成する一條の過洞で發見されたが、ボーリングの結果、他に四條の過洞の存在することが知られており、更に何輛かの銅車馬が出土する可能性がある。このように陵墓の陪葬坑としての車馬坑の歴史は古く、殷代に遡って安陽殷墟孝民屯一號車馬坑⁽²¹⁾などでは、生きた馬と實物の車、そして人間が葬られた。その後、西周、春秋と續いて、戰國時代にも盛んに作られ、人間を殉葬する風習こそ下火になったものの、輝縣琉璃閣一三一號車馬坑では、⁽²²⁾十九輛の馬車、淮陽馬鞍塚楚墓二號車馬坑では、戰車十八輛と肩輿五乗が埋められた。これらの車馬や肩輿は、死者が生前と變らぬ死後の生活を営むために備えたもので、銅車馬坑もこれに倣ったものと考えられる。但し銅車馬坑の場合、それは實物の車馬ではなく、あくまで實物を二分の一に縮尺して模した銅製車馬であった。しかしこの方がはるかに金と手間を要するだけに、陶製兵馬俑ともども、そこには死後の生活への凄まじい執着と、その永遠への熱い願いが看取される。

(2) 珍禽異獸坑

次に、珍禽異獸坑とそれに伴う跽坐俑坑は、一九七七年、内城と外城の間で、内城西門より約一三〇m南で発見された。坑は南北八〇m、東西二五mにわたって、南北三列に並び、東側六基、西側八基、中間十七基存在することが探査された。そのうち發掘したのは、東一、西一、中間二の計四基である。その結果、東と西は方形豎穴坑で、底に東向きの跽坐俑一體ずつと陶器が發見され、他方中間の列は長方形豎穴坑で、底に瓦棺一箇ずつを置き、中には獸骨一體と陶鉢、銅環各一件がはいっていた。つまり東西二列が跽坐俑坑、中間一列が珍禽異獸坑である。出土した二體の跽坐俑は、高さ六八cmと七三cmで、ともにうち合わせになった襟のある長袍を着、手を膝の上に置いて正坐していた。また獸骨の一體は全長六〇cm、名稱は判明せぬが雜食動物、別の一體は長さ五一cmで、これも名稱は判明せぬが草食動物と鑑定された。これらの動物を何故に「珍禽異獸」と名附けたのか、その理由ははっきりしないが、もし「異獸」であるとすれば、それは恐らく始皇帝が生前に宮廷などで飼育していた珍獸であり、跽坐俑はこの珍獸を飼育する係りの者を象ったものと考えられる。確かに珍獸を陪葬坑に埋める風習は當時あり、後述する如く、前漢初期の文帝の母、薄太后を葬った南陵の陪葬坑からは、犀、熊貓（パンダ）などの大型珍獸の骨格が發見されている。また武帝の建元三年（前一三八）、上林苑を周圍三百里に擴充して、苑中で百獸を養い、秋と冬に狩獵を行なったことは有名である。そしてこの上林苑の歴史は秦代に遡り、「史記」李斯列傳には、

（二世皇帝）是において乃ち上林に入りて齋戒し、日々遊びて弋獵す

とある。従って始皇帝が生前に禁中或は苑で飼った珍獸が、陪葬坑に埋められていても、何ら不思議はないのである。

(3) 馬廐坑

馬廐坑も、墳丘西側の内城と外城の間で發見された。正式の報告書は未だ出ていないけれども、杭德洲氏や無戈氏によると、この邊一帯をボーリングの結果、四八基の陪葬坑が探出され、そのうち三一基は上述の珍禽異獸坑と跽坐俑坑であったが、殘



圖39 上焦村馬廐坑出土跽坐俑

りの十七基は戦馬の飼育を象徴的に表わした葬儀坑で、馬廐坑二基が含まれるという。二基の馬廐坑は、一つは曲尺形をして面積一七〇〇㎡、別の一基は東西に二つの門道をもち、面積は七〇〇㎡にも及んだ。試掘すると、身長一七八cmの大型陶俑九體が出土し、短袍を着て袖手しながら立ち、圍人（馬丁）であったという。

しかし、これより先、一九七六年から七七年にかけて、始皇陵東側の上焦村一帯で、馬廐坑及び跽坐俑坑八〇基が探出され、これ以前発見の十三基を加えて計九三基となり、更に一九七九年以後発見の四基を加えると九七基となり、そのうち四一基が発掘された。こ

れらの坑は南北一五〇〇mにわたって、三列に分布していた。發掘された四一基の内譯は、馬坑三〇基、跽坐俑坑三基、俑馬同坑八基であった。いずれも方形堅穴土坑で、實物の馬一體もしくは跽坐俑一體ずつに陶盆、陶罐などを置き、馬坑は頭を西向きに、俑坑は頭を東向きに、俑馬同坑は堅穴内に馬、壁寄りもしくは壁龕内に俑を置いていた。馬は骨格から判断して、體長一・五一・六m、高さ一・四一一・五mで、兵馬俑坑の陶馬とほぼ同じ大きさか、稍や小さめであることが注目された。また跽坐俑（圖39）は、高さ六六―七二cm、全て男性で、前出の墳丘西側出土の跽坐俑と同じく、うち合わせになった襟のある

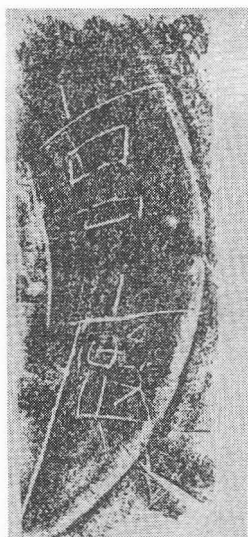


圖40 上焦村馬廐坑出土陶文「宮廐」

長袍を着て腰に帶をしめ、手は膝に置くか拱手するかして正坐していた。彩色が施され、顔や手は濃い桃色、袍は浅緑色か紅色の顔料が塗られている。また髪は後ろに束ねて圓い髻を結っていた。

興味深いのは、陶器や銅器の器物に記されていた文字で、「中廐」「左廐」「宮廐」（圖40）「三廐」「大廐」「大廐四斗三升」「左廐容八斗」などと書か

れていた。「漢書」百官公卿表によると、⁽¹⁶⁾ 輿馬のことを掌る太僕の屬官として、「大厩令」があった。また「史記」李斯列傳によると、⁽¹⁷⁾ 公子高の上書文に、

先帝（始皇帝）恙なき時、（中略）御府の衣、臣これを賜わるを得、中厩の寶馬、臣これを賜わるを得

とあり、中厩という言葉がみえる。よって銘の大厩や中厩が秦の中央養馬機構の官署名であることは間違いない、更に「雲夢秦簡」廐苑律にも、「その大厩、中厩、宮廐の馬牛」とみえる。これ以外の左厩や三厩も、恐らく中央官署の名であろう。するとこれらの銘を記した器物は無論のこと、馬もこれらの中央官署馬廐に所屬し、跽坐

俑はそれらの圉人を象ったものとなる。始皇陵の陪葬坑とされた所以もここに存する。

しかし、これらの馬廐坑が果して始皇陵に附屬する馬廐坑であるかどうか、問題がないわけではない。というのはこれら馬廐坑の西側僅か5mから15mの所で、秦墓十七基⁽¹⁷⁾が探出されたからである。墓は馬廐坑と平行して南北一列に並び（圖1）、うち八基が發掘された。その形制は斜坡墓道をもった甲字型墓で、方壙内に棺槨を置くものと、方壙の奥に更に洞室を掘って棺槨を置くもの（圖41）と二種類あった。また墓の向きは、一基を除いて東向きであった。しかし異常なのは遺體の骨骼で、年齢は全て三十歳前後で、女性が二人含まれていたが、一體を除き、頭、身體、四肢の骨があちこちに分離し、頭骨が槨室内にあるのに、下肢は槨外の墳土の中で發見されたり、或はその逆であったり、また一體は、こめかみの骨の上に銅鏃一本が突刺っていた（圖42）。これら異常な形で葬られた墓の被葬者としては、二世皇帝胡亥の即位後、變が起きるのを恐れて殺戮された公子や公主ではないかと推測された。「史記」李斯列傳には、⁽¹⁸⁾

公子十二人、咸陽の市に僇死せられ、十公主、杜において砒死せらる

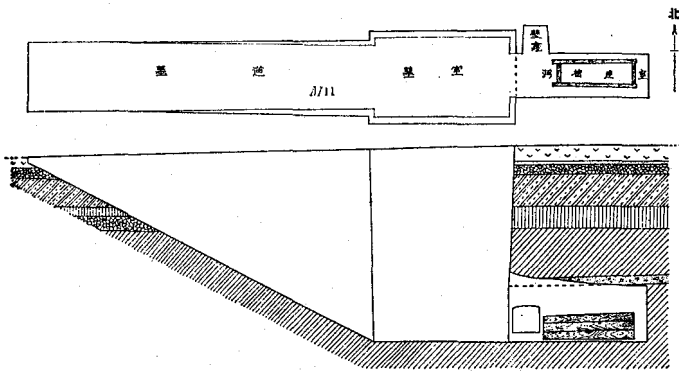


圖41 上焦村秦墓 (M11) 形制

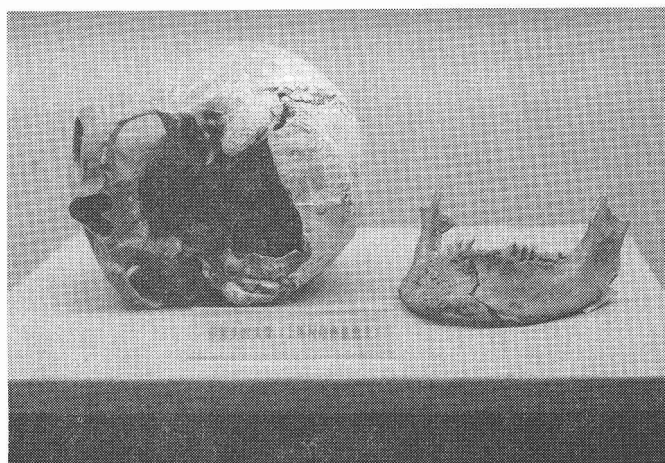


圖42 上焦村秦墓出土帶箭鐵頭蓋骨

とあり、砒は礫と同義で、つまり肢體を引裂いて殺すことで、秦墓の骨格の状況と似るからである。また殺戮を免れたが危険を感じた公子高は、始皇帝への殉死を申し出て、驪山陵への従葬が認められており、他の殺戮された公子、公主達も驪山陵への従葬が考えられるからである。

いずれにせよ、上焦村一帯の馬廐坑が始皇陵の陪葬坑とされたことには疑問が残る、寧ろすぐ西側の上焦村秦墓の陪葬坑である可能性が高い。上述のように、その後、更に豪華で大型の馬廐坑が墳丘の西側の外城内で発見され、こちらが始皇陵の馬廐坑と考えられること、またこの墳丘西側の馬廐坑のように、馬廐坑というものが、陵墓のすぐ近くに設けるのが當時の習慣であったとすれば、上焦村馬廐坑も秦墓のすぐ近くに位置することなどが、その理由である。しかし推測通り上焦村馬廐坑が秦墓の陪葬坑であったにせよ、墳丘西側の始皇陵馬廐坑の発掘報告が出ていない今の段階では、前者は後者を考える恰好の材料として貴重である。秦朝によって営まれたと考えられるうえに、大廐、中廐、宮廐など太僕配下の養馬機構が表わされており、始皇陵の馬廐坑も、この養馬機構を更に一層大規模に表わしたものと考えられるからである。

さて、始皇陵の陪葬坑である銅車馬坑、珍禽異獸坑、馬廐坑などをみてきたが、これらは、同じく始皇陵の陪葬坑である兵馬俑坑が、當時の實際の近衛兵をそのまま地下に再現したように、當時宮廷を中心に實際に存在していた官を、その管掌するものと一緒に寫實的に表現していた。これらの官の種類は、発掘が進めば更に増えるものと思われる。例えば銅車馬坑をみても、他の四條の過洞が未発掘であるばかりでなく、銅車馬坑をその一部とする大陪葬坑の北側も未発掘である。また兵馬俑坑が発見される以前、陵園内では屢々陶俑が出土しており、一九三二年には内城西壁の外側二〇mの所で俑一體（現在所藏不明）、



圖43 始皇陵陵園附近出土男俑 高 65cm

述である。即ちこれらの陶俑は、秦始皇本紀のいう始皇陵の「百官」に當るのではないかということである。無論、百官の多くは墳丘下部の墓室内に埋められた可能性があるが、一部は墳丘の周圍に陪葬され、兵馬俑坑を始めとする陪葬坑の俑は、この百官を表わしたものと考えるのである。そしてこのような俑を何のために陪葬したのかといえば、それは墓葬形制史上、劃期的であつた始皇陵の陵寢制度と深く關わるので、章を改めて述べることにする。

六 陵寢制度と靈魂觀

さて、これまで専ら地下の遺構について述べてきたが、地上の建築物はどうかといえ、現在、外城で圍まれた始皇陵内において、墳丘の西側（西北）と北側の二箇所で建築遺跡が發見されている。このうち西側の建築遺跡は、墳丘の西北約一一〇m、内城と外城の間の内城寄りに位置し（圖1）、南北長さ約九〇m、東西幅約五〇mを占めて、大面積の夯土臺や夯牆が築かれていた。⁽¹⁶⁾ そして一九七二年以來、この遺跡からは、⁽¹⁷⁾ 上述の如く「麗山飢官 右」「麗山飢官 左」（圖44）と書かれた陶壺の蓋二

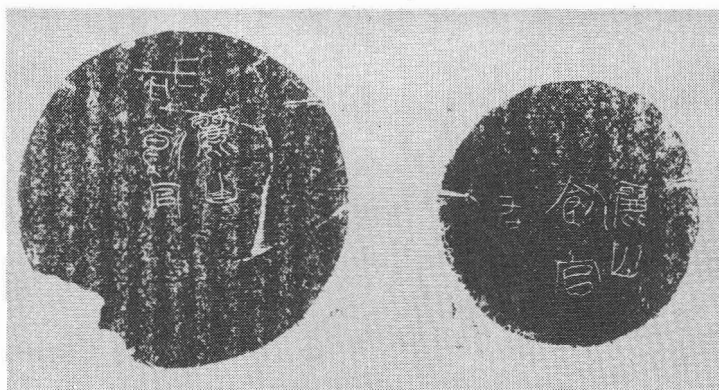


圖44 始皇陵西側建築遺跡出土陶壺蓋陶文（拓本）

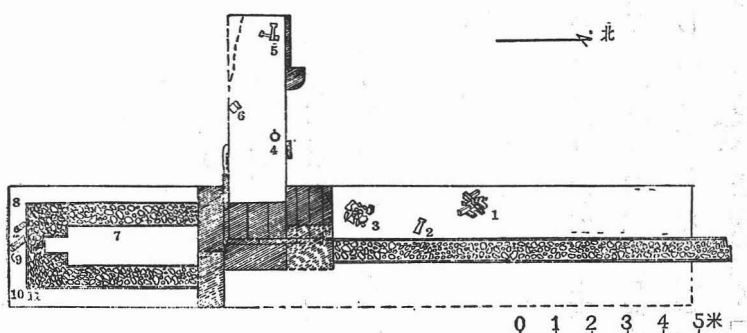


圖45 始皇陵北側二號建築遺跡平面圖

がある他、西側に門道があることがわかった。そして建築と建築は版築による壁で隔てられていた。特に注目されるのは、二號建築遺跡で見附かったひとときわ大型の夔紋瓦當⁽¹⁷⁾（圖46）で、高さ四八cm、直徑六一cmの半圓に近い形をしていた。紋様は殷周青銅器において展開した龍紋の變化した形を示し、この紋様の格調の高さと瓦當の大きさが、建築自體は小さかったけれども、その高級さを雄辯に物語っていた。

件と、「麗山」「尙」と書かれた陶器破片一件、「麗邑二升半 八厨」と底に書かれた陶盤一件、「麗邑五斗崔」と書かれた陶鍾底部破片一件などが發見されている。また一九七六年には、高さ一三・三cmの金銀象嵌編鐘一件が見附かり、その鈕上に「樂府」の二字が刻まれていた。このように西側建築遺跡は、「麗山飢官」「厨」「樂府」など、この建築の性格を示す興味深い文字資料が續出しているが、なお發掘整理中であり、詳しい調査報告が出ていないので、今は以上に止めておく。

次に北側の建築遺跡⁽¹⁸⁾は、一九七六年冬、墳丘の北側一五〇mの所で一號建築遺跡が發見され、續いて一九七七年三月、その西側に東西一直線に並んで二、三、四號建築遺跡が發見された。二號建築遺跡（圖45）を例にとると、建築主體は南北長さ一九m、東西三・四mの細長い形をし、南半部と北半部に片石を敷いた路面

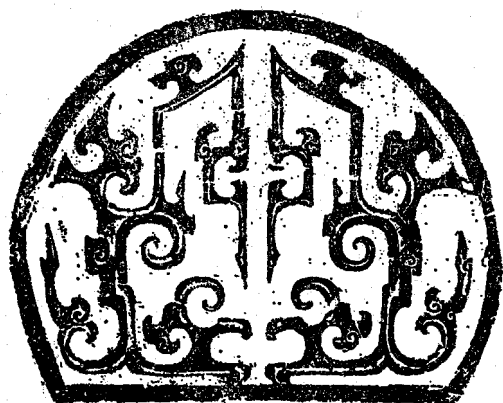


圖46 始皇陵北側二號建築遺跡出土夔紋瓦當（拓本）
高 48cm

では、陵内のこれらの建築は、一體何であり、どんな役割りを果していたのであろうか。この問題について、楊寬氏は蔡邕の「獨斷」を引用し、特に西側の建築は、秦漢時代の陵寢制度に基づく寢に相當するとの見解を示した。即ち「獨斷」(漢魏叢書本) 卷下は次のように述べている。

宗廟の制、古の學以て人君の居と爲す。前に朝あり、後ろに寢あり。終に則ち前に廟を制し以て朝を象り、後ろに寢を制し以て寢を象れり。廟は以て主を藏して、昭穆を列し、寢には衣冠、几杖、象生の具ありて、總じてこれを宮と謂う。(中略) 古は墓祭せず、秦始皇、寢を出すに至りて、これを墓側に起す。漢因りて改めず。故に金陵上を寢殿と稱し、起居、衣冠、象生の備えあり。皆な古の寢の意なり。

即ち古代の君主が居住した宮室は、前後二つの部分から成り、前部の朝は君主が朝見する公の場であり、後部の寢は君主が日常生活を送る私的な場である。一方、宗廟には前に廟、後ろに寢があつて隣り合わせになつてゐるけれども、これは古代人が、死者にも靈魂があつて生者と同様に政治をとり起居すると考え、生者に朝、寢がある如く、死者にも廟(朝)、寢を設けたのである。ところが始皇帝に至ると、これまで宗廟の中にあつた寢を分離して、陵墓の近くに築くようになった。これが陵寢制度であり、更に漢代に踏襲されて、陵上の寢殿に起居、衣冠、生活の道具が備えられたというのである。

楊寬氏は「獨斷」のこの記述に基づいて、墳丘の西側、即ち先の始皇陵東向きの説に従えば、陵の後部の建築を寢とみなしたのであるが、楊寬氏が寢としたもう一つの重要な根據は、前述の如く、西側建築遺跡で「麗山飢官」と刻まれた陶壺の蓋が発見されたことである。楊寬氏によれば、陶文の「飢」は飼と同義であり、一方「長樂飢官二斤、十一斤四百三十五」と刻された好時鼎(薛尚功「歷代鐘鼎彝器款

識」卷一八）や、「杜陵飢官□丞」（羅福頤「漢印文字徵」卷五）の漢印があることから、飢官とは、漢代の宮中や陵に設けて飲食を奉供する官のことだという。しかしまた「說文解字」段玉裁注によると、「飢」はもと「食」に作られたから、飢官は食官のこととも考えられる。そして「漢書」百官公卿表に、

奉常、秦官、宗廟の禮儀を掌り、丞あり。景帝の中の六年、名を太常と更む。屬官に太樂、太祝、（中略）又諸廟、寢園の食官の令、長、丞あり

と述べられるように、漢初には奉常の屬官であった。いずれにしても、陶壺の蓋の出土した墳丘西側の建築遺跡が、「飢官」の官衙の置かれた場所であり、寢が營まれた場所だという楊寬氏の主張は妥當と考えられる。同じ建築遺跡から出土した上述の「麗邑二升半 八厨」銘の陶壺や「樂府」銘の編鐘も、楊寬氏の陵寢説を更に裏附けるものである。というのは、寢の飢官であるからには、當然厨房の設備があったであらうし、また寢で墓祭が行なわれたからには、當然祭祀のための奏樂の設備があった筈だからである。

また文獻にも、漢代において寢が陵園の中に造られ、毎日四回の食事が奉供されたことがみえる。即ち「漢書」韋玄成傳は、前漢の廟、寢、便殿の祭りについて、次のように述べる。

高祖より下宣帝に至るまで、太上皇、悼皇考ともども、各々自ら居する陵の旁らに廟を立て、并せて百七十六たり。又園中に各々寢、便殿あり。日ごとに寢に祭り、月ごとに廟に祭り、時ごとに便殿に祭る。寢にては日に四たび食を上り、廟にては歳ごとに二十五たび祠り、便殿にては歳に四たび祠る。又月に一たび衣冠を游ばしむ。

ここで廟と寢が別々に造られたこと、その廟も陵園の附近に造られるようになったことは、前漢の制度として注目される。そして毎月、廟で祭祀が行なわれる日には、寢から衣冠を取出して廟まで運び、衣冠にとりついた靈魂を遊歴させたのである。これに對して寢での祭祀はあまり盛大ではなく、毎日四回食事を供えることが、即ち祭祀の具體的内容であった。そして更に寢とともに便殿が陵内に置かれたことを述べるが、これは顏師古の注に、「寢は陵上の正殿、平生の露寢のごときなり。便殿

は寢側の別殿なるのみ」とあるように、あくまで寢が正式のもので、便殿は寢のそばに附設された休息所のようなものであった。このように陵園内の建物として寢以外に便殿があったことは注目されるが、これが現在發見されている建築遺跡のどれに相當するか、現在の段階で同定するのは極めて困難である。この他、内城内の東方角(圖1)には、南北と東西に走る長牆によって區切られた長方形の大きな區畫があり、北と南に各一門が設けられていたが、これについても、何であるか、⁽¹⁶⁾今後の調査結果を待つ以外にない。

ところで、かく陵内に寢が營まれるについては、當然のこととして死者の靈魂が陵の墓室内に留まっていることを前提とする。死者の靈魂が陵内に住むと信じたからこそ、そのすぐ旁らに寢を設け、更に飢官などを配置し、毎日の飲食、起居の奉供をしたのである。靈魂のとりついた衣冠を寢から取出して廟に遊ばせたのも、陵墓並びに寢に靈魂が住むと信じたからこそである。しかるにこの死者の靈魂が陵墓の墓室内に住むということは、當時としては頗る革新的な考えであった。というのは、これまでの死者の靈魂についての考え方は、それは必ずしも明確であるわけではないが、少なくとも文獻に記されている儒家の考えでは、死後、人間は精神的な魂と肉體的な魄とに分かれ、魄は土に歸っていくのに對して、魂は天に昇っていくとしていたからである。例えば、前漢時代にそれ以前の禮に關する所説を集録した「禮記」の郊特性に、⁽¹⁷⁾

魂氣は天に歸し、形魄は地に歸す

と簡潔に述べられる通りである。また「禮記」檀弓下にも、⁽¹⁸⁾春秋時代の吳の賢者季札の言葉として、

骨肉は土に歸復す。命なり。魂氣の如きは則ち之かざるなきなり、之かざるなきなり

とある。即ち魂の肉體からの遊散をいい、「儀禮」土喪禮にみられる招魂の復の禮も、⁽¹⁹⁾この考え方に基づいている。この考え方に立てば、魂は墓室内に留まらないから、盛大に墳墓を築く意義はうすれて、寧ろ薄葬こそ好ましいものとなる。もとよりこれは儒家を中心にする考え方であったが、後漢の合理主義者である王充も、「論衡」論死篇の中で、⁽²⁰⁾「人死なば精神は天に升り、骸骨は土に歸す」という。これらに對して、陵の旁らに寢を築いた始皇帝の考え方は全く異なる。魄のみならず、魂も天

に昇らないで地に留まるとし、ここに古來厚葬の最たるものとして常に非難の對象とされてきた、あの空前絶後の規模の始皇陵が生まれたのである。

このように陵寢制度に體現された始皇帝の靈魂觀は、頗る革新的な考えであつたが、このことは當然他にも墳墓の構造やその防衛方法に對して、深甚な影響を及ぼさずにはおかなかつた。その一つが、地下に廣大な墓室空間を築くために採用された横穴式墓葬形式であり、始皇陵の前代の陵墓に比しての著しい違いである。從來の墳墓は、華北、華南を通じて豎穴式木槨墓が廣く行なわれたが、この墓葬形式は墓坑を地下深く堀るけれども、底部の墓室を除いて土を全て埋め戻し、しかもその墓室も木炭などで被ってしまうため、空間といへば木槨内部しかなく、極めて窮屈なものであつた。ところが始皇陵の場合は、秦始皇本紀に、

大事畢り、已に臧して、中羨を閉じ、外羨の門を下ろし、盡く工匠の臧する者を閉ざせば、また出ずる者なし

と記し、これは始皇陵の祕密が泄れるのを恐れて、埋藏に攜わつた者を皆な墳内に閉じ込めた有名な話であるが、ここに「中羨」や「外羨門」という言葉がみられる通り、墓室に通ずる墓道（羨道）が存在したことが知れる。實際最近の調査によつて、墳丘の東、西、北の三面において墓道の存在が確認されたことは、前に述べた通りである。また兵馬俑坑の場合にも、東側や西側において斜坡門道が発見されている。従つて始皇陵が横穴式の墓葬形式を採用したことは確實といえる。そしてこれを系譜的にみれば、上述の上焦村秦墓でみた洞室墓と呼ばれる横穴式小型墓（圖41）が、戰國晚期以後、鳳翔や關中地區で行なわれたのを受けて出現したものと考えられる。いずれにせよ、この水平構造の横穴墓が、墓室空間の飛躍的擴大を可能とならしめ、秦始皇本紀に「上は天文を具え、下は地理を具え」とあつたように、また最近のボーリング調査によつて巨大な地宮が採し當てられたように、墓道の奥に、地下深く廣大な墓室空間が築かれたのである。

では、何のためにこんなに廣い墓室空間を築いたかといへば、勿論上述の靈魂觀に従つて、死者の靈魂を住まわせるためである。「漢書」劉向傳には、始皇陵の餘りの厚葬振りを非難して、「石槨を游館となす」と述べ、また同じく賈山傳に、「中を

觀游と成し、上を山林と成す」とあるが、これらは、石槨か否かはなお問題があるにしても、槨が始皇帝の靈魂のすみかとして館狀に造られただけでなく、墓室の内部空間全體が靈魂の遊ぶ場として、一種の離宮のように仕立てられたことを物語っている。従つて墳丘のすぐ西側の墓道近くで發見された銅車馬も、まさに始皇帝の靈魂が地下の世界を遊ぶための乗物ということが出來、二分の一の縮尺とはいえ、皇帝用の實際の車駕に似せてあれ程精巧に作られたのも、そのためであつた。「獨斷」卷下によると、前漢時代、皇帝が月ごとに先帝の衣冠を廟へ遊ばす際には、「法駕を備え」たという。これは無論地上の世界のことであるが、恐らく地下の世界でも、皇帝の靈魂が出遊する際には法駕を仕立てたものと考えられ、故に銅車馬は法駕の際の安車の形式がとられ、その御官俑として奉車郎が表わされたのである。また他の兵馬俑坑、珍禽異獸坑、馬廐坑も、この始皇帝の墓室空間の延長として、地下に築かれたものと考えるべきで、地下で生活を送る始皇帝の靈魂にとって缺くべからざるものとして、それぞれ近衛兵、珍禽異獸、馬廐が配されたのである。

このように始皇帝の墓葬形式は、實に劃期的な試みであり、從來の戰國の大墓、例えば中山王譽と哀后の墓と目される河北平山縣の平山一、二號墓⁽¹⁹⁾、また魏國の王陵に比定される河南輝縣固圍村の三大墓⁽¹⁸⁾と比べても、はつきり異っている。この二つの例は、ともに墓上に建築の跡が認められ、その建築の性格をめぐって、寢に當るか、それとも享堂に當るかで、近年、楊寬氏と楊鴻勛氏との間で議論⁽¹⁹⁾が交された。もし楊寬氏がいうように寢に當るとすれば、ここに陵寢制度の先縱をみるわけであるが、二つの墓葬形式はともに堅穴木槨形式を採用して、地下の墓室空間は狭く、陵寢制度が前提する死者の靈魂のための居住空間として、それが適當かどうか疑問の餘地がある。寧ろ楊鴻勛氏のいうように、單に墓主を祭る享堂(祠堂)とした方が、平山一號墓出土の中山王譽の墓のプランを示した金銀象嵌「兆域圖」銅板(圖47)の「堂」という銘⁽²⁰⁾と合致するばかりか、また堅穴木槨墓の基本的理念とも矛盾しない。いずれにしても、蔡邕がいった如く、始皇帝は陵寢制度を初めて採用した點において劃期的意義があつたが、それは單に寢を墳丘の旁らに築いただけではなく、墓室空間の擴大によつて名實ともに陵寢制度を實現した點において、劃期的だったのである。戰國時代に或は既に陵寢制度が行なわれたかもしれぬが、中山王譽墓や輝縣固

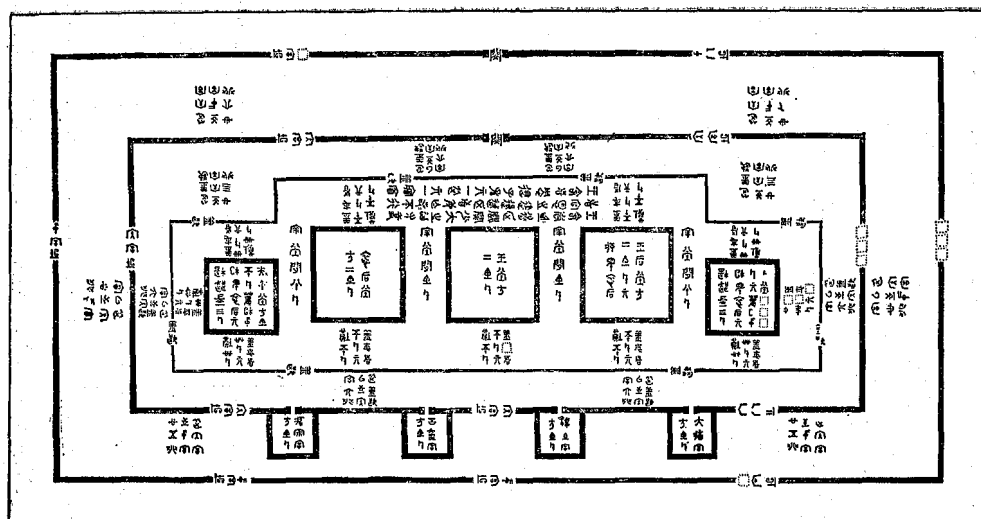


圖47 河北平山縣中山國一號墓出土金銀象嵌兆域圖銅板（模本） 長 94cm 幅 48cm 戰國中期

園村大墓の如く、それはいままお堅穴木槨形式を採用し、空間の擴大という實を伴っていなかった。横穴式を大々的に採用した始皇陵に至って始めて、死者の靈魂は生活のための具體的空間を與えられ、もはや儒家の考えたように天に昇るのでもなければ、長沙馬王堆漢墓出土のT字型帛畫のように崑崙山という不死の聖域へ昇仙するのでもなく、地下の墓室空間に留まって死後の生活を営んだのである。またその死後の世界は、兵馬俑坑や銅車馬坑でみたように、地上の現實を極めて強く反映したもので、殆んど地上の世界の延長として、それをそのまま地下に持込んだ點に特徴があったといえる。

さて、以上の靈魂觀と關連し、いま一つ始皇陵の前代の陵墓に比しての大きな相違は、陵墓の防衛方法の點である。これまで戰國時代の墳墓には、必ずといっていい程、辟邪もしくは打鬼の役割を果たす仕掛が設けられ、これらが墓内に侵入しようとする邪鬼、或は惡靈を追拂うと考えられた。特に南の楚地方ではこれが盛んに行なわれ、例えば河南信陽長臺關一、二號楚墓では、長舌を垂れ蛇を口に銜えた木彫漆彩鎮墓獸（圖48）や、鹿角を立てた漆彩木臺⁽²⁰⁾などが出土した。前者は蛇の形をした邪鬼に對する一種のおどしであり、後者は惡靈を突く角の力が信ぜられたのである。仕掛は必ずしも立體に限らず、隨州擂鼓墩曾侯乙墓の如く、青銅鹿角立鶴や漆彩木鹿の他にも、内棺の側面に武器を持った奇怪な神獸を描いて護ることがあった。また華北では、

上述の中山王罍墓で、恐ろしい形相の銀象嵌雙翼神獸一對⁽²⁰⁾が出土し、これも辟邪の機能を擔ったものと考えられる。ところが始皇陵においては、これまでのところ、こうした墓を守護する鎮墓獸の類は一切發見されておらず、代りに始皇陵の前面で武器を持って防衛する大量の陶製兵馬俑が發見されたのである。これは始皇陵の靈魂觀と大いに關わりがあると思われる。即ち鎮墓獸など辟邪のための神獸は、邪鬼が具體的に蛇の形をとってイメージされたように、あくまで死者の肉體を食荒すものに對する仕掛であり、これまでの如く墓が肉體的魄だけを留めると考えられたうちは、墓の守りはこれで足りた。ところが始皇陵の如く、墓が肉體的魄だけでなく精神的魂をも留めると考えられるようになると、別の防衛方法を講ずることが必要となり、そこで陵の前面に兵馬俑を配することが案出されたのである。兵馬俑が實戦用武器を攜帶していたことは、確かに兵馬俑獨特の寫實主義の發露であるが、同時に、恰も鎮墓獸が牙をむき角を立てて表わされるように、敵に對する一種のデモンストレーションとして武力的威赫をする意味があったと思われる。そして守るべきはもはや形魄ではなく、より高次の靈魂であるが故に、鎮墓獸ではなく、人間の兵士の形を借り、かつあれ程大規模に表わされたのである。

では、兵馬俑の軍隊がそれに對して守るべき敵とは、一體何であつたろうか。當然考えられるのは、靈魂に對する靈魂、つまり他者の靈魂であるが、この問題と關連して「史記」絳侯周勃世家には、周亞夫の墓の造營に關する興味深い記事がみえる。

條侯（周亞夫）の子、父のために工官の尙方より甲楯五百被 以て葬すべきものを買う。庸を取りてこれを苦しめ、錢を

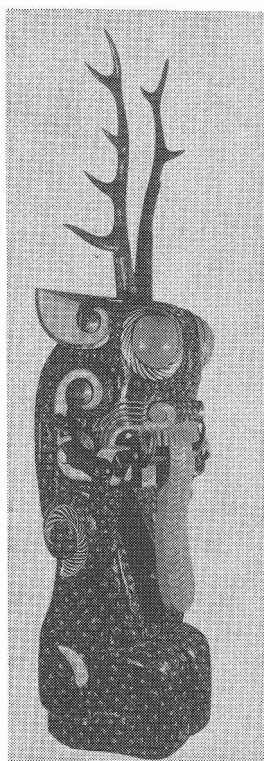


圖48 信陽長臺關一號墓出土漆彩鎮墓獸(複製)
戰國 高 約 195 cm

予えず。庸その縣官より盜買せし器なるを知り、怒つて變を上して子を告せば、事は條侯に連汙せり。書既に上に聞せられ、上 吏に下す。吏 條侯を簿責するも、條侯對えず。景帝これを罵りて曰く、吾れ用いずと。召されて廷尉に詣る。廷尉責めて曰く、君侯反せんと欲するかと。亞夫曰く、

臣の買うところの器は乃ち葬器なり、何ぞ反すと謂うかと。吏曰く、君侯たとい地上に反せずとも、即ち地下に反せんと欲すと。吏これを侵すこと益々急なり。

周亞夫は周勃の子で、文帝の時、將軍となつて匈奴を防ぎ、景帝の時には、吳楚七國の亂（前一五四）を平定して丞相の位に上つた人である。記事の内容は、周亞夫の子が父の葬式に備えて官の甲盾五百具を買つたことで、傭人がその盜買品であることとお上に告發し、その結果、事は周亞夫にも及んで、景帝に罵られた擧句、廷尉に謀反を嚴しく訊問され、最後は獄中で瀕血して死ぬまでの經過を記す。ここでまず注目されるのは、葬品として鎧甲と盾五百具を買つてゐることで、これは單なる副葬品というより、その數量の多さからみて、兵馬俑を作るためのものと考えられ、またそうして始めて、「地下に反せんと欲す」という廷尉の言葉も生きる。するとこの實用鎧をつけた兵馬俑は、當然等身大で、實用武器の盾を攜帶することになり、これによつて、始皇陵にみられたと同じ兵馬俑が文獻で裏附けられたと同時に、その制作が前漢の景帝の時期（前一五六—四一）にまで及んだことが知れる。そしてもう一つ注目すべきことは、周亞夫が地下での謀反を問われた如く、兵馬俑が地下の世界で戦争をすることが眞面目に信じられたことである。つまり死者の靈魂のすむ地下の世界では、地上の世界と同じく戦争が行なわれて、反亂を起したり或は防衛したりすると考え、兵馬俑はそうした敵に對する備えとして機能すると信じられたのである。始皇陵の場合も、兵馬俑は、他の銅車馬坑や馬廐坑のように、死後の世界における始皇帝の靈魂をめぐる一環としてただ配されるだけでなく、いつでも出撃できるよう軍陣を組み武器を手にしてゐたところに特徴があつた。これはやはり敵の靈魂の攻撃に對する防衛を強く意識したものであつたといえよう。そして更に近衛兵の軍陣を表わした始皇陵の兵馬俑が東向きであつたことに、もし何らかの積極的意味があるとすれば、やはり始皇帝自身が東方の六國を滅ぼし天下を統一した者である故、滅ぼされた六國の人々の靈魂の反亂に對する防衛ということが考えられよう。

このように始皇陵は、陵寢制度を創始して陵の旁らに寢を營んだり、地下に廣大な墓室空間や陪葬坑を築いて百官や軍隊の俑を置くなど、墓葬形制史上、幾多の劃期的方法がみられ、それらは全て地下の墓室空間を死者の靈魂のすみかとする始皇陵

の基本的考えに基づくものであった。こうした考えは、「獨斷」によれば、「漢因りて改めず」とあったが、では前漢へと具體的にどのように繼承されていたのか、始皇陵について更に補足するためにも、次章において考察してみよう。

七 始皇陵の前漢初期への影響

(1) 楊家灣漢墓

さて、兵馬俑坑、銅車馬坑などを伴って大規模に造營された始皇陵の墓葬形制は、恰も秦の官制が前漢に繼承された⁽²⁶⁾と丁度同じく、前漢初期へと受繼がれていた。それを示す典型的な例として、まず楊家灣漢墓⁽²⁶⁾が挙げられる。この墓は隣接する二基の墓から成り、咸陽市の東北二・二km、漢の高祖劉邦の長陵と景帝劉啓の陽陵の間に位置し、長陵の方に稍や近いので、長陵四號、五號陪葬墓と編號された。しかし最初に發掘されたのは、一九六五年、四號墓の南七〇mの地點で發見された陪葬坑^(圖49左)で、二五〇〇體餘りの大量の彩繪陶俑の出土をみた。次いでこれら陶俑の隨葬狀況を更に明らかにせんと、一九七〇年十一月から一九七六年十一月にかけて、四號墓、五號墓の發掘が行なわれたのである。

まず陪葬坑は、土坑十基、磚坑一基の計十一基あり、土坑は南北に二列をなして東西に五基ずつ相對し、磚坑は二列の間にあった。土坑は堅穴で、南北の長さ二・六五—三m、東西の幅約一mで、深さは一—二mであった。そして堅穴の下部に一—二箇の土洞^(圖49右)を掘り、そこに陶俑を埋めていた。土坑は立俑坑と騎馬俑坑の二種あり、南邊の四土坑から立俑二千體近くと若干の騎馬俑、北邊の六土坑から騎馬俑五八〇體餘りと若干の立俑が出土した。いずれも狭い土坑に立錐の餘地もない程、ぎっしりと整列して並べられていた。また磚坑は方形の花紋磚で組立てられ、塗金銅鏤、弩機、車馬飾りなどが出土した。

さて、十基の土坑から出土した大量の騎馬俑と立俑は、いずれも武裝し、整列して軍隊を編成していた。騎馬俑^(圖50右)は高さ六八cmと五〇cmの大小二種類あり、黒、紅、紫、白の馬身に、韁や絡頭などを彩畫し、騎兵は紅、白、緑、紫などの服を

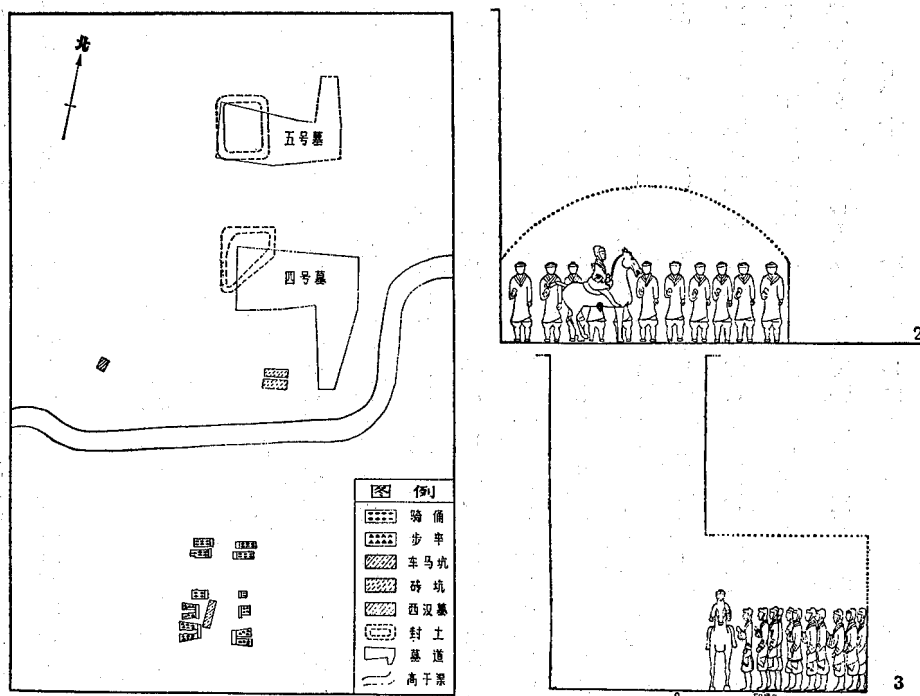


圖49 咸陽楊家灣漢墓陪葬坑 (左)位置圖 (右)立俑坑斷面圖 上 東視 下 北視

着て、ある者はその上に黒い鎧甲をつけ、手に轡と武器を握る動作をしていた。但し馬身並びに騎兵の脚部、馬兵の上半身、馬の尾の三部は、別々に作られていた。また立俑(圖50左)も高さ四九cm前後と四四cm前後の大小二種類あり、多く右手を半ば舉げ、左手を下に垂らしていた。右手に武器、左手に盾を所持していたものと思われる。これら一般の武士俑以外にも、様々の仕草をした指揮官俑、舞俑、奏樂俑などがあつた。しかしその作り方は、容貌を始めとしてあまり寫實的とはいえず、概して類型的であつた。

このように楊家灣漢墓陪葬坑出土の陶俑は、秦始皇陵の兵馬俑と比べれば、俑の大きさ、數量、或は寫實性の點で遙かに見劣りするけれども、同じく兵馬俑とみなしてよからう。そしてこれらの陪葬坑が、南向きに墓道をもつ四號墓の南側正面に位置して、恰も四號墓を護るかのように配置されていたのも、始皇陵の兵馬俑坑と同様であつた。従つて陵墓の正面に兵馬俑坑を造るといふ始皇陵に始まつた風習は、規模こそ違え、楊家灣漢墓にそのまま受繼がれたといつてよい。始皇陵の兵馬俑坑は、創始ではあつても孤例ではないのである。この楊家灣漢墓の墓葬時期については、その後の四號墓、

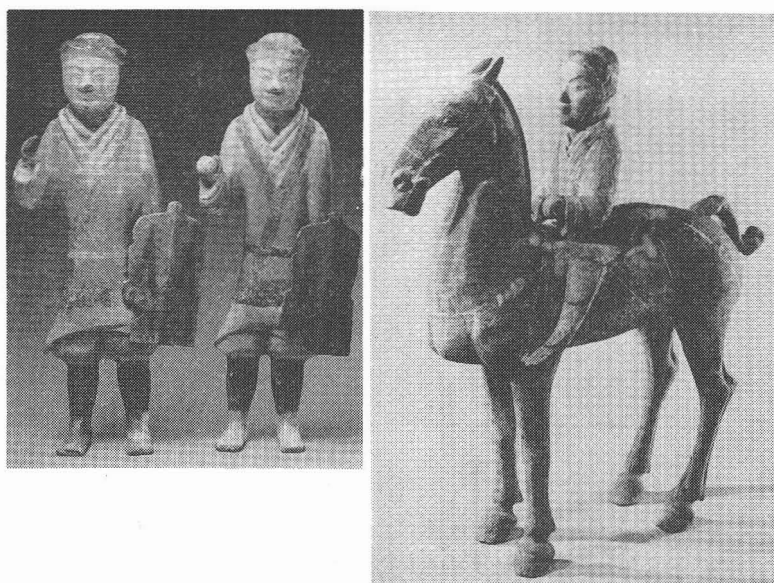


圖50 咸陽楊家灣漢墓陪葬坑出土陶俑 前漢
(左) 武士俑 高 49~50cm (右) 騎馬俑 高 約 68cm

五號墓の發掘成果も踏まえて、文帝（前一七九—一五七）から景帝（前一五六—一四二）時期との説⁽²⁸⁾が出てゐる。これは長陵と陽陵との間の陪葬墓というその位置からも、當然推定されることである。また別に「水經注」渭水⁽²⁹⁾には、
（成國故渠は）又東のかた渭城の北を逕^すぎ、又東のかた長陵の南を逕^すぐ。故渠又東のかた漢丞相周勃の冢の南を逕^すぎ、故渠の東南これを周氏の曲という。又東のかた陽陵の南を逕^すぎ、又東南のかた渭に注^すぐ。今水なし

とあり、成國故渠がこの附近を通過し、その北に周勃とその一族の墓があつたことを根據に、前漢初期の周勃と周亞夫父子の墓とする説もある。しかし、先に「史記」絳侯周勃世家を引いて、周亞夫の息子が父の墓のために官の甲盾五百具を買つて兵馬俑を作ろうとしたことを述べたが、陪葬坑の陶俑は、その計畫にあつた等身大の兵馬俑とはそぐわないように感じられる。また報告によれば、楊家灣漢墓の西約三〇〇mの地點に周勃の墓と推定される大きな墳丘があり、その北には周亞夫の墓と推定される二つの大きな墳丘（「雙冢」）があるという。従つて周勃父子の墓と性急に斷定することは危険で、今はただ文帝から景帝の時期の大墓とするに止めておく。いずれにしても始皇陵に倣つて兵馬俑を作る考えは、少くとも前漢初期にあつたことが、これによつて實證されたわけである。⁽³⁰⁾

事實、この時期、陵墓の周圍や前面に彩繪陶俑を陪葬する風習は廣く行なわれ、他にも幾つかの發掘例が擧げられる。まず咸陽市の東北約十七・五kmの漢惠帝（前一九四—一八八）の安陵、更にその東約二

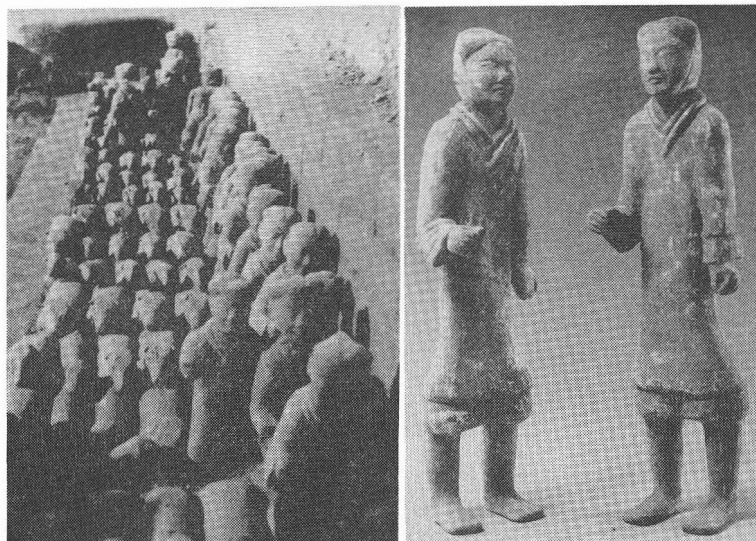


圖51 安陵陪葬墓從葬溝並びに出土武士俑
(左) 南溝中段 (右) 武士俑 高 44~46 cm

kmの狼家溝に位置する安陵十一號陪葬墓⁽⁴²⁾(狼家溝漢墓)では、一九八〇年、封土の下の墓室上口をめぐる南北十九m、東西二・一mの磚槽從葬溝の南側一部(九m)が発掘され、武士俑八四體、牛、羊、豚の陶製家畜一九四體が出土した。南側從葬溝(圖51左)は地表から約一・二mの深さ、〇・五四mの幅でめぐり、溝の兩壁は磚を積んでいた。そして溝内に陶俑が六列に並べられ、武士俑が北側(内側)の一行を占め、他の五列は陶牛(四六體)、陶羊(一二五體)、陶豚(二三體)が東を向いて整列していた。武士俑(圖51右)は高さ四四―四六cmで、深綠色或は紅色の長襦に鎧をつけていた。別にこれより先一九五〇年には、その西北角が破壊されて、舞蹈俑、武士俑、陶馬が出土したという。

また、西安東郊の白鹿原は、薄葬論を主張した漢文帝の霸陵が営まれたことで有名であるが、その東北端の任家坡に文帝の皇后竇后(前三五歿)を葬ったとされる竇陵があり、その竇陵の西側壁から西へ約一km離れた場所で、一九六六年、土坑四七基⁽⁴³⁾が発掘された。うち完全なのは三七基で、東西八列に並んでいた。土坑は陶棺を置く(圖52右)か、條磚で柩を築くか、なかに陶俑、陶罐、禽獸のうち、どれか一種類か二種類を埋葬していた。禽獸の骨には、馬・羊・豚・犬・鶏・鵝・鶴などがあり、陶罐には穀物がはいっていた。また陶俑は立俑九體、坐俑二九體が出土したが、全て彩繪を施した侍女俑であった。立俑は高さ五三―五七cmで、長襦を着て方口履をはき、兩手は半握りにして上下に重ね、胸前に何か柄のようなものを持つ動作をして侍立していた。⁽⁴⁴⁾坐俑(圖52左)は高さ三三―三五cmで、三種類あり、皆な髪を後ろに垂らして三重の衣を着ていたが、

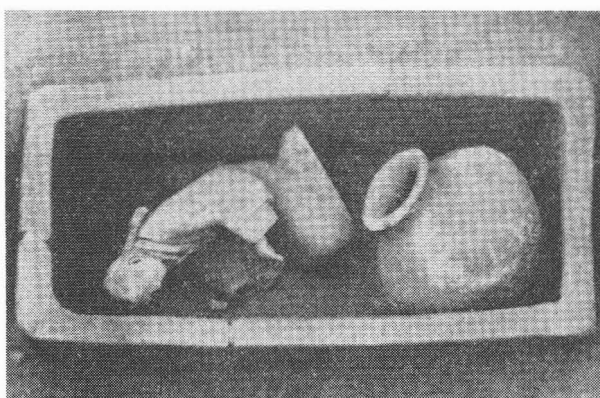


圖52 西安任家坡寶陵陪葬坑並びに出土侍女俑
(左) 侍女坐俑 高 約 34cm
(右) 土坑

兩手は胸の前で組んだり、膝の上で組んだり、或は前に挙げたりしていた。このように女性の侍俑ばかり出土したのは、次の南陵の場合と考えあわせ、被葬者が女性だったからで、同じような配置の仕方でありながら、先の楊家灣漢墓の場合は、被葬者が男性だから、武士俑が陪葬されたと考えられる。⁽²⁵⁾

次に、南陵も同じく白鹿原にあって、寶陵から二・四km西南に位置し、文帝の母に當る薄太后の墓と考えられている。一九七五年、この南陵の墳丘西北二〇〇mの所で陪葬坑⁽²⁶⁾が発見され、合計二〇基、西北から東南の方向に三列に並んでいた。陪葬坑は長方形の堅穴土坑で、條磚で枠を作ったり陶棺を置いたりし、陶俑、動物、陶罐などを納めていた。陶俑は高さ五五cmと二三・八cmの大彩繪侍女俑二體だけ出土し、大俑は寶陵の立俑と全く同じで、小俑は腹の前で兩手を組合わせていた。興味深いのは動物で、識別不能の小型動物の他、熊猫(ペンダ)、犀、猫、馬、羊、犬などの骨が発見され、特に熊猫(但し頭骨のみ)と犀の骨の出土は珍しかった。熊猫は、「説文解字」⁽²⁷⁾に「獼は熊に似て黄黑色、蜀中に出ず」とある通り、獼に当たると考えられるが、秦漢時代でも關中では稀な動物であった。また犀は、犀甲というように、鎧甲の材として珍重されていたけれども、これもまた當時の關中では稀な動物であり、特別に上林苑などの苑囿で飼育されたものと考えられる。従って兩動物はまさに異獸に屬し、始皇陵の珍禽異獸坑と同じく、死後の世界を形作るべく、他の家畜と一緒にそのまま地下に持込まれたものとみなされる。

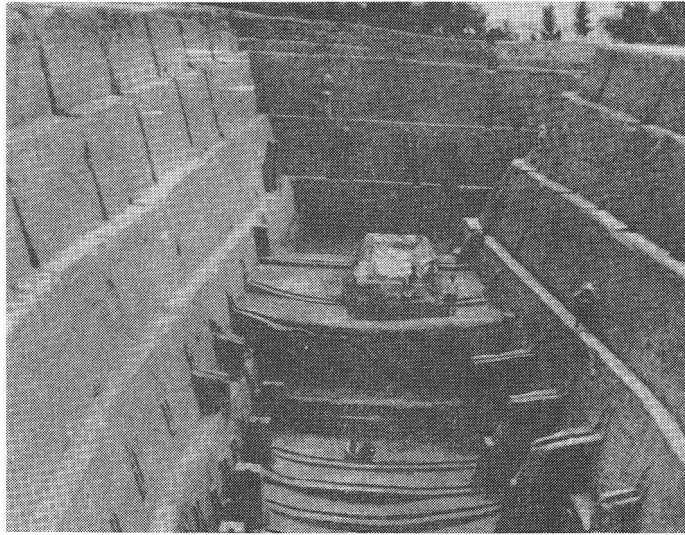


圖53 咸陽楊家灣四號漢墓西墓道

このように前漢初期には、秦始皇陵に倣って陵墓の前面もしくは周囲に兵馬俑坑を作る風習は、楊家灣漢墓のみならず、更にそれより早い時期の安陵十一號陪葬墓にもみられた。また被葬者が女性の場合は、兵馬俑の代りに侍女俑を従葬する風習が、寶陵や南陵においてみられた。これらは關中において、始皇陵の創始した墓葬形式が、如何に大きな影響力をもって廣まったかを物語っているよう。そしてこの影響力はこれら陪葬坑だけでなく、墳墓の本體にも當然及んだと考えられる。そこで再び楊家灣漢墓に戻って、一九七〇年以後、發掘が行なわれた四號墓、五號墓をみることにしよう。またそれによって、未發掘である始皇陵の本體について知る何らかの手懸りが得られれば幸いである。

さて、楊家灣漢墓⁽²⁸⁾は、四號墓が大量の彩繪陶俑を出土した陪葬坑の北七〇mに位置し、五號墓は更に二六m北に位置していた。四號墓(圖54)を例にとると、高さ四mの封土があり、墓は墓道と墓室の二部から成っていた。墓道(圖53)は曲尺形をなし、南端の入口から傾斜した道を四〇m進むと、西へ折曲がり、更に傾斜した道を約三四m進むと墓室に達する。興味深いのは、全體として一つの大型邸宅建築を形作っていたことで、封土堆を建築の屋頂として、南墓道を通路、西墓道を中庭、墓室を邸宅の後室にみなしていた。そしてそのために複雑な構造が要求され、南墓道は最も深い所で四層臺をなし、墓口周邊部に凹槽を東西對稱に排列して、梁を渡して屋架を設け、西墓道の方は六層臺をなして、同じく凹槽を南北對稱に排列して、四層臺までの屋架を築くとともに、更にその下に二層の樓閣を築いていた(圖54)。墓室は既に焼かれていたが、

墓道の西端に、墓室の頂部と墓道の六層臺の面が大體等しくなるように、二・五m掘り下げて造っていた。室内の中央に方形槨室を置き、兩側を邊廂にして食品、衣物、裝飾品を収めていた。

また五號墓(圖49左)は、折曲がる方向は四號墓と逆であったが、同じく曲尺形をなし、五層臺の墓道から更に二・二五m掘り下げて墓室を築き、槨室が置かれた。葬具は一槨一棺で、玉衣片二〇二枚が棺槨の内外に散亂し、遺體は銀縷玉衣を着ていたものと推定された。銀縷玉衣は、金縷玉衣、銅縷玉衣とともに、玉片をそれぞれ銀糸、金糸、銅糸で綴り合わせて衣を作り、被葬者の身分に應じ遺體に着せたものである。勿論金縷玉衣が最も高級で皇帝のために用いられたが、銀縷玉衣、銅縷玉衣については、「續漢書」禮儀志に、⁽²⁹⁾

諸侯王、列侯、始めて封ぜられし貴人、公主薨ずれば、皆な印璽、玉押(玉衣)銀縷を贈らしめ、大貴人、長公主は銅縷なり

と細かく規定されていた。従って五號墓から銀縷玉衣が出土したことは、とりもなおさずこの墓の主人が諸侯王、列侯、始封貴人クラスであったことを示している。但し前漢時代にはこの規定は必ずしも嚴格に守られたとはいえず、例えば中山王劉勝(元鼎四年歿、前一一三)とその妻竇綰を葬った河北滿城一、二號漢墓⁽²⁰⁾では、劉勝は諸侯王であるから當然銀縷玉衣の筈であったが、實際は夫婦ともに金縷玉衣を着ていた。しかし楊家灣五號漢墓から銀縷玉衣が発見されたことによって、四號墓ともども墓の主人の身分に關する重要な手懸りが得られたことになる。

それはさておき、このように四號墓、五號墓ともに、墓道と墓室が當時の貴族の邸宅をまねて木造で構築されていたことは注目される。これは、始皇陵の場合と同じく、横穴式の墓葬形式によって地下に死者の靈魂が留まる空間を築き、更にその空間を靈魂のすみかとして邸宅の形に仕立てていたものと理解されよう。従ってこの點でも楊家灣漢墓が秦始皇陵の強い影響を被っていたことは明らかで、或はその發展した形式ともとれるけれども、始皇陵も、「石槨を游館となす」(「漢書」劉向傳)と稱されたように、靈魂のすみかとして宮館や離宮を意識して造っていたことは、先に指摘した通りである。まさに楊家灣漢墓

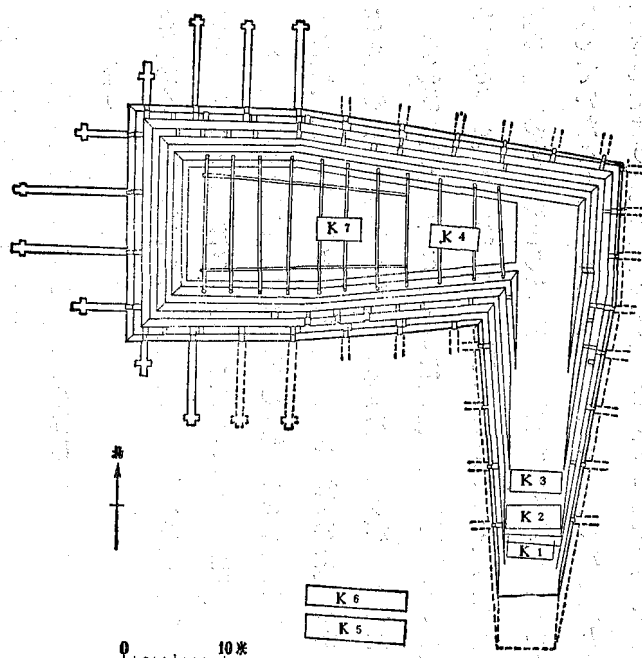


圖54 咸陽楊家灣四號漢墓並びに陪葬坑位置圖

の墓室空間構造は、始皇陵のそれを窺う又とない好資料といえよう。

しかし、楊家灣漢墓と始皇陵の類似はこれらだけに止まらず、兵馬俑坑以外の陪葬坑の點でも似ていた。即ち四號墓の墓坑の内外において、新たに発見された七基の陪葬坑（圖54）である。一、二、三號坑（K1、K2、K3）は墓道の入口附近にあり、四號坑（K4）はその折曲がる所、五、六號坑（K5、K6）は墓道入口の西二〇mの所、七號坑（K7）は墓室の前にあった。一、二、五、六號坑は磚坑、三、四、七號坑は木坑であった。まず七號坑は、木箱の内に二輛の彩繪漆車と車の下に二匹の犬の骨、また羊の骨をいれた漆盤などがあり、祭祀坑とみられる。一、二、三號坑は用具坑で、例えば二號坑は鴨蛋壺（五）、鍾（七）、方倉（二五）、耳杯（三二）など日用陶器が納められ、三號坑は三五個の陶製方倉をびっしり並べ、中に小米、小麥など食糧をいれていた。また四、五、六號坑は車馬坑で、四號坑には三頭立ての二輛の馬車が置かれ、大型の一輛の車の後には、劍を佩びた二體の彩繪俑が立っていた。五號坑は五輛の馬車が置かれ、一號車を例にとると、四頭立て、單轅で車蓋はついていなかった。また六號坑は五號坑より更に大きく、八輛の馬車が置かれ、うち四輛には車蓋があった。八號車を例にとると、車蓋がつき、車上に白い袍を着て手に劍を持った俑一體が立ち、夾苧漆彩の車の後に、戟を持つ者と弓をひく者との二體の俑が従っていた。

この楊家灣漢墓の陪葬坑を始皇陵のそれと比較してみると、まず兩者の車馬坑は、車蓋つきの車の他、佩劍の俑や白い袍を

着た俑を出土するなど、かなり似ていた。恐らく前者の馬車も、墓の主人が死後の世界において乗って遊ぶために埋葬されたものであろう。しかるに前者の祭祀坑や用具坑は、後者において発見されていない。しかし、これは今後の発掘を待つべきであらう。というのは前者の祭祀坑で出土した彩繪漆車が、後者の西側墓道の南北耳室に通ずる甬道で発見されたとの報告が、正式ではないけれども出ているからである。従って楊家灣漢墓は、規模こそ違え、兵馬俑坑を含め陪葬坑の點でも、秦始皇陵の墓葬形式を受け継いだものとみられ、始皇陵の研究に貴重な資料を提供するのである。

そしてこの楊家灣漢墓に繼承された横穴式の墓葬形式が、更に前漢中期へと受け継がれて、山崖に巨大な洞穴を穿った河北滿城の中山王（劉勝）夫婦墓や、山東曲阜九龍山魯王墓等の所謂崖墓となり、また中原、關中一帯に流行した空心磚墓や磚室墓となるのである。

(2) 馬王堆三號漢墓

さて、前節での考察によって、前漢初期の關中の大型陵墓は、始皇陵の影響を深甚に被っていたことがわかったが、では、これ以外の地方ではどうかであろうか。試みに眼を南に轉じて湖南長沙馬王堆漢墓に注目してみよう。馬王堆漢墓は長沙市の東郊五里牌村にあり、一九七二年に一號墓が發掘され、一九七三年には隣接する二號墓、三號墓の發掘が行なわれた。この三基の墓はともに堅穴木槨から成り、特に一號墓、三號墓において、上述のT字型帛畫を始め絹織物、漆器など、保存状態の良好な副葬品が豊富に出土した點で大變意義があったが、更に被葬者とその相互關係、また埋葬の年代が相當正確に知れたことも、大きな收穫であった。即ち二號墓が呂后二年（前一八六）に亡くなった長沙國丞相軼侯利蒼の墓、一號墓が文帝十二年（前一六八）の數年後に亡くなった利蒼夫人の墓、そして三號墓は、出土した木牘によって文帝十二年という埋葬の絶對年代が知れ、被葬者は墓の位置關係から利蒼夫婦の息子と推定された。

それはさておき、始皇陵との關連で興味深いのは、三號墓から出土した遺策である。遺策は埋葬品のリストであり、七枚の

木牘と四〇三枚の竹簡から成り、木牘が副葬品の大きな名稱と數量を記し、竹簡がそれを更に細かく逐一具體的に記していた。内容は食品、衣服、各種器具の一般副葬品の他、侍従、樂舞、車騎なども含み、生活に必要なあらゆることにわたっていた。特に侍従關係の部分が注目され、二枚の木牘に男女それぞれ次の如く記載されていた。

右方男子明童凡六百七十六人、其十五人吏、九人宦者、二人偶人、四人擊鼓鑄鐸、百九十六人從、三百人卒、百五十人婢。
右方女子明童凡百八十人、其八十人美人、廿才人、八十人婢。

ここで「右方」とは、それぞれ右に書かれた細かい内容を纏めて記すことを意味し、「明童」は明器としての俑のことで、實物の代わりに俑を埋葬したことをいうのである。このように木牘は、大量の男女の俑を具體的にリストアップしていたが、竹簡の内容は更に詳細であり、特に男子の侍従關係を拾うと、次の如く記されていた。

「家丞一人」。「謁者四人」。「家吏十人」。「宦者九人」。「執短鑿者六十人、皆冠畫」。「執盾六十人、皆冠畫」。「鑄鐸各一、擊者二人」。「建鼓一、……鼓者二人、操枹」。

これが現在發表されている男子侍従關係の竹簡の全てであるが、別に「長戟」「弩」「長矛」の武器を執る者の數量が記され、そのうちある武器を執る者は百人にも達するという。ここで「宦者九人」は木牘の「九人宦者」に、「家丞」「謁者」「家吏」の計十五人は木牘の「其十五人吏」に相當し、また「鑄鐸」を擊つ者と「建鼓」を鼓す者計四人は、木牘の「四人擊鼓、鑄鐸」に明らかに相當しよう。その他、「短鑿」「盾」「短戟」「長戟」「弩」「長矛」などを執る者は、木牘の「百九十六人從、三百人卒」に相當するものと考えられる。

しかしここで注意しなければならぬのは、遺策に記された俑が全て實際に埋葬されたわけではないことである。馬王堆三號墓から出土した木俑は、全部で一〇四體だけで、その内譯は着衣俑（歌舞、樂俑、侍俑）二五體、彫衣俑四體、彩繪俑七三體、桃枝小俑二體であった。これは實際に俑を作る代りに、棺室の東西壁に掛けた帛畫に描いて表わしたためではないかと考えられる。即ち棺室東西壁の二幅のうち、東壁の帛畫は破損が甚しく、全貌はともつかめなかったが、二枚の殘片をみると、房

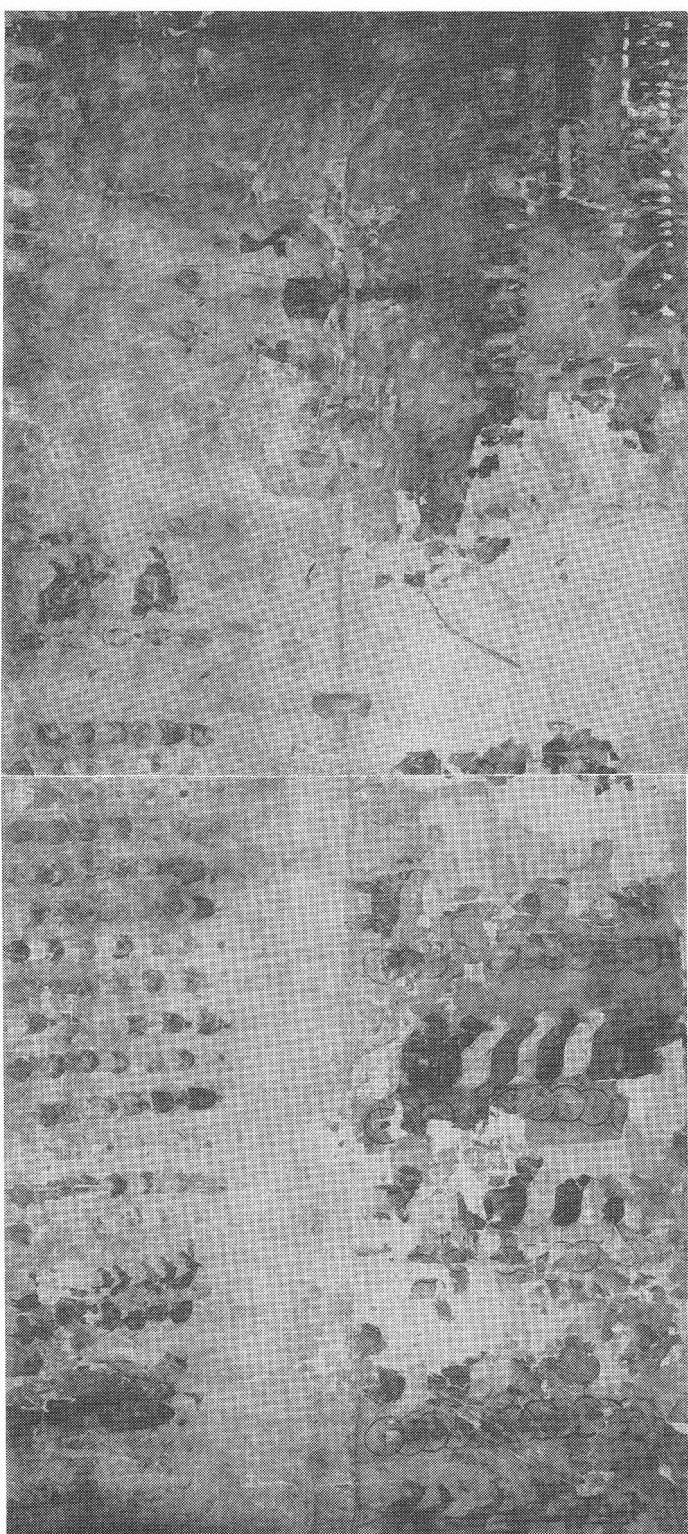


圖55 長沙馬王堆三號漢墓出土西壁帛畫 漢文帝12年 (B.C. 168) 長 212cm 幅 94cm

屋建築、車騎、奔馬、そして婦人の乗船する場面などが描かれていたという。これに對して西壁の帛畫(圖55)の方は、傷んでいたがもう少し保存がよく、長さ二・一二m、幅〇・九四mの長方形の絹に、數百人の人物、數十輛の戰車、數十騎の騎馬から成る一種の車馬儀仗の光景が描かれていた。これを更に細かくみれば、畫面は内容から左上と左下、右上と右下の四つの部分に分けることが出来る。

まず右上には人物が上下二列配され、上の一列は、先頭に長袍を着て腰に劍を佩びた戴冠の貴人(圖56左)と、後で傘蓋をさしかける侍者を描き、その後方に紅、白、黄、黒などの袍を着て戈の武器を手にした屬吏と思われる人物が十八人従っていた。また下の一列は、手に盾を持った三〇人近い人物を描いていた。そして右を向いて立つこれら二列の前面には、土で築かれた少なくとも八段以上の高い壇があるが、上の列の先頭の戴冠の貴人は明らかに壇上に立つのがみられ、傘蓋をさす人物は勿論、或は後方の十八人の屬吏も壇上に立っているものと解される。というのは上の列は下の列に比べて大きく華やかに描かれ、はっきり區別されているからである。

次に左下は、全體の幅の約四分の三を使って方形の陣を描き、上の一邊は四〇人、他の三邊は皆な二四人ずつ配していた。そして上下の邊の人物が腕を垂らして立つだけなのに對して、左右の邊の人物は長矛を手にし、顔は全員上方の壇上の人物と屬吏の方に向けていた。また方陣の中には、建鼓を撃つ者二人と、架(筍處)に樂器を吊して鳴らす者が二人いた。建鼓は上に華蓋をもち五彩の花紋で裝飾された豪華なもので、二人が袍をとって左右から撃つ仕草をしていた。竹簡の遺策にみられた「建鼓一……鼓者二人、操枹」「鑄、鐸各一、擊者二人」の記載は、帛畫のこの部分に對應するものであろう。⁽²³⁾

また畫面の右上には、整列した戰車を少なくとも四列描き、各列十輛餘りが配されていた。戰車(圖56右)は全て四頭立てで、左の壇の方を向き、御手は車輿内に坐っていた。その他、四列の前方にcaろうじて馬車と人物などの一群を判別出来、後ろにも六頭の馬が一行になって上半身だけ現われており、こちらは騎兵とみられる。

最後に右下には騎兵隊が描かれ、十四列縱隊で、各列六騎から成り、上の戰車隊の方を向いて後姿をみせていた。またこの

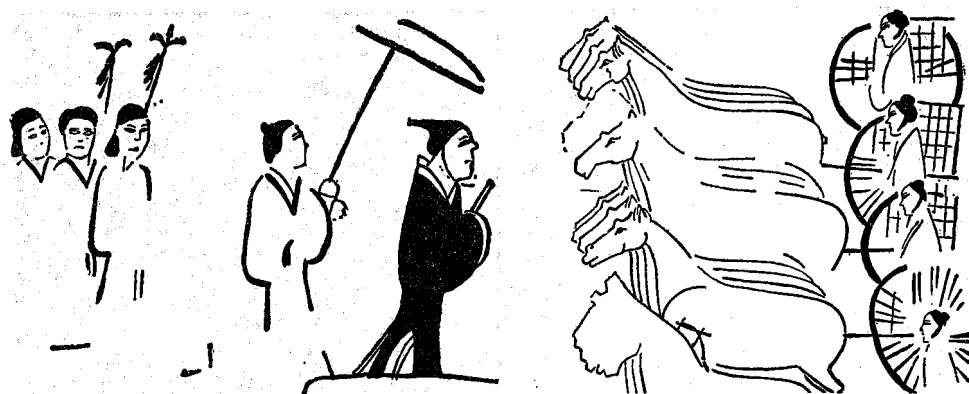


圖56 長沙馬王堆三號漢墓出土西壁帛畫部分 (模本)
(左) 壇上貴人と從者 (右) 戰車

騎兵隊の左右兩側には、一列ずつ左向きの騎兵が配され、右の列は騎乗していたが、左の列は騎兵が鞍馬の後ろに立ち右を向いていた。しかし奇妙なのは右下隅の部分で、左側の騎兵隊と全くそぐわない形で、異常に大きく比例を無視してもう一場面を描き、冠をつけ長袍を着た人物が、左に一人、右に二人の侍者を従え、くつろいだ雰囲気であわされていた。

確かにこの帛畫は遣策の内容を描き表わしたものと考えられる。上述の建鼓、鐃、鐸を撃ち鳴らす四人だけでなく、「盾を執る」者、「長矛」を執る者などが互いに共通しているからである。また、この他にも、木牘は車馬、牛車、鞍馬などについて、

右方車十乘、馬五十四、附馬二匹、騎九十八匹、𨋖(輜)車一兩、牛車十兩、

牛十一、豎十一人

と記載していたが、帛畫の戰車を引く馬や騎兵の馬は、ここである「馬」「騎」に相當すると考えられるからである。但し嚴密にいうと、數量が一致しないが、これは破損のひどかった東壁帛畫や、一部の木牘によって表わしたためと考えられよう。

さて、以上によって東西壁の帛畫が、遣策の内容を圖示していることがわかったが、では、殆んど判別不能の東壁帛畫は別にして、車騎を描いた西壁帛畫の方は、何の場面を表わしているのだろうか。まず見易いのは、左下の方陣にしろ、右上の戰車隊にしろ、右下の騎兵隊にしろ、全て左上の壇の方を向いていることで、壇上の冠をつけた貴人を中心に、畫面全體が展開していることである。これは貴人が壇上に立って、整列した歩兵、車兵、騎兵の三隊を閱兵しているとみるのが最も妥

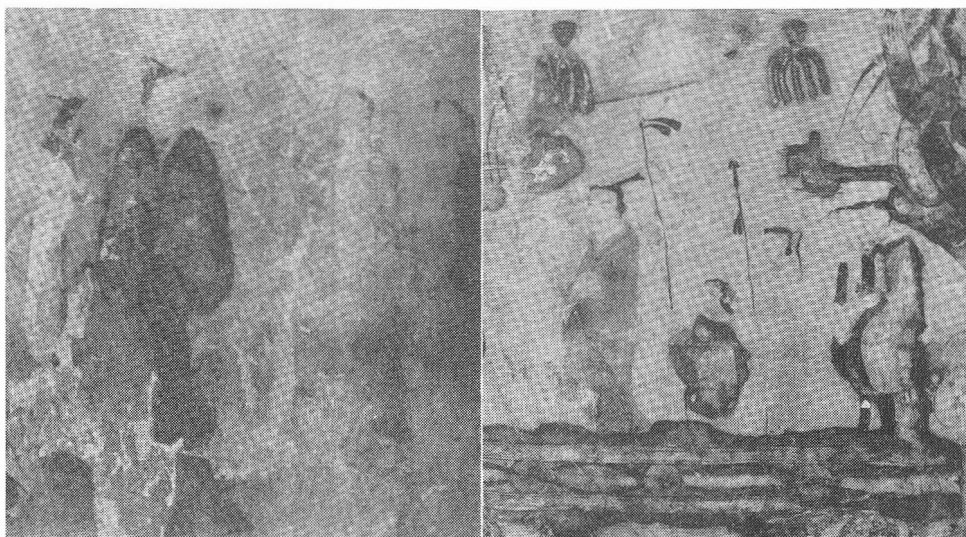


圖57 長沙馬王堆三號漢墓出土帛畫 墓主人
(左) 西壁帛畫(部分) (右) T字型帛畫(部分)

當であろう。そして閱兵の儀式であるが故に、建鼓、鐃、鐸の樂器が鳴らされるのである。⁽²⁰⁾ またこの壇上の貴人については、この三號墓の主人公とする説が行なわれているが、必ずしもそうとは限るまい。確かに冠をつけ劍を佩び傘蓋をさしかけられた様は、この墓から出土したT字型帛畫中段に描かれた墓主人(圖57右)に似るけれども、似ているといえ、上述した右下隅の貴人(圖57左)も、くつろいだ雰囲気似ているからである。そのうえ何よりも、右下隅の貴人の方が壇上の貴人より壓倒的に大きく描かれており、古代繪畫にあつては、人物の描かれ方の大きさが、畫面内における重要度、或は尊卑を決定するというのが鐵則である。従つてもし墓主人が描かれているとすれば、右下隅の貴人が墓主人の筈で、壇上の貴人をどうしても墓主人としなければならぬ積極的理由はないと思われる。

それはさておき、このように西壁帛畫が遺策に記された從卒の俑を圖様化し、しかもそれが大量に隊列を組んで描かれているとなると、これは文字通り一種の兵馬俑を表わしたものと考えられる。ところが、これまで長沙の地方では、こうした大量の兵馬俑を遺策に記載して、副葬することは、曾てなかった現象で、やはり始皇陵、並びにその影響を受けて關中の大型陵墓で流行した兵馬俑坑の影響と考えられよう。その元祖の始皇陵兵馬俑坑の兵馬俑も、歩兵、車兵、騎兵がそれぞれ整然と隊列

を組んで並べられていた。ただ違ふのは、こちらは明らかに觀閲の儀式を行なっていることであるが、始皇陵の兵馬俑は、閱兵する者がおらず儀式ではなかったけれども、その並び方が近衛兵として儀式に参加する時と似ていることは、「史記」叔孫通傳に載せる長樂宮での朝儀の有様と比較して述べた通りである。従つてこれを形式ではなく機能面において考える時、閱兵する者がいてもいなくても大して變りはなく、ともにその目的は、一種のデモンストレーションとして武力もしくは兵力を誇示することにあつたと思われる。すると馬王堆三號墓西壁帛畫の兵馬俑の場合も、何かの防衛ということが考えられるが、やはり始皇陵の場合と同じく、墓もしくは墓主人の防衛であろう。そして先に西壁帛畫の解釋において、壇上の貴人を墓主人とする通説に疑問を呈し、敢て右下隅の貴人こそ墓主人ではないかとした理由もここにある。というのは墓主人というのは、始皇陵、楊家灣漢墓の場合もそうであつたように、守られるべき存在として、兵馬俑の軍隊の背後にいろのがふさわしいが、右下隅の貴人も、兵士達の向く方向とは反對に車騎のすぐ後ろに配されて、全くその位置を得ているからである。そのうえこの貴人は、上述の如く侍者三人に圍まれ、左側の閱兵の緊張した光景とは全く裏腹に、平常のくつろいだ雰囲気と表わされていたが、これも兵士達によつて守られた存在としては當然である。始皇陵や楊家灣漢墓の場合も、墓の前面で緊張した面持で防衛する兵士達に對して、墓主人は「宮觀」（「史記」賈山傳）や邸宅を象つた墓室内でくつろいでいた筈である。だからこそ始皇陵墳丘西側において、戰車ではなく臥息用の安車が置いてあつたのである。従つて西壁帛畫の右下隅の貴人は、これまで壇上の貴人を墓主人と解釋してきた手前、故意に無視されてきた形跡があるけれども、これこそ墓の主人公である。これに對して左上の壇上の貴人は、墓主人を守る側に屬して、兵士達に指令を下す指揮者とみなすのが妥當であろう。

しかし、ここで問題が生ずる。それは、馬王堆三號墓西壁帛畫において、墓主人の靈魂は一體どこの世界にいるのかということである。西壁帛畫が始皇陵兵馬俑の考えを受繼いでいるにしても、馬王堆三號墓が始皇陵や楊家灣漢墓と決定的に異なるのは、墓葬形制上、前者が依然として堅穴木槨式を採用していることである。そしてこの堅穴木槨式は、構造的に墓室空間が狭くならざるを得ず、これまでの儒家的な靈魂觀、即ち精神的な魂は天に昇り、肉體的な魂は地に歸す⁽³³⁾という考え方に見合う

ものであった。つまり墓室は魄のすみかであって、靈魂のすみかではないのである。また事實、馬王堆三號墓からは一號墓とともにT字型帛畫を出土したが、このT字型帛畫の内容は、別に考察した如く、死後、墓主人の靈魂は龍舟に乗って天へと昇って行くことであつた。但しその靈魂の行き着く先が、從來考えられたように天帝のすむ天上世界ではなく、大地の中央に位置し、天上世界と地上世界の中間に屬する不死の聖域、崑崙山であるという點が違つていた。するとこれらの堅穴木槨の基本理念やT字型帛畫の語る所に從えば、墓主人の靈魂は、地下の墓室内に住むのではなく崑崙山へと昇仙することになり、西壁帛畫に描かれた内容も、地下の光景ではなく崑崙山における光景ということになる。實際、一九七六年、山東臨沂金雀山九號墓から出土した前漢中期の帛畫は、既に崑崙山へ昇仙した墓主人（女性）が、その宮殿において、たくさん男女の侍者にかしずかれ、歌舞や遊戲をみながら生活する光景が描かれていた。果して本當に西壁帛畫も、不死のパラダイスである崑崙山の光景を描いたものであろうか。もしそうだとすれば、同じく兵馬俑を表わしながら、地下の世界を象つた始皇陵の兵馬俑坑とは全く違つたものにならう。

そこで注目しなければならぬのは、馬王堆三號墓から出土した一枚の木牘である。それには次のように書かれていた。⁽²⁷⁾

十二年二月乙巳朔戊辰、家丞奮移主贊（藏）郎中、移贊（藏）物一編、書到先選具奏主贊（藏）君。

この冒頭の顛項曆に則つた紀年によつて、文帝十二年（前一六八）という三號墓の埋葬の絶對年代が知れたのである。内容は、これを讀む限りでは必ずしも明瞭でないが、埋葬の時、家丞の奮なる者が、地下世界の官吏である主藏郎中に告げた一種の申告書であると思われる。しかしこれについては、一九七五年、湖北江陵鳳凰山一六八號漢墓から出土した竹牘⁽²⁸⁾を參考にすることによつて、一層はつきりしよう。即ち長さ二三・二cm、幅四・一—四・四cmの竹牘の表には、⁽²⁹⁾

十三年五月庚辰、江陵丞敢告地下丞、市陽五夫＝（大夫）二字の合文）嬖少言與大奴良等廿八人、大婢益等十八人、輜車二乘、牛車一兩（輶）、駟馬四匹、駟馬二匹、騎馬四匹、可令吏以從事、敢告主

と四行に分けて書かれていた。冒頭の紀年は、文帝十三年（前一六七）のことで、馬王堆三號墓造營の翌年に當たる。内容は、

これまで幾人かの研究者によって釋讀されてきたように、江陵縣の丞(次官)が、地下の世界を管理する役所の「丞」に對し、これから地下に赴こうとする市陽里の五大夫である嬖(遂)の申し出によって申告する旨を公文書の形式で記し、嬖(遂)が大奴二八人、大婢十八人とともに、軺車二乘などを副葬品として持って行くから、地下の支配者である「主」に告げよというのである。地下の世界が地上の世界を模倣して作られ、地下丞や地下主といった官吏がいるというのも興味深いが見落してならないのは、ここに記載された大奴以下の項目と數量が、同出の竹簡遺策に記された内容⁽²⁰⁾、即ち「凡車三乘、馬十匹、人冊六、船一艘」という記載と合致することである。例えば遺策の「人冊六」は竹牘の「大奴廿八」と「大婢十八」を合わせた數量で、實際に木簡四十六體が出土している。つまり、これによって、遺策とは副葬品の目録であるとともに、地下の官吏に對する申告書でもあったことがわかる。これは、杉本憲司氏も指摘するように、一九七三年、江陵鳳凰山十號漢墓から出土した木牘⁽²¹⁾(六號)が、兩面にわたり遺策として副葬品の名稱と數量を記し、その最後に「(景帝)四年後九月辛亥、平里五夫=「大夫」二字の合文)偃(張)偃國告地下主、偃衣器物所以蔡(祭)具器物、各令會以律令從事」と、例の地下の主に對する申告文が書かれていたことによっても明らかである。馬王堆三號墓の木牘も、これらと同じく地下の官吏に對する申告書で、その「主藏郎中」と「主藏君」は、それぞれ江陵鳳凰山一六八號墓竹牘の「地下丞」と「(地下)主」に該當し、墓主人が遺策に記した「藏物」とともに地下の世界に行くから、「主藏郎中」より「主藏君」に轉奏してくれというのである。

いずれにしても、このような木牘が馬王堆三號墓から出土したことは重要である。これをその通りにとって敷衍すれば、墓の主人公は地下の世界に下りて行き、そこで副葬品の食料や衣服を使って、また吏、卒、從、美人等の侍者とともに生活を送るということになる。そして西壁帛畫は、そこに登場する兵士達が遺策に記された從卒達に他ならなかったことからわかるように、地下の世界における光景を描いたもので、右下隅の墓主人は、地下で兵士達に守られて生活している様子が描かれたことになる。これはいうまでもなく明らかにT字型帛畫の崑崙昇仙の内容と矛盾する。しかしT字型帛畫と西壁帛畫の兩者を整合的に解釋し、後者を昇仙した後の崑崙山での光景だとしても、不合理が生じる。というのは崑崙山において、死者の靈魂が

かくも大勢の兵士達によって守られるということは、崑崙山が不死の聖域という一種のパラダイスであり、かつ陸吾などの神々によって守護されている以上、⁽²³⁾あり得ないことだからである。一方、長沙の地方において昇仙圖が、馬王堆漢墓以後みられないことも、一考の必要がある。昇仙圖は、現在判明している限りでは、長沙陳家大山楚墓出土の帛畫⁽²⁴⁾（所謂晚周帛畫）を最古の例として、少なくとも戦國中期の頃から長沙の地方で作られ続けてきたが、その最盛期は、最も簡潔な構圖を示す長沙子彈庫楚墓出土帛畫⁽²⁵⁾の制作された戦國晩期頃にみられ、馬王堆漢墓のT字型帛畫に至ると、形こそ大型になったけれども、昇仙圖としては、天上、地上、地下の世界を背景に展開するなど、餘分なものが加わり過ぎ、明らかに末期的現象がみられる。これはとりもなおさず戰國的な崑崙山に對する信仰が下火になったことを物語り、代って新たに勢力を伸ばしてきたのが、地下に對する信仰であり、その具體的な形が、上述の簡牘にみられた地下の主に對する申告書であつた。故に馬王堆三號漢墓のT字型帛畫と西壁帛畫にみられた矛盾は、そのまま矛盾として受け止める以外になく、傳統的な崑崙山信仰から新興の地下信仰への移行期における一種の過渡的現象とみなされよう。T字型帛畫が内棺の表面に廣げて置かれ、西壁帛畫が棺室の壁に掛けられたというのも、兩者の素姓の違いを表わしていよう。

それはともかく、このように南の地方においても舊來の信仰にかわつて、死者の靈魂のすみかとしての地下に對する信仰が盛んになった背景には、やはり始皇陵の影響が考えられよう。確かに地下の世界、並びに「主藏郎中」「主藏君」、或は「地下丞」「地下主」といった地下世界の官吏を明記した簡牘類は、今までの所、華北における前漢の墓からの出土例がないので、南の地方獨自の發想として考える必要がある。また、如何に魂が天上や崑崙山に昇るという考えを吹き込まれようと、遺體が實際に埋葬される地下への追慕ないし信仰は、人情の常として極く自然發生的に起り得ることである。しかし、墓側に寢をたて祭祀を行なう陵寢制度を大々的に採用して、地下を靈魂のすみかとする考えをはっきり打ち出したのは、始皇陵が最初であり、その影響が徐々に地方まで浸透し、土着の考えと融合して生まれたのが、前漢初期の長沙、江陵を中心とする南方地域の墓葬形制ではなかったかと考えられる。そしてそれを最も典型的に示すのが、堅穴木槨墓の棺室の壁に掛けられ、簡牘の申告

書に記載する兵馬俑によって守られた墓主人を描いた馬王堆三號墓の西壁帛畫であつたと考えられる。こうした一種の融合折衷の性格は辟邪の面についてもみられ、兵馬俑を描いた帛畫を吊すことによって、始皇陵と同じく、これまで傳統的行なわれてきた鎮墓獸を墓内に埋葬することはなくなったが、全くなくなったわけではなく、辟邪の用をなす桃の枝で作つた小俑⁽²³⁾を中棺と内棺の隙間に入れたり、北側の斜坡墓道に一對の「偶人」を置いたりしてゐたのである。⁽²⁴⁾

おわりに

「史記」秦始皇本紀によると、秦の始皇帝は、始皇二六年（前二三二）、六國を併合し天下を統一した後、自らの功績にふさわしい稱號を丞相の王綰、御史大夫の馮劫、廷尉の李斯等に下問した。これに對して王綰等は、陛下の業績は昔の天子である五帝も及ばないとして、古の天皇、地皇、泰皇という神靈の名を擧げ、そのうち最も貴い泰皇を尊號として答申したが、始皇帝は自ら判斷を下して、

泰を去り、皇を著け、上古の帝位の號を采り、號して皇帝と曰わん

と述べ、皇帝の號が決定されたという。ここで帝とは天帝（上帝）のことで、皇帝とは「煌煌たる上帝」を意味している。⁽²⁵⁾つまり自らを天上世界にあつて宇宙の萬物を主宰する天帝と同一化したもので、従つてこれまでの子として天帝に從屬する天子とは、自ずから次元の違うものであつた。

また秦始皇本紀によれば、⁽²⁶⁾天下統一の翌年、始皇帝は信宮を渭水の南岸に造營したが、名を極廟と改め、天極に象つたといふ。天極は中宮ともいい、天の中心を占める北極星周邊にあつて、天帝の居住する所である。次いで始皇三五年（前二三二）には、⁽²⁷⁾百官の朝會する朝宮を渭水の南の上林苑中に營もうとし、まず前殿の阿房宮を造つたが、宮殿から直接南山に至る關道を作り、南山の頂きを宮闕とした。また北は、阿房宮から渭水を渡つて咸陽に續く二層の復道を作り、天極星から關道（星）

が天の川を横切って營と室の二星に至る形に象ったという。これらは、始皇帝が自らを天帝と同一化したことの結果として、自らの住む宮室並びに周邊も、天帝の住む宮室並びに天極星周邊になぞらえて造營したことを示している。ただ皇帝を稱しただけでないことが知れよう。

一方、始皇帝は、「史記」封禪書によると、天下統一後、五回の地方巡幸を行なったが、東の海濱に至ると、蓬萊、方丈、瀛洲の三神山が勃海中にあるという所謂東海の三神山を説く者が數え切れぬ程おり、そこに行けば僊人が住み不死の薬が得られると説いた。そこで始皇帝もこれを信じて人をやって探させ、特に齊の方士徐市を遣わした際は、童男童女數千人を連れて探しに行かせ巨萬の富を費やしたけれども、終に不死の薬は得られなかったという。この東海の三神山の説は、元來、燕から齊にかけての仙道方術を修めた方士達が唱えたもので、戰國の齊の威王、宣王、燕の昭王、そして後の漢の武帝も信じて探したという。しかし最も熱心であったのが始皇帝であり、不死に對する異常な程の執念を物語っている。

それは恐らく泰山封禪の場合も同様であったと思われる。再び秦始皇本紀によると、始皇帝は、始皇二八年（前二一九）の第三回地方巡幸の途次、嶧山に登り刻石して秦の德を頌した後、泰山において封禪の儀式を行なった。但し封と禪の儀式は別々のもので、泰山に登って石を立て、封の儀式を行なって祠祀してから、麓の梁父で禪の儀式を行なったという。また漢代の考え方が若干混入しているとみられる封禪書によると、この時、齊魯の儒生、博士等七十人を召し従え、彼等に封禪の方法を尋ねたが、各人各様、實施困難なことをいうので斥け、またこの時のことは、封藏して祕されたので何も記録されていないという。次に封禪を行なった漢の武帝の場合も、これと事情がよく似ており、封禪について儒者や方士がまちまちのことをいうので、独自の考えで斷行し、泰山上での封の儀式は、侍中奉車の子侯一人だけを伴って行ない、やはり極祕にしたという。

では、この封禪の目的とは一體何であつたろうか。後漢の光武帝以後の場合は、一般に受命の帝王が功業を成就した後、これを天に報告することが目的であつたが、少なくとも始皇帝と武帝の場合に關する限り、栗原朋信が指摘したように、不死や延年長壽を祈ることが目的であつたようだ。始皇帝の場合、確かに刻石を立て公的な儀式を行なっているけれども、その泰山

刻石は天下の主宰者である皇帝の徳を頌するだけで、上天に言及した句が一言もみえないばかりか、儒生や博士の與り知らない祕密の封事を行ない、武帝の場合も、主従二人だけの祕密の封事を行なっている。また封禪書によれば、武帝を封禪に踏み切らせたのは、泰山に登って封禪すれば、仙人になって天に登ることが出来るという神人申公の説や、封禪は不死の名であるとする方士丁公の説であった。従って彼等にとって封禪とは、東海の三神山に不死の藥を求めたのと何等變りなく、一種の山嶽信仰として泰山の山神に祈ったり、黄帝が泰山で會したという神に通じたりして、延命不死を祈ることが本意であったといえよう。そして特に始皇帝の場合は、栗原朋信が指摘した如く、始皇帝の死後、公子胡亥を二世皇帝に立てんと、側近の趙高が李斯等と謀って偽作し、長子扶蘇と將軍蒙恬に死を賜わった詔の中に、

朕 天下を巡り、名山の諸神を禱祠し、以つて壽命を延ばさんとす

とある通り、泰山も「名山」の一つとして、泰山の山神に延年を祈ったものとみられよう。但しその延命の祈りが、人間としての個人の祈りであるか、天帝としての自覺に基づいた皇帝の祈りであるかが重要な問題となるが、上引の偽詔に主語が「朕」と明記されているように、皇帝の祈りであったといえよう。つまり上天の天帝が不死の存在であるのと同じく、皇帝自らも不死たらんと祈ったと考えられるのである。

以上、「史記」に基づいて、始皇帝に特徴的な事蹟を、彼自身の皇帝觀と不死の追求という兩面からみてきたが、本稿の問題としてきた秦始皇陵の構想も、これらの考えと決して無縁ではあるまい。まず不死の追求ということからいえば、始皇陵が地下に廣大な空間を擁し、地上の現實をそのまま地下に持込んで、地上の世界の延長上に死後の世界を形作っていたことは、その顯著な現われである。始皇陵の東側で發見された三つの巨大な兵馬俑坑は、それをまざまざとみせつけるもので、現實に咸陽城並びにその宮殿を守備した近衛兵を陶俑の形で寫し取り、それを陵の地下の前面に配して、自らの靈魂の住む世界の守りとしていたのである。しかもその陶俑は等身大という稀に見る大きさを有するだけでなく、實戰用武器を攜帶し、總勢七千

人以上から成る當時の近衛兵を一人一人モデルに、極めて寫實的に正確に作られていた。即ち一號坑は衛尉配下の衛士令の率いる宮城警備の兵士、二號坑は郎中令配下の郎中車、戸、騎三將の率いる宮殿警護の兵士、三號坑は衛尉配下の旅賁令の率いる儀仗擔當の兵士達であった。またその配置の仕方、當時の近衛兵の軍陣をモデルに、軍隊としての階級、兵種、指揮系統も十分に考慮し、整然と秩序立った大軍陣を形成していた。但し、一、二號坑が衛士、郎中の軍隊の屋外に整列した光景であるのに對して、三號坑は小人數の旅賁の部隊が廬という詰所内に待機する光景が表わされていた。いずれにしても、これはまさに當時の秦の近衛兵の地下における再現といつてよからう。墳丘の西側で發見された銅車馬坑、珍禽異獸坑、馬廐坑も、大なり小なりこれと似たもので、特に銅車馬は、二分の一の縮尺とはいえ、皇帝の乘輿する安車と立車の二輛が、四頭立ての馬、奉車郎中の御者ともども、青銅で細部にわたり精巧に作られていた。言うまでもなく、始皇帝の靈魂が生前と同様、死後の世界において乗る車である。これらはあくまで陪葬坑であり、墳丘の下部の本體に當たる地下宮殿については、まだ本格的な解明は進んでいないが、これらの陪葬坑をみただけでも、始皇陵全體の構想、つまり咸陽の宮廷を中心とした世界の地下における再現という構想の一端が知れるのである。従つて始皇帝が地下に築いた死後の世界は、現實世界を濃厚に反映して、寧ろその延長線上にあるといつても過言でなく、そしてまさにこの現實世界との連續性においてこそ、始皇帝の不死に對する追求が看取されるのである。

また、始皇帝自身の皇帝觀についていえば、始皇陵において創始された陵寢制度は、それを墓葬形式の面において反映したものとえよう。陵寢制度は、單に陵墓の旁らに寢を築いて墓祭し、死者に飲食を供するというだけではなく、そのためには死者の靈魂が墓室内に留まることを前提とするから、靈魂の住むに足る墓室空間を築くことを不可缺の條件とする。事實、始皇陵においては、墳丘の西側の建築遺跡で、死者に飲食を供する官である「飢官」と書かれた陶壺の蓋が見附かり、寢の存在が裏附けられたが、それと同時に、巨大な地下宮殿の存在が墳丘の下ボーリング調査によって確認され、更に周圍では兵馬俑坑、銅車馬坑、珍禽異獸坑などの陪葬坑が發掘されて、地下に廣大な墓室空間が築かれていることがわかった。またこの廣

い墓室空間を築くための方法として、これまで狭い空間しか築き得なかった竪穴木槨式に代わって、新しく横穴式が大々的に採用されていることもわかった。

しかるに、始皇帝がこのように陵寢制度の採用によって、死者の靈魂が墓室内に留まるという考えをはっきりと打出したことは、従来の死生觀ないし靈魂觀、それは必ずしも明確ではないけれども、少なくとも「禮記」郊特牲などにみられる儒家的な死生觀、即ち死者の精神的魂は天に昇り、肉體的魄は地に歸すという考え方からすれば、極めて革新的であつた。だが革新的とはいっても、もとを糺せば、始皇帝自身の皇帝觀に由來するものであつた。何故ならば、始皇帝が皇帝を稱し自己を天帝と同一化したことは、とりもおさず、天上世界に住む宇宙の主宰者としての天帝の絶對性、優位性を否定することであり、そうなれば、もはや靈魂が天に昇る必要もなくなるからである。始皇帝が上天の天帝を無視したことは、他にも上述の泰山刻石を始め琅邪臺刻石、之罘刻石などに、天帝の權威について觸れる箇所がなかったことにも窺えるが、當時にあっては、もとより天帝の存在は絶對的であつた。例えば南の地方の崑崙山信仰において、死者の靈魂の行き着く先が天帝の住む天ではなく、天上と地上の中間世界である崑崙山が選ばれたのも、天帝の犯すべからざる絶對性の故であつたと思われ⁽⁴⁰⁾る。それはともかく、その天帝の絶對性を否定し、地上の君主として自ら天帝となつたからには、死後の魂の安住の地を天以外の場所に求めなければならず、そこで選ばれたのが、天上とは對極の地下の世界であつた。そして先にみたように、その死後の世界が地上の現實世界の延長として作られ、不死が追求されたのも、始皇帝の皇帝觀の反映であつたといえる。絶對者である皇帝を稱した以上、不死であらねばならなかつたからである。すると、先に皇帝觀を反映して、始皇帝自身の住む宮室並びに周邊が、天上の中宮並びに天極周邊に象つて造營されたのをみたが、それは死後の世界である始皇陵においても徹底していたのである。

始皇陵の一部である兵馬俑坑がそのことを窺う最もよい例であろう。兵馬俑坑が何故設けられたのかといえは、もしこれまでのように、死者の魂が天上に昇るのであれば、その靈魂は天帝及び配下の神々によって護られるから、わざわざ兵馬俑坑を設けて自ら防衛する必要はなかつた筈である。ところが皇帝を稱し靈魂が地下に住むようになると、地下にはまだそのような

組織がなかったうえに、自身が宇宙の主宰者であるが故に、兵馬俑坑を設けて自ら防衛せざるを得なかったのである。またその兵馬俑が、何故一般の軍隊ではなく、近衛兵であったかといえは、皇帝自らが住まう極廟（咸陽城）を守る軍隊としては、無論近衛兵が唯一であり、皇帝（天帝）直屬（或は側近）の唯一の軍隊であったからであろう。そして皇帝が不死不滅であれば、皇帝の軍隊も不死不滅の筈であるから、實際に咸陽城を守った近衛兵をそのまま地下に持込んで、あのように陶俑によってそっくり再現したのである。實際の近衛兵を一人一人モデルとして、當時としては驚異的な程寫實的に表現したり、實際の人数通り七千體以上も作って軍隊を編成したり、如何に稀代の権力者とはいえ、これ程手の込んだことをしてまで、執拗に近衛兵の再現にこだわったわけは、勿論自らが不死であることを示すためであったが、それと同時に、やはり近衛兵が皇帝直屬の唯一の軍隊として特殊であったからであろう。他の銅車馬坑、珍禽異獸坑、馬廐坑などは、死後の生活を營むために必要なものとして、例えば河北平山中山王冢墓の車馬坑や雜殉坑などのように、規模こそ違え、これまでも同種のものがなかったわけではないが、兵馬俑坑だけはこれらと性格を異にして、始皇帝が皇帝を稱し靈魂が地下に住むようになった結果、初めて生まれたものであり、全く前例のないものであった。要するに始皇帝は、豪勢な地下宮殿といい、巨大な兵馬俑坑といい、初めて皇帝を稱した始皇帝にふさわしい、まさに言葉の全き意味での「皇帝の陵」であったといえよう。

従って、その後、始皇帝の影響を強く受けて、咸陽楊家灣漢墓にみられたような、横穴式によって地下に邸宅風の墓室空間を築き、正面に二千五百體餘りの小型兵馬俑を配した大墓が、關中を中心に數多く作られたと思われるが、それは皇帝の陵でない以上、兵馬俑が不特定の軍隊である點など、嚴密に言えば始皇帝とは全然違ふのである。またそれがよしんば前漢の皇帝の陵であったにしても、違ふであろう。前漢の陵の實體は明らかでないが、文獻に徵する限り、「漢書」韋玄成傳が記すように、始皇帝の陵寢制度は踏襲されたものと考えられる。實際、文帝の母に當たる薄太后や後の竇后を葬った南陵や竇陵をみると、被葬者が女性であるが故に侍女俑であったが、陵の前面に従葬坑を設けて陶俑を配した點は、始皇帝の兵馬俑坑と類似していた。しがしこのように始皇帝の墓葬形制を受け繼いだにしても、前漢の皇帝はもはや始皇帝の如き皇帝ではなく、實質的には寧ろ天

子であった。それは既に高祖において、高祖十二年（前一九五）の詔に、「吾立ちて天子となり、天下を帝有すること、今に十二年なり」とある通りであるが、特に儒教が國教化された武帝以後になると、皇帝の觀念が儒教の天子の觀念の中に包み込まれてしまう。つまり皇帝が天の子として天帝に従屬する形になるのであるが、これは自ずから陵の墓葬形制にも反映した筈である。しかし、いづれにしても、始皇陵の陵寢制度とともに始まった、地下を死者の靈魂のすみかとする考えが、その後の墓葬形制において主流を占めたことには變りはなく、華北では、崖墓、黃腸題湊墓^(m)、空心磚墓、磚室墓、更には墓室内部を繪畫によって裝飾した壁畫墓、畫像石墓、畫像磚墓など、所謂橫穴式洞穴墓が、厚葬の風も手傳つて盛んに築かれた^(m)。またその餘波は南の地方に及んで、長沙馬王堆三號漢墓のように、多量の俑をいれるには餘りに狭い堅穴木槨式の制約を克服して、棺室内に兵馬俑を描いた帛畫をかける風習まで生んだのである。陳家大山楚墓出土帛畫以來の昇仙圖にみられたように、死者の靈魂の行き着く先としての崑崙山に對する信仰の盛んであった長沙の地方でも、次第に地下の世界に對する信仰が伸張しつつあったのである。これらを要するに、中國史上、未曾有の規模を誇った始皇陵は、常に陵墓の象徴的存在として君臨し、その後世への影響も甚大であったといえよう。

以上、始皇陵と兵馬俑について考察を加えてきたが、何分、始皇陵は今なお發掘調査が續行中であるので、今後、どんな新しい事實が出てくるかも知れず、「試論」と題した所以もそこにある。また不備の點も多々あると思われるが、これらについて關係方面の御教示を仰げれば幸いである。

注

- (1) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」(『東方學報』京都五一冊 一九七九。同上『崑崙山への昇仙——古代中國人が描いた死後の世界——』(東京一九八二)。

- (2) 陝西省文物管理委員會(以下陝西文管會と略す)「秦始皇陵調查簡

- 報」(『考古』一九六二年八期)。袁仲一「秦始皇陵兵馬俑」(『秦始皇陵兵馬俑』所收、北京一九八三)。墳丘の高さについて、前者は四三m、後者は七六mというが、前者は實測値とあるので、四三mを採用した。

- (3) 漢書 劉向傳(劉) 向上疏諫曰、(中略) 秦始皇葬於驪山之阿、下

- (4) 銅三泉、上崇山墳、其高五十餘丈、周回五里有餘、(後略)。
一九六二年の調査報告では、内城は外城内の南側半分に偏よるとされたが、一九八三年の袁仲一氏の報告では、このように訂正された。
史記 秦始皇本紀「始皇初即位、穿治鄠山、及并天下、天下徒送詣七十餘萬人」。
- (5) 趙康民「秦始皇陵原名麗山」(『考古與文物』一九八〇年三期)。
- (6) 秦始皇本紀「(十六年)秦置麗邑。同上」(二十七年)焉作信宮渭南、已更命信宮爲極廟、象天極、自極廟道通鄠山、作甘泉前殿。三輔黃圖 卷一 秦宮「閣道通驪山八十餘里」。
- (8) 秦始皇本紀「(三十五年)作宮阿房、故天下謂之阿房宮、隱宮徙刑者七十餘萬人、乃分作阿房宮、或作麗山、發北山石椁、乃爲蜀、荆地材皆至、(中略)因徙三萬家麗邑、五萬家雲陽、皆復不事十歲」。
- (9) 秦始皇本紀「(二十七年)治馳道」。漢書 賈山傳「爲馳道於天下、東窮燕齊、南極吳楚、江湖之上、瀕海之觀畢至、道廣五十步、三丈而樹、厚築其外、隱以金椎、樹以青松」。史念海「秦始皇直道遺迹の探索」(『文物』一九七五年一〇期)。
- (10) 水經注 卷一九 渭水「始皇造陵取土、其地汙深、水積成池、謂之魚池也。無戈『秦始皇陵與兵馬俑』(西安 一九八二)二〇頁。始皇陵秦俑坑考古發掘隊(以下秦俑考古隊と略す)『陝西臨潼魚池遺址調査簡報』(『考古與文物』一九八三年四期)。
- (11) 注(8)参照。陝西文管會「秦始皇陵調查簡報」四〇八、四一九頁。秦俑考古隊「臨潼鄭庄秦石料加工場遺址調査簡報」(『考古與文物』一九八一年一期)。
- (13) 水經注 卷一九 渭水「水出麗山東北、本導源北流、後秦始皇葬于山北、水過而曲行、東注北轉。無戈『秦始皇陵與兵馬俑』一八頁。秦俑考古隊「秦始皇陵西側趙背戶村秦刑徒墓」(『文物』一九八二年三期)。袁仲一 程學華「秦始皇陵西側刑徒墓地出土的瓦文」(『中國考古學會第二次年會論文集 一九八〇』北京 一九八二)。
- (15) 例えは『雲夢秦簡』秦律十八種 司空に「隶臣妾、城旦舂之司寇、居、贖責(債) 殷(繫) 城旦舂者、勿責衣食」とある。睡虎地秦墓竹簡整理小組「睡虎地秦墓竹簡」(北京 一九七八)。雲夢睡虎地秦墓編寫組「雲夢睡虎地秦墓」(北京 一九八二)。なお、この墓の主人公は「雲夢秦簡」の編年記中に喜と書かれた人物で、秦昭王四五年(前二六二)に生まれ、秦の南郡治下で安陸御史、安陸令史、郡令史と、法律關係の職を歴任した。卒年は、編年記が秦始皇三〇年(前二二七)で終り、また墓中の骨が四〇歳から四五歳の男性と鑑定されたことから、この年に死んだものと推測されている。
- (16) 孫英民「秦始皇陵西側趙背戶村秦刑徒墓」質疑」(『文物』一九八二年一〇期)。
- (17) 袁仲一 程學華「秦代中央官署製陶業的陶文」(『考古與文物』一九八〇年三期)。
- (18) 秦始皇本紀「(二世皇帝)二年冬、陳涉所遣周章等將西至戲、兵數十萬、(中略)少府章邯曰、盜已至、衆彊、今發近縣不及矣、鄠山徒多、請赦之、授兵以擊之、二世乃大赦天下、使章邯將、擊破周章軍而走、遂殺章曹陽。これによっても、驪山の刑徒が少府によって掌管されていたことがわかった。
- (19) 漢書 百官公卿表「少府、秦官、掌山海池澤之稅、以給共養、有六丞、屬官有尚書、符節、太醫、太官、湯官、導官、樂府、若盧、考工室、左弋、居室、甘泉居室、左右司空、東織、西織、東園匠十六官令丞、(後略)」。
- (20) 文獻通考 卷二二四 山陵「漢舊儀、(略)三十七歲、銅水泉絕之、塞以文石、致以丹漆、深極不可入、奏之曰、丞相臣斯昧死言、臣所將隸徒七十二萬人治驪山者、已深已極、鑿之不入、燒之不然、叩之空空、如下天狀、制曰、鑿之不入、燒之不然、其旁行三百丈乃止」。
- (21) 秦始皇本紀「(二世皇帝元年)四月、二世還至咸陽曰、(中略)復土鄠山、鄠山事大畢」。
- (22) 秦始皇本紀「穿三泉、下銅而致椁、宮觀百官奇器珍怪臧滿之、令匠作機弩矢、有所穿近者輒射之、以水銀爲百川江河大海、機相灌輸、

上具天文、下具地理、以人魚膏爲燭、度不滅者久之。

- (23) 常勇 李同「秦始皇陵中埋藏物的初步研究」(「考古」一九八三年七期)。土壤中の氣體の中に含まれる水銀蒸氣の量を測定したのである。魚池水庫附近では三〇ppbの平均値を示したが、墳丘部の二〇〇〇m²の範圍内では、二〇五ppbの平均値を示し、最高は一五〇〇ppbにも達したという。また別の報道によると、水銀の分布には一定の規則があり、幾何學的圖案の形を示したという。注(2)参照。

- (24) 史記 高祖本紀「漢王項羽相與臨廣武之閒而語、項羽欲與漢王獨身挑戰、漢王數項羽曰、(略)懷王約入秦無暴掠、項羽燒秦宮室、掘始皇帝冢、私收其財物、罪四、(略)」。

- (25) 漢書 劉向傳「(劉)向上疏諫曰、(略)項籍燔其宮室營宇、往者咸見發掘、其後牧兒亡羊、羊入其鑿、牧者持火照求羊、失火燒其臧擲」。水經注 渭水「項羽入關、發之以三十萬人、三十日運物不能窮、關東盜賊、鎗擲取銅、牧人尋羊燒之、火延九十日、不能滅」。

- (26) 「秦始皇陵考古工作又有重大突破」(「光明日報」一九八五年三月二十九日)。この記事は、秦俑考古隊の袁仲一、程學華兩氏の談話に基づいて書かれ、地宮は長方形をなし、その規模は長さ約四六〇m、幅約四〇〇mで、現在の墳丘の底面積より大きいという。

- (27) 秦俑考古隊「臨潼縣秦俑坑試掘第一號簡報」(以下一號坑簡報と略す)「(文物)一九七五年二期」。袁仲一「秦始皇陵兵馬俑」。

- (28) 秦俑考古隊「秦始皇陵東側第二號兵馬俑坑續探試掘簡報」(以下二號坑簡報と略す)「(文物)一九七八年五期」。

- (29) 秦俑考古隊「秦始皇陵東側第三號兵馬俑坑清理簡報」(以下三號坑簡報と略す)「(文物)一九七九年二期」。

- (30) 同右、一二頁。袁仲一「秦始皇陵東側第二、三號俑坑軍陣內容試探」(「中國考古學會第一次年會論文集 一九七九」(北京 一九八〇))。

- (31) 陝西省考古研究所「陝西興平縣出土的古代嵌金銅犀尊」(「文物」一九六五年七期)。

(32) 南京博物院「江蘇漣水三里墩西漢墓」(「考古」一九七三年二期) 圖

版一一 1. この墓は、五銖錢、陶器など前漢の文物を出土しているが、犧尊など金銀象嵌銅器の一部は、戰國期と考えられている。

- (34) 陶馬の寸法は、最初「一號坑簡報」によって、通高一・五m、體長二mと發表されたが、その後の展覽會圖録などに基き訂正する。

- (35) 近年、武帝時代の汗血馬を思わせる見事な鎏金銅馬(高さ六二cm)が出土した。咸陽地區文管會 茂陵博物館「陝西茂陵一號無名冢一號從葬坑的發掘」(「文物」一九八二年九期) 圖版一。

- (36) 秦俑考古隊「秦始皇兵馬俑坑出土的陶俑陶馬制作工藝」(「考古與文物」一九八〇年三期)。屈鴻鈞 程朱海 吳孝傑「秦俑陶塑制作工藝的探討」(「中國古陶瓷論文集」所收、北京 一九八二)。

- (37) 屈鴻鈞等「秦俑陶塑制作工藝的探討」二四三頁。

- (38) 佐藤雅彦「臨潼兵馬俑の位置づけ」(「大和文華」七〇號) 一四—一五頁。

- (39) 屈鴻鈞等「秦俑陶塑制作工藝的探討」二四四頁。王學理「秦侍衛甲俑的服飾與繪彩」(「考古與文物」一九八一年三期)。

- (40) 武將俑は、これまで一般に將軍俑と呼ばれてきたが、秦漢の將軍は金印を攜え紫綬を帯びるなど位が高く、この俑にふさわしくないの

で、便宜的に武將の呼稱を用いた。陳孟東「秦陵兵馬俑等級試解」(「文博」一九八四年一期)六一—六三頁。なお、青海大通縣上孫家寨出土の漢簡に従えば、將軍は四〇〇〇人の軍を率いることになっている。李零「青海大通縣上孫家寨漢簡性質小議」(「考古」一九八三年六期)五五一頁。また軍吏俑という呼稱も、嚴密にいえば問題があるが、これは従来の呼稱に従うことにした。また長襦武士は、これまで戰袍武士と呼ばれたが、着ている綿入れ状のものは、袍とするには短か過ぎるので、長襦と考え、長襦武士とした。說文解字「襦、短衣也、从衣需聲、一曰繡衣」。段玉裁注「顏注急就篇曰。短衣曰襦、自膝以上、按、襦若今襖之短者、袍若今襖之長者」。林巳奈夫「春秋戰國時代の金人と玉人」(「戰國時代出土文物の研究」所收、京都 一九八五) 一三八頁 注9。

- (41) この他、二種類の鎧が區別されるが、それぞれ一體ずつ着用し数が少ないので省略した。秦俑考古隊「一號坑簡報」圖一七。秦俑考古隊 秦始皇兵馬俑博物館「秦始皇陵兵馬俑」(北京 一九八三) 圖六四、一二〇。
- (42) 說文解字「屨、履也」。段玉裁注「晉蔡謨曰、今時所謂履者、自漢以前、皆名屨、(略)按、蔡說極精、易、詩、三禮、春秋傳、孟子皆言屨、不言履、周末諸子、漢人書乃言履、詩、易凡三履、皆言踐也」。雲夢秦簡 法律答問「毋敢履錦履、履錦履之狀可(何)如、律所謂者、以絲織織履、履有文、乃爲錦履、以錦履履不爲、然而行事比焉」。說文解字「屨、革履也、胡人履連屨、謂之絡屨」。
- (43) 林已奈夫氏の教示による。顏師古も「素を履の裏の飾りと解していたようである」。「漢書」外戚傳「孝成班婕妤退處東宮、作賦自傷悼、其辭曰、(略)府視今丹墀、思君兮履素」。顏師古注「素、履下飾也、言視殿上之地、則想君履素之跡也」。
- (44) 雲夢秦簡 封診式 穴盜「爰書 某里士五(伍)乙告曰、自宵賊(賊)乙復(復)結衣一乙房內中、閉其戶、乙獨與妻丙晦臥堂上、今旦起啓戶取衣、人已穴房內、(微)丙中、結衣不得 不智(知)穴盜者可(何)人、人數、毋(無)它亡殿(也)、來告、即令令史某往診、求其盜、令史某爰書、(略)外壤秦素履迹四所、表尺二寸、其前襠素表四寸、其中央稀者五寸、其踵(踵)稠者三寸、其履迹類故履」。
- (45) 秦俑考古隊「二號坑簡報」九一一〇頁。
- (46) 王學理「秦俑兵器獨論」(「考古與文物」一九八三年四期)。
- (47) 秦鳴「秦俑坑兵馬俑軍陣內容及兵器試探」(「文物」一九七五年二期) 二一頁。吳鈞は一號坑でのみ二件発見された。
- (48) 劉占成「秦俑坑出土的銅鈸」(「文物」一九八二年三期)。
- (49) 標槍は一號坑で二件、三號坑で一件発見されている。秦俑考古隊「三號坑簡報」八頁、圖版二 3 (4)。
- (50) 雲夢秦簡 工律「公甲兵各以其官名刻久之、其不可刻久者、以丹若紫書之」。
- (51) (52) (53) この武器は當初戈として發表されたが、矛との連合器であることがわかり、戟と訂正された。兵馬俑坑出土の他の戈も、戟の一部分である可能性がある。袁仲一「秦中央督造的兵器刻辭綜述」(「考古與文物」一九八四年五期) 一〇四頁。なおこの銅戟は、矛にも「寺工」という銘がみられる。
- (54) 劉占成「秦俑坑出土的銅鈸」圖一四。
- (55) 李學勤「戰國時代的秦國銅器」(「文物參考資料」一九五三年八期)。
- (56) 袁仲一「秦中央督造的兵器刻辭綜述」一〇六頁。黃盛璋「寺工新考」(「考古」一九八三年九期) 八三三頁。
- (57) 北京大學歷史系考古教研室商周組「商周考古」(北京 一九七九) 八四一五頁、圖六二。
- (58) 山東省博物館「臨淄郎家庄一號東周殉人墓」(「考古學報」一九七七年一期) 九〇頁、圖版一八。
- (59) 山西省文物管理委員會「山西長治市分水嶺古墓的清理」(「考古學報」一九五七年一期) 一一六頁、圖版二 1 2。
- (60) 呼林貴「秦俑藝術的流派及淵源」(「文博」一九八五年一期) 三二頁。
- (61) 河南省文化局文物工作隊「河南信陽楚墓出土文物圖錄」(鄭州 一九五九) 圖一〇三、一〇四。「世界美術大系 中國美術(1)」(東京 一九六三) 三九頁 圖二〇。
- (62) 湖南省文物管理委員會「長沙仰天湖第二五號木槨墓」(「考古學報」一九五七年二期) 九一九二頁、圖版一 1 2。
- (63) 北京大學歷史系考古教研室商周組「商周考古」一〇七一〇九頁。殷代のその他の殉葬墓については、黃展岳「殷商墓葬中人殉人性的再考察」(「考古」一九八三年一〇期) 九四三—七頁参照。
- (64) 隨縣擂鼓墩一號墓考古發掘隊「湖北隨縣曾侯乙墓發掘簡報」(「文物」一九七九年七期) 三三四頁。戰國のその他の殉葬墓(洛陽燒溝、汲縣山彪鎮、輝縣固圍村、邯鄲百家村、侯馬喬村、懷來北辛堡など)については、黃展岳「我國古代的人殉和人牲」(「考古」一九七四年

(三期)一六二頁参照。なお、隨縣は近年隨州市と改められた。

- (65) 史記 秦本紀「三十九年、繆公卒、葬雍、從死者百七十七人、秦之良臣子與氏三人、名曰奄息、仲行、鍼虎、亦在從死之中、秦人哀之、爲作歌黃鳥之詩」。

- (66) 吳鎮烽 尙志儒「陝西鳳翔八旗屯秦國墓葬發掘簡報」(「文物資料叢刊」3、一九八〇)六七—六九、七四—七五頁。その他、陝西戶縣宋村の春秋秦墓(三號墓)では四人の奴隸が殉葬されていた。陝西省文管會秦墓發掘組「陝西戶縣宋村春秋秦墓發掘簡報」(「文物」一九七五年一〇期)五六頁。

- (67) 吳鎮烽 尙志儒「陝西鳳翔高庄秦墓地發掘簡報」(「考古與文物」一九八一年一期)一六一—一七、二〇—二二頁。

- (68) 史記 秦本紀「獻公元年、止從死」。

- (69) 禮記 檀弓下「孔子謂爲樹靈者善、謂爲備者不仁、不殆於用人乎哉」。禮記 檀弓上「孔子曰、之死而致死之、不仁而不可爲也、之死而致生之、不知而不可爲也、是故竹不成用、瓦不成味、木不成斲、琴瑟張而不平、竿笙備而不和、有鐘磬而無簫簴、其曰明器、神明之也」。

- (70) 長廊には一列七〇體配されているが、各列の南北兩端の二體は側廊部分の延長と考へ、先鋒から外した。その理由は、各列の最も外側の一體が外を向いて、側廊の延長であることを示しているとともに、先鋒は指揮官の鎧甲俑を第二列の外側から三體目に配して、ここで區切られると考えたからである。

- (71) 「二號坑簡報」(五頁)では、第一列の中央にも鎧甲俑があったというが、最近の陝西秦陵考古隊 中國旅遊出版社「秦始皇陵兵馬俑」(北京 一九八三)所載の二號坑軍陣示意圖(四二—四三頁)では、これが表わされていないので、なかったものとして扱ふ。

- (72) 秦鳴「秦俑坑兵馬俑軍陣內容及兵器試探」二〇頁。

- (73) 陳孟東「秦陵兵馬俑衛級試解」六四頁、圖版四 一(右) 二。この論考によれば、一、二號坑から計六體の將軍俑(武將俑)が出土し、うち一體は修理中という(六二頁)。二號坑からは明らかに二體しか

秦始皇陵と兵馬俑に關する試論

出土していないから、一號坑から四體出土したことになり、その内譯は、T1、T2(以上乘車)、T10出土のものと、修理中の一體で、修理中の一體については、發見場所も何も記していない。

- (75) 陳孟東「秦陵兵馬俑衛級試解」圖版四 一(右) 袁仲一「秦始皇陵兵馬俑」六頁。秦俑考古隊「二號坑簡報」四頁。後二者によつて、この武將俑並びに指揮車が第三過洞から出土したことがわかる。

- (76) 秦俑考古隊「秦始皇陵兵馬俑」圖六二。

- (77) 陳孟東「秦陵兵馬俑衛級試解」六四頁。

- (78) 但し袁仲一氏によれば、左右環廊は立射式戰袍(長襦)俑だけであるが、前後の環廊には長兵を持った鎧甲俑も雜っているという。袁仲一「秦始皇陵東側第二、三號坑軍陣內容試探」三一—六頁。

- (79) 白建鋼氏は、この跪射方式が、楚の射擊名人養由基の「支左拙右」(「戰國策」西周策)の射法に當るといふ。「秦俑歩兵的射擊技術」(「文博」一九八五年二期)六三頁。

- (80) 秦俑考古隊「二號坑簡報」九、一四頁。

- (81) 周禮 春官 車僕「輕車之萃」。鄭玄注「輕車、所用馳敵致師之車也」。雲夢秦簡 秦律雜抄「輕車、近張、引強、中卒所載傳(傳)到軍、縣勿奪」。

- (82) 詩 魯頌「公車千乘、朱英絲滕、二矛重弓、公徒三萬、貝冑朱綬」。

- (83) 秦俑考古隊「二號坑簡報」八頁。

- (84) 湖北省博物館「隨縣曾侯乙墓」(北京 一九八〇)圖八一、八二。

- (85) 湖北省荊州地區博物館「江陵天星觀一號楚墓」(「考古學報」一九八二年一期)八七頁、圖一五 13 14、圖一六 2。

- (86) 林巳奈夫「中國殷周時代の武器」(京都 一九七二)二三七—四〇頁。

- (87) 說文解字「安、以杖殊人也、周禮、安以積竹、八觔、長丈二尺、建於兵車、旅賁以先驅」。

- (88) 詩 衛風 伯兮「伯也執殳、爲王前驅」。

- (89) この爰は、望都一號漢墓壁畫や沂南畫像石墓など、後漢時代の車馬行列を描いた圖では、行列の先拂いの役割を果たす伍佰の持ち物と

して描かれている。林已奈夫「後漢時代の車馬行列」(『東方學報』京都三七冊)一九四頁。

(90) 秦俑考古隊「一號坑簡報」四頁。

(91) 秦俑考古隊「三號坑簡報」一二頁。袁仲一「秦始皇陵東側第二、三號坑軍陣內容試探」。

(92) 袁仲一「秦始皇陵東側第二、三號坑軍陣內容試探」三二二頁。

(93) 秦始皇本紀「盡徵其材士五萬人爲屯衛咸陽、令教射狗馬禽獸」。

(94) 漢書、百官公卿表「中尉、秦官、掌徵循京師、有兩丞、侯、司馬、千人」。また次の論考を参照。濱口重國「前漢の南北軍に就いて」(『池内博士還曆記念東洋史論叢』所收、一九三九)。

(95) 秦俑考古隊「一號坑簡報」四頁、圖四、一〇頁、圖一八。

(96) 楊泓「中國古兵器論叢」(北京一九八〇)八一—八頁。

(97) 續漢書 輿服志「武冠、俗謂之大冠、環纓無釳、以青系爲纓、加雙鵝尾、豎左右、爲鵝冠云、五官、左、右、虎黃、羽林五中郎將、羽林左、右監、皆冠鵝冠、紗縠單衣」。

(98) 百官公卿表 郎中令「期門掌執兵送從、武帝建元三年初置、(中略)平帝元始元年更名虎黃郎、置中郎將、秩比二千石」。

(99) 嚴密にいうと、折曲げて垂らすだけのものと、折曲げてから三角の筒を作り、斜めに起こした板を支えるものと、二種類あった。前者の場合、斜めに起こした形を整えるために、板の中央に一本の芯が通っていた。王學理「秦俑軍服考」(『考古與文物叢刊』第三號 一九八三)一〇—一二頁、圖一、二。

(100) 續漢書 輿服志「長冠、一曰齋冠、高七寸、廣三寸、促漆纓爲之、制如板、以竹爲裏、初高祖微時、以竹皮爲之、謂之劉氏冠、楚冠制也、民謂之鵝尾冠、非也、祀宗廟諸祀則冠之」。

(101) 湖南省博物館 中國科學院考古研究所「長沙馬王堆一號漢墓」(北京一九七三)下集、圖七一、七七。拙稿「崑崙山と昇仙圖」一二六頁。

(102) 林已奈夫「漢代の文物」(京都一九七六)五三—四頁。

(103) 續漢書 輿服志「却非冠、制似長冠、下促、宮殿門吏僕射冠之、負

赤幘、青鵝燕尾、諸僕射幘皆如之」。獨斷 卷下「却非冠、宮門僕射服之、禮無文」。

(104) 秦代に宮城の門の警衛に關係した僕射がいたことは、注(122)所引の秦始皇本紀に「縛衛令、僕射」とあるによつて證せられる。また宮中の警衛を掌る郎官に僕射が加官されることがあったことは、次の記事にみえる。百官公卿表「僕射、秦官、自侍中、尚書、博士、郎皆有、古者重武官、有主射以督課之」。

(105) 秦俑考古隊「二號坑簡報」七八頁。

(106) 袁仲一「秦始皇陵兵馬俑」九頁。袁仲一程學華「秦陵二號銅車馬」(『考古與文物叢刊』一號、一九八三)五〇頁。

(107) 續漢書 輿服志「鵝者勇雉也、其鬬對一死乃止、故趙武靈王以表武士、秦施之焉」。

(108) 注(97)参照。

(109) 北堂書鈔 卷六三 虎賁中郎將「漢官儀云、孝武皇帝初置期門、平帝更名虎賁中郎將、冠挿兩鵝尾」。

(110) 說文解字「鵝、鵝也、从鳥義聲、秦漢之初、侍中冠鵝」。

(111) 史記 佞幸列傳「故孝惠時、郎侍中皆冠鵝、貝帶、傅脂粉、化閭籍之屬也」。索隱「鵝、應劭云、鳥名、毛可以飾冠、(中略)漢官儀云、秦破趙、以其冠賜侍中」。

(112) 侍中は將軍、卿大夫、郎中などに與えられる加官であった。百官公卿表「侍中、左右曹、諸吏、散騎、中常侍、皆加官、所加或列侯、將軍、卿大夫、將、都尉、尚書、太醫、太官令至郎中、亡員、多至數十人、侍中、中常侍得入禁中」。

(113) 淮南子 主術訓「趙武靈王貝帶鵝而朝、趙國化之」。

(114) 注(111)参照。

(115) 注(111)参照。

(116) 袁仲一 程學華「秦陵二號銅車馬」四六—五〇頁。

(117) 秦漢の軍制については、以下の論考に負う所が大きい。嚴耕望「秦漢郎吏制度考」(『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』二三本上冊

一九五一）。濱口重國「兩漢の中央諸軍に就いて」（『東方學報』東京二〇冊二、一九三九）。同上「前漢の南北軍に就いて」。増淵龍夫

(118) 「戰國官僚制の性格」《中國古代の社會と國家》所收、一九六〇。

百官公卿表「郎中令、秦官、掌宮殿掖門戶、有丞、武帝太初元年更名光祿勳、屬官有大夫、郎、謁者、皆秦官、（中略）郎掌守門戶、出充車騎、有議郎、中郎、侍郎、郎中、皆無員、多至千人、議郎、中郎秩比六百石、侍郎比四百石、郎中比三百石、中郎有五官、左、右三將、秩皆比二千石、郎中有車、戶、騎三將、秩皆比千石」。

(119) 史記 刺客列傳「荆軻逐秦王、秦王環柱而走、羣臣皆愕、卒起不意、盡失其度、而秦法、羣臣侍殿上者不得持尺寸之兵、諸郎中執兵皆陳殿下、非有詔召不得上、方急時、不及召下兵、以故荆軻乃逐秦王」。

(120) 百官公卿表「衛尉、秦官、掌宮門衛屯兵、有丞、景帝初更名中大夫令、後元年復爲衛尉、屬官有公車司馬、衛士、旅賁三令丞、衛士三丞」。

(121) 注(94)參照。

(122) 秦始皇本紀「二世乃齋於望夷宮、欲祠遷、沈四白馬、使使責讓高以盜賊事、高懼、乃陰與其婿咸陽令閻樂、其弟趙成謀曰、上不聽諫、今事急、欲歸禍於吾宗、吾欲易置上、更立公子嬰、子嬰仁儉、百姓皆戴其言、使郎中令爲內應、詐爲有大賊、令樂召吏發卒、追劫樂母置高舍、遣樂將吏卒千餘人至望夷宮殿門、縛衛令僕射、曰、賊入此何不止、衛令曰、周廬設卒甚謹、安得賊敢入宮、樂遂斬衛令、直將吏入、行射、郎官者大驚、或走或格、格者輒死、死者數十人、郎中令與樂俱入、射上幄坐幃、二世怒、召左右、左右皆惶懼不聞。但しこの事件は、「史記」李斯列傳では次のように述べられている。

「二世乃出居望夷之宮、留三日、趙高詐詔衛士、令士皆素服持兵內鄉、入告二世曰、山東羣盜兵大至、二世上觀而見之、恐懼、高即因劫令自殺」。

(123) 注(118)參照。

(124) 注(118)參照。

秦始皇陵と兵馬俑に關する試論

(125) 百官公卿表「郎中有車、戶、騎三將」。如淳注「主車曰車郎、主戶衛曰戶郎」。

(126) 史記 高祖功臣侯者年表 周定（郎中騎將）、呂馬童（同上）、楊武（同上）。史記 樊噲傳「遷爲郎中、（略）遷郎中騎將」（略）遷爲將軍。漢書 藝文志「車郎張豐賦三篇」。同上 張釋之傳「以質爲騎郎」。また陳直「漢書新證」（天津 一九七九）によると、歙の孫鮑氏は、「郎中戶將」封泥を藏有していたという。九〇頁。

(127) 注(118)參照。

(128) 漢書補注 卷一六 王嘉條「漢初但有郎中、無中郎」。

(129) 久村因「郎中將と中郎將——漢代郎官の側面について——」（『山本博士還暦記念東洋史論叢』所收、一九七二）三八八—九三頁。久村氏は「史記」「漢書」における中郎と郎中の使用例をくまなく拾い、中郎は武帝以後に多く、漢初ではその存在性が稀薄であるのに對し、郎中は武帝以前に多くみられるとする。また中郎が設置された時期としては、文帝時代が考慮されねばならないとする。

(130) 史記 叔孫通傳「漢七年、長樂宮成、諸侯羣臣皆朝十月、儀、先平明、謁者治禮、引以次入殿門、廷中陳車騎步卒衛官、設兵張旗志、傳言趨、殿下郎中俠陛、陛數百人、功臣列侯諸將軍軍吏以陳西方、東鄉、文官丞相以下陳東方、西鄉」。

(131) 但し、漢代の官僚制度において郎が重要な地位を占め、官吏の登用の際には、まず郎に任ぜられてから郡縣の長官その他の高級官僚に補せられるのが常であったことを考えると、ここで郎が、郎中三將や軍吏はよしとしても、兵卒の役をつとめていることには疑問を懷く向きもある。しかし増淵龍夫氏もいわれる如く、郎とは字義からいえば「郎」であり、宮中の郎に侍して禁衛に當たる近從の臣であった。これは漢代の少なくとも初期にあっても同様で、宮中において天子の近邊の宿衛に當たるのがその職務であった。ところが漢代には、その一方でこの職掌が分化し、百官公卿表に議郎、中郎、侍郎、郎中の別があったように、新たに中郎、侍郎など、郎中より

更に天子に親近して給事する職が現われ、官吏候補者のプールに轉化していくのである。これに對して郎中も、初期には禁衛に當たることを専ら掌っていたが、やがて分化し、結局は期門、羽林の禁衛軍の奪うところとなつたのである。従つて郎が分化する以前の秦に於ては、その職掌は「門戸を守るを掌る」(「百官公卿表」)のが本務であり、ならば郎中の郎に兵卒がいても不思議はないのである。寧ろ漢代の官制をもつて秦代の官制を憶測するの行き過ぎに注意すべきであらう。増淵龍夫「戰國官僚制の性格」一九一—二〇七頁。

(132) 注(127) 參照。

(133) 漢書 武帝紀「建元元年」秋七月、詔曰、衛士轉置送迎二萬人、其省萬人、罷苑馬、以賜貧民。鄭氏注「去故置新、常二萬人」。

(134) 注(120) 參照。

(135) 注(87) 參照。

(136) 周禮 夏官 「旅賁氏掌執戈盾夾王車而趨、左八人、右八人、車止則持輪。同上(敘官)「旅賁氏、中士二人、下士十有六人、史二人、徒八人」。

(137) 周禮 夏官 「虎賁氏掌先後王、而趨以卒五、軍旅會同亦如之、舍則守王閑、王在國則守王宮、國有大故則守王門、大喪亦如之」。同上(敘官)「虎賁氏、下大夫二人、中士十有二人、府二人、史八人、胥八十人、虎士八百人」。

(138) 顏師古注「胡廣云、主宮闕之門內衛士、於周垣下爲區廬、區廬者、若今之伏宿屋矣」。

(139) 班固 西都賦(文選、卷一所收)「周廬千列、微道綺錯」。李善注「漢書音義、張晏曰、直宿曰廬」。

(140) 注(120) 參照。

(141) 史記 項羽本紀「章邯恐、使長史欣請事、至咸陽、留司馬門三日、趙高不見、有不信之心」。史記 張釋之傳「上(文帝)就車、召釋之參乘、徐行問釋之秦之敝、但以質言、至宮、上拜釋之爲公車令」。

(142) 注(130) 參照。

(143) 注(27) 參照。

(144) 徐華芳「中國秦漢魏晉南北朝時代的陵園和塋域」(「考古」一九八一年六期)五二—一頁。劉占成「對秦俑的幾點新認識」(「考古與文物叢刊」三號、一九八三)九八頁。後者によると、東面の五本の墓道は、中門と四つの側門に分かれるという。

(145) 鳳翔雍城の秦公大墓の向きも東西方向であり、東の墓道が正面墓道であるという。韓偉「略論陝西春秋戰國秦墓」(「考古與文物」一九八一年一期)八五頁。

(146) 秦俑考古隊「秦始皇陵二號銅車馬清理簡報」(以下二號銅車馬簡報と略す)「(文物)一九八三年七期」。袁仲一 程學華「秦陵二號銅車馬」(「考古與文物叢刊」一號、一九八三)。

(147) 秦俑考古隊「秦始皇陵二號銅車馬初探」(「文物」一九八三年七期)一七頁。

(148) 孫機「從胸式繫駕法到鞍套式繫駕法——我國古代車制略說」(「考古」一九八〇年五期)。また馬車全般については、林巳奈夫氏の諸論考がある。林巳奈夫「中國先秦時代の馬車」(「東方學報」京都二九冊、一九五九)「周禮考工記の車制」(「東方學報」京都三〇冊、一九五九)「後漢時代の馬車」(「考古學雜誌」四九卷三號、四號、一九六四)。

(149) 林巳奈夫氏によれば、二本の轆をつけた馬車は、戰國時代末ないし秦時代に現われ、前漢後半には一本の轆をつけた馬車に殆んど取って替つたという。「中國先秦時代の馬車」二二—二五頁。

(150) 従来は服馬に二本ずつ、計四本と考えられていた。孫機「始皇陵二號銅車馬對車制研究的新啓示」(「文物」一九八三年七期)二五頁。

(151) 史記 項羽本紀「紀信乘黃屋車、傳左纛、曰、城中食盡、漢王降、楚軍皆呼萬歲」。集解「李斐曰、纛、毛羽幢也、在乘輿車衡左方上注之、蔡邕曰、以蓬牛尾爲之、如斗、或在駢頭、或在衡上上」。

(152) 袁仲一 程學華「秦陵二號銅車馬」三八—九頁。

(153) 獨斷 卷下「法駕、上所乘曰金根車、駕六馬、有五色安車、五色立

車各一、皆駕四馬、是爲五時副車、俗人名之曰五帝車、非也。

(154) 續漢書 輿服志「五時車、安、立亦皆如之、各如方色、馬亦如之。」

(155) 秦始皇本紀「始皇推終始五德之傳、(略)衣服旌旗節旗皆上黑、數以六爲紀、符、法冠皆六寸、而與六尺、六尺爲步、乘六馬、更名河曰德水、以爲水德之始。但し兵馬備の四頭立て戰車など、數は六より四を常數とし、兵馬備の服裝も黑が主體ではない。呼林貴「秦尙水德說質疑」(考古與文物)一九八三年二期。これにはまた反論がある。林劍鳴「秦尙水德無可置疑」(考古與文物)一九八五年二期。

(156) 史記 李斯列傳「置始皇居輜輳車中、百官奏事上食如故、宦者輒從輜輳車中可諸奏事。集解「孟康曰、如衣車、有窗牖、閉之則溫、開之則涼、故名之輜輳車也。」

(157) 漢書 霍光傳「載光尸柩以輜輳車。顏師古注「輜輳本安車也、可以臥息、後因載喪、飾以柳髮、故遂爲喪車耳。」

(158) 袁仲一 程學華「秦陵二號銅車馬」四九頁。

(159) 獨斷 卷下「大駕、則公卿奉引、大將軍參乘、太僕御、屬車八十一乘、備千乘萬騎、在長安時、出祠天於甘泉備之、百官有其儀、注名曰甘泉園簿、(中略)法駕、公卿不在園簿中、唯河南尹、執金吾、洛陽令奉引、侍中參乘、奉車郎御、屬車三十六乘、北郊明堂則省諸副車。桓譚 新論「太平御覽」卷二一五 職官部所引「余年十七爲奉車郎中、衛殿中小苑西門。」

(161) 中國科學院考古研究所安陽工作隊「安陽新發現的殷代車馬坑」(考古)一九七二年四期。同上「安陽殷墟孝民屯兩座車馬坑」(考古)一九七七年一期。

(162) 中國科學院考古研究所「輝縣發掘報告」(北京 一九五六)四六一五二頁。中國歷史博物館「河南省考古新發現展覽簡介」(北京、一九八三)。

(163) 秦俑考古隊「秦始皇陵園陪葬坑續清理簡報」(考古與文物)一九八二年一期。

秦始皇陵と兵馬俑に關する試論

(164) 王學理「漢南陵從葬坑的初步清理——兼談大熊猫頭骨及犀牛骨骼出土的有關問題」(文物)一九八一年一期。

(165) 三輔黃圖 卷四 苑囿「漢上林苑、即秦之舊苑也、漢書云、武帝建元三年開上林苑、(中略)漢舊儀云、上林苑方三百里、苑中養百獸、天子秋冬射獵取之。」

(166) 史記 李斯列傳「於是乃入上林齋戒、日游弋獵、有行人入上林中、二世自射殺之。同上 秦始皇本紀「(三十五年)乃營作朝宮渭南上林苑中。」

(167) 杭德洲「略談修建始皇陵的衛役負擔」(考古與文物叢刊「三號」)九三頁。無戈「秦始皇陵與兵馬俑」八一頁。「秦始皇陵考古工作又有重大突破」(光明日報)。

(168) 秦俑考古隊「秦始皇陵東側馬廐坑續清理簡報」(考古與文物)一九八〇年四期。趙康民「秦始皇陵東側發現五座馬廐坑」(考古與文物)一九八三年五期。程學華「始皇陵東側又發現馬廐坑」(考古與文物)一九八五年二期。

(169) 百官公卿表「太僕、秦官、掌輿馬有兩丞、屬官有大廐、未央、家馬三令、各五丞一尉。」

(170) 史記 李斯列傳「公子高欲奔、恐收族、乃上書曰、先帝無恙時、臣入則賜食、出則乘輿、御府之衣、臣得賜之、中廐之寶馬、臣得賜之、(略)。」

(171) 雲夢秦簡 廐苑律「其大廐、中廐、宮廐馬牛廐(也)、以其筋、革、角及其質(價)錢效、其人詣其官。」

(172) 秦俑考古隊「臨潼上焦村秦墓清理簡報」(考古與文物)一九八〇年二期。

(173) 史記 李斯列傳「公子十二人僇死咸陽市、十公主託死於杜、財物入於縣官、相連坐者不可勝數。索隱「託音宅、與磔同、古今字異耳、磔謂裂其支體而殺之。」

(174) 史記 李斯列傳「(公子高)乃上書曰、(中略)臣當從死而不能、爲人子不孝、爲人臣不忠、不忠者無名以立於世、臣請從死、願葬鄠山

之足、唯上幸哀憐之、(中略) 胡亥可其書、賜錢十萬以葬。

- (175) 陝西文管會「秦始皇陵調查簡報」四一〇頁 圖三。趙康民 丁耀祖

「秦始皇陵附近出土秦陶俑和石柱礎」(「文物」一九六四年九期。臨潼縣文化館「秦始皇陵附近新發現的文物」(「文物」一九七三年五期)。但し一九六四年發見陶俑は、最初女俑とされたが、最近男俑と訂正された。朝日新聞社「中國陶俑の美展圖録」(一九八四) 圖版一一。

一九四八年發見の男女俑二體も、男俑二體と訂正されよう。

- (176) 袁仲一「秦代金文、陶文雜考三則」(「考古與文物」一九八二年四期) 九二頁。張文立「近年秦俑研究述評」(「文博」一九八五年一期) 六四頁。

- (177) 趙康民「秦始皇陵原名麗山」。袁仲一「秦代金文、陶文雜考三則」。

- (178) 趙康民「秦始皇陵北二、三、四號建築遺迹」(「文物」一九七九年二期)。

- (179) これと同種の瓦當は、一九五六年の採集品(歷史博物館藏)の他、數點ある。陝西文管會「秦始皇陵調查簡報」四一一頁、圖七。

- (180) 楊寬(尾形勇 太田有子共譯)『中國皇帝陵の起源と變遷』(東京一九八二)。楊寬『中國古代陵寢制度史研究』(上海一九八五)。後者は前者の原文を上編に收め、更に中、下編を増補したもの。

- (181) 獨斷 卷下「宗廟之制、古學以爲人君之居、前有朝、後有寢、終則前制廟以象朝、後制寢以象寢、廟以藏主、列昭穆、寢有衣冠几杖象生之具、總謂之宮、(中略) 古不墓祭、至秦始皇出寢、起之於墓側、漢因而不改、故金陵上稱寢殿、有起居衣冠象生之備、皆古寢之意也。但し楊寬氏は、「古學」を「古者」、「金陵」を「今陵」に作る。

- (182) 楊寬『中國皇帝陵の起源と變遷』四八頁。

- (183) 說文解字「飢、糧也、从人食」。段注「按、以食食人物、其字本作食、俗作飢、或作餽、經典無飢」。

- (184) 百官公卿表「奉常、秦官、掌宗廟禮儀、有丞、景帝中六年更名太常、屬官有太樂、太祝、太宰、太史、太卜、太醫六令丞、又均官、都水兩長丞、又諸廟寢園食官令長丞」。

- (185) 漢書 韋玄成傳「京師自高祖下至宣帝、與太上皇、悼皇考各自居陵旁立廟、并爲百七十六、又園中各有寢、便殿、日祭於寢、月祭於廟、時祭於便殿、寢、日四上食、廟、歲二十五祠、便殿、歲四祠、又月一游衣冠」。顏師古注「寢者、陵上正殿、若平生露寢矣、便殿者、寢側之別殿耳」。

- (186) 楊寬氏は、陵園を管理する官吏や陵寢に供奉する宮女が居住した區域だろうという。「秦始皇陵園布局結構的探討」(「文博」一九八四年三期)一二頁。

- (187) 禮記 郊特牲「魂氣歸于天、形魄歸于地」。

- (188) 禮記 檀弓下「延陵季子適齊、於其反也、其長子死、葬於贏博之間、(略) 既封、左袒右還其封、且號者三曰、骨肉歸復于土、命也、若魂氣則無不之也、無不之也、而遂行、孔子曰、延陵季子之於禮也、其合矣乎」。吉川忠夫「魂氣の如きはゆかざるなし」(『中國古代人の夢と死』所收、東京一九八五)。

- (189) 儀禮 士喪禮「復者一人、以爵弁服、簪髮于衣、左何之、扱領于帶、升自前東榮、中屋北面、招以衣曰、皋某復、三、降衣於前、受用篋、升自阼階、以衣尸」。

- (190) 論衡 論死篇「人死精神升天、骸骨歸土、故謂之鬼、鬼者、歸也、神者、荒忽無形者也」。

- (191) 町田章「華北地方における漢墓の構造」(『東方學報』京都四九冊 一九七七)。

- (192) 秦始皇本紀「二世曰、先帝後宮非有子者、出焉不宜、皆令從死、死者甚衆、葬既已下、或言工匠爲機、臧皆知之、臧重即泄、大事畢、已臧、閉中羨、下外羨門、盡閉工匠臧者、無復出者、樹草木以象山」。

- (193) 韓倬「略論陝西春秋戰國秦墓」八七一八八頁。鳳翔高庄秦墓などでみられる。吳鎮烽 尙志儒「陝西鳳翔高庄秦墓地發掘簡報」一四頁。

- (194) 漢書 劉向傳「石槨爲游館、人膏爲燈燭、(中略) 棺槨之麗、宮館之盛、不可勝原。顏師古注「多累石作檣於墳中、以爲離宮別館也」。

- (195) 漢書 賈山傳「死葬於驪山、(中略) 被以珠玉、飾以翡翠、中成觀

游、上成山林」。

- (196) 獨斷 卷下「居西都時、高帝以下每帝、各別立廟、月備法駕、遊衣冠」。

- (197) 河北省文物管理處「河北省平山縣戰國時期中山國墓發掘簡報」
〔文物〕一九七九年一期。傅熹年「戰國中山王墓出土的兆域圖及其陵園規制的研究」〔考古學報〕一九八〇年一期。楊鴻勛「戰國中山王陵及兆域圖研究」〔同上〕。秋山進午「中國における王陵の成立と都城」〔小林行雄博士古稀記念論文集 考古學論考〕所收、東京 一九八二。

- (198) 中國科學院考古研究所「輝縣發掘報告」六九—一〇四頁。

- (199) 楊寬「先秦墓上建築和陵寢制度」〔文物〕一九八二年一期。楊鴻勛「關於秦代以前墓上建築的問題」〔考古〕一九八二年四期。楊寬「先秦墓上建築問題的再探討」〔考古〕一九八三年七期。楊鴻勛「關於秦代以前墓上建築的問題」要點的重申——答楊寬先生——〔考古〕一九八三年八期。

- (200) 河北省文物管理處「河北省平山縣戰國時期中山國墓發掘簡報」圖二五、二六、「王堂」「王后堂」「哀后堂」「□堂」「夫人堂」。但し、「兆域圖」プランには五つの堂が書かれていたが、實際に墓が作られたのは、王(中山王響)と哀后だけであった。

- (201) 「世界美術大系 中國美術(I)」三九頁 圖二一。

- (202) 湖北省博物館「隨縣曾侯乙墓」圖七二、九二、四、五。

- (203) 「中山王國文物展圖錄」(東京 一九八一) 圖四三。

- (204) 史記 絳侯周勃世家「居無何、絳侯(同亞夫)子爲父買工官尙方甲楯五百被可以葬者、取庸苦之、不予錢、庸知其盜買縣官器、怒而上變告子、事連汙條侯、書既聞上、上下吏、吏簿責條侯、條侯不對、景帝厲之曰、吾不用也、召詣廷尉、廷尉責曰、君侯欲反邪、亞夫曰、臣所買器、乃葬器也、何謂反邪、吏曰、君侯縱不反地上、即欲反地下耳、吏侵之益急、(中略)因不食五日、嘔血而死、國除」。

- (205) 百官公卿表「秦兼天下、建皇帝之號、立百官之職、漢因循而不革、

明簡易、隨時宜也」。

- (206) 陝西文管會、咸陽市博物館「陝西省咸陽市楊家灣出土大批西漢彩繪陶俑」〔文物〕一九六六年三期。楊家灣漢墓發掘小組「咸陽楊家灣漢墓發掘簡報」〔文物〕一九七七年一〇期。

- (207) 出土時、一部の俑の右手の中に鐵の棒の破片があり、また坑内で四一〇件の彩繪陶盾が発見された。因みに鎧はつける者につけない者があり、小札や甲釘が繪具を用いて稍や粗雑に描き込まれていた。『中國陶俑の美展圖錄』圖一五。

- (208) 楊家灣漢墓發掘小組「咸陽楊家灣漢墓發掘簡報」一六頁。

- (209) 水經注 卷一九 渭水「(成國故渠)又東逕渭城北、又東逕長陵南、故渠又東逕漢丞相周勃家南、故渠東南謂之周氏曲、又東南逕漢景帝陽陵南、又東南注于渭、今無水」。

- (210) 陝西文管會等「陝西省咸陽市楊家灣出土大批西漢彩繪陶俑」三頁。

- (211) また最近の報道によると、一九八四年十二月、江蘇徐州市郊外の獅子山の麓で兵馬俑坑が発見され、これまでに三つの坑から兵馬俑三千體餘りが出土したという。〔朝日新聞〕一九八四年十二月十二日朝刊、一九八五年四月三日朝刊。繪葉書〔徐州出土文物〕をみると、楊家灣漢墓同様、陶俑、陶馬がぎっしりと並べられていた。

- (212) 咸陽市博物館「漢安陵的勘查及其陪葬墓中的彩繪陶俑」〔考古〕一九八一年五期。

- (213) 王學理 吳鎮烽「西安任家坡漢陵從葬坑的發掘」〔考古〕一九七六年二期。

- (214) この形式の立俑は日本にも何點か傳來している。佐藤雅彦『中國の土偶』(東京 一九六五) 圖一、五。

- (215) 注〔15〕參照。

- (216) 王學理「漢南陵從葬坑的初步清理——兼談大熊貓頭骨及犀牛骨格出土的有關問題」〔文物〕一九八一年一期。

- (217) 說文解字「獾、似熊而黃黑色、出蜀中」。

- (218) 楊家灣漢墓發掘小組「咸陽楊家灣漢墓發掘簡報」。

- (219) 續漢書 禮儀志「登遐、皇后詔三公典喪事、(略) 守宮令兼東園匠將女執事、黃縣、緹綰、金縷玉押如故事、飯哈珠玉如禮」。(同上)「諸侯王、列侯、始封貴人、公主薨、皆令贈印璽、玉押銀縷、大貴人、長公主銅縷」。
- (220) 中國社會科學院考古研究所 河北省文物管理處「滿城漢墓發掘報告」下集 彩版一—二、一九一—二〇。史爲「關於金縷玉衣的資料簡介」(考古)一九七二年二期。
- (221) 無戈「秦始皇陵與兵馬俑坑」。
- (222) 中國科學院考古研究所滿城發掘隊「滿城漢墓發掘紀要」(考古)一九七二年一期。
- (223) 山東省博物館「曲阜九龍山漢墓發掘簡報」(文物)一九七二年五期。
- (224) 湖南省博物館 中國科學院考古研究所「長沙馬王堆一號漢墓」(北京一九七三年七期)。同上「長沙馬王堆二、三號漢墓發掘簡報」(文物)一九七四年七期。中國科學院考古研究所 湖南省博物館寫作小組「馬王堆二、三號漢墓發掘的主要收穫」(考古)一九七五年一期。
- (225) 湖南省博物館等「馬王堆二、三號漢墓簡報」四三頁。
- (226) 武器の場合は、「弩矢十二、象鏃」というように、實用品と非實用品を區別し、非實用品であれば、品名の上に「象」字を冠していた。中國科學院考古研究所等「馬王堆二、三號漢墓收穫」五六頁。なお「明董」は、江陵鳳凰山八號漢墓の遺策(八八號)では、「右方耦人籍凡卅九」と、「耦(偶)人」と呼ばれている。金立「江陵鳳凰山八號漢墓竹簡試釋」(文物)一九七六年六期)七一頁。
- (227) 中國科學院考古研究所等「馬王堆二、三號漢墓收穫」五五一—六頁。
- (228) 何介鈞張維明「馬王堆漢墓」(北京一九八二)一五〇—一五一頁。なお、ここで「冠畫」とは、帛畫に畫いたとの意味か。
- (229) 何介鈞 張維明「馬王堆漢墓」一四八—一五一頁。
- 軍隊において鏡、鐸の樂器が用いられたことは、「說文解字」の引用する「軍灋」に記される通りである。說文解字「鏡、小鉦也、从金堯聲、軍灋、卒長執鏡」。同上「鐸、大鈴也、从金畢聲、軍灋、五
- (230) 人爲伍、五伍爲兩、兩司馬執鐸」。また建鼓、鏡、鐸については、林巳奈夫「漢代の文物」四一九—四二三頁、圖九—15 6 10 参照。
- 軍隊の閱兵の儀式の際に、鼓、鏡、鐸の樂器が使われたことは、次の記事にみえる。周禮 夏官 大司馬「中冬教大閱、前期、羣吏戒衆庶、脩戰灋、虞人萊所田之野、爲表、百步則一、爲三表、又五十步爲一表、田之曰、司馬建旗于後表之中、羣吏以旗、物、鼓、鐸、鑼、鏡各帥其民而致、質明弊旗、誅後至者、乃陳車徒如戰之陳、皆坐、羣吏聽誓于陳前、斬牲以左右徇陳曰、不用命者斬之、(略) 又三鼓、振鐸作旗、車徒皆作、(略) 乃鼓退、鳴鏡且卻、及表乃止」。
- (231) 金維諾「談長沙馬王堆三號漢墓帛畫」(文物)一九七四年一期)四一頁。何介鈞 張維明「馬王堆漢墓」一四八頁。「中國の博物館第二卷 湖南省博物館」(東京一九八二)圖版八三、八四解説。但し金維諾氏は、墓主人に従って進む士卒達の前面で、黄色の火焰が燃え、その上に牛羊の犠牲があるとして、この圖を耕祠の儀式を描いたものとする。圖版ではみえないが、もし犠牲を供して祭祀が行なわれているとしたら、「周禮」大司馬にみえる大閱の儀式で、やはり犠牲をささげていることと考えあわせ興味深い。注(230)参照。
- (232) 武器を持った武士俑は、戰國晩期の長沙仰天湖二五號木槨墓などで出土しているが、仰天湖の場合、木戈や木劍を手にした木俑が四體出土しただけである。湖南省文物管理委員會「長沙仰天湖第二五號木槨墓」(考古學報)一九五七年二期)。
- (233) 何介鈞 張維明「馬王堆漢墓」は、この場面について觸れていない。ここでは魂と魄を二元的に考えたが、魄を形(肉體)と魂(精神)との間を揺れ動く曖昧な概念とする三浦國雄氏の考え方がある。三浦國雄「墓と廟」『世界の文化史蹟 第十七卷 中國の古建築』所收。
- (235) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」
- (236) 臨沂金雀山漢墓發掘組「山東臨沂金雀山九號漢墓發掘簡報」(文物)一九七七年二期)圖版。拙稿「崑崙山と昇仙圖」一五〇—一五五頁。

(237) 湖南省博物館等「長沙馬王堆二、三號漢墓發掘簡報」四三頁。「關於鳳凰山一六八號漢墓座談紀要」(「文物」一九七五年九期) 俞偉超發言、一三頁。

(238) 紀南城鳳凰山一六八號漢墓發掘整理組「湖北江陵鳳凰山一六八號漢墓發掘簡報」(「文物」一九七五年九期) 四頁、圖版三。

(239) 釋文は俞偉超氏に従う。「關於鳳凰山一六八號漢墓座談紀要」俞偉超發言、一三頁。

(240) 同右。大庭脩「興味深い『冥土用旅券』——中國江陵縣出土の竹簡」(「朝日新聞」一九七六年五月二日夕刊)。陳直「關於『江陵丞』告『地下丞』」(「文物」一九七七年二期)。

(241) 紀南城鳳凰山一六八號漢墓發掘整理組「湖北江陵鳳凰山一六八號漢墓發掘簡報」四頁。

(242) 杉本憲司「漢墓出土の文書について——特に湖北江陵鳳凰山漢墓について——」(「檀原考古學研究所論集」五、一九七九) 五〇九頁。

(243) 長江流域第二期文物考古工作人員訓練班「湖北江陵鳳凰山西漢墓發掘簡報」(「文物」一九七四年六期) 四六頁、圖版五。

(244) 「關於鳳凰山一六八號漢墓座談紀要」俞偉超發言、一三頁。永田英正「江陵鳳凰山十號漢墓出土の簡牘——特に算錢を中心として——」(「鷹陵史學」三、四合併號) 一三〇—一頁。

(245) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」九四、一二七—八頁。

(246) 拙稿「崑崙山への昇仙」六九—七八頁。

(247) 湖南省博物館「新發現的長沙戰國楚墓帛書」(「文物」一九七三年七期)。拙稿「崑崙山と昇仙圖」一一四—八頁。

(248) このような桃枝小俑は馬王堆一號墓でも發見され、桃の木が邪鬼を斥ける仙木であるところから、辟邪の用をなすものと考えられる。

(249) 湖南省博物館等「長沙馬王堆一號漢墓」上集 一〇〇—一〇一頁。

この「偶人」は二號墓では破壊されていたが、三號墓のものは木と草繩で作られ、跪坐して頭に鹿角を挿し、高さは一八cmと一〇五cmであった。この一對の木俑が、三號墓の木牘に記載された「二人

偶人」に相當するものとみられる。湖南省博物館等「長沙馬王堆二、三號漢墓發掘簡報」四〇—四一頁。

(250) 秦始皇本紀「秦初并天下、令丞相、御史曰、(略)寡人以眇眇之身、與兵誅暴亂、賴宗廟之靈、六王咸伏其辜、天下大定、今名號不更、無以稱成功、傳後世、其議帝號、丞相綰、御史大夫劫、廷尉斯等皆曰、(略)臣等謹與博士議曰、古有天皇、有地皇、有泰皇、泰皇最貴、臣等昧死上尊號、王爲泰皇、(略)王曰、去泰、著皇、采上古帝位號、號曰皇帝」。

(251) 西嶋定生「皇帝支配の成立」(「中國古代國家と東アジア世界」所收、東京 一九八三) 五五—六〇頁。始皇帝の皇帝觀については、この論考に負う所が大きい。

(252) 秦始皇本紀「(二十七年)焉作信宮渭南、已更命信宮爲極廟、象天極」。索隱「天官書曰、中宮曰天極、是也」。

(253) 秦始皇本紀「(三十五年)乃營作朝宮渭南上林苑中、先作前殿阿房、東西五百步、南北五十丈、上可以坐萬人、下可以建五丈旗、周馳爲閣道、自殿下直抵南山、表南山之顛以爲闕、爲復道、自阿房渡渭、

屬之咸陽、以象天極閣道絕漢抵營室也」。索隱「常考天官書曰、天極紫宮後十七星絕漢抵營室、曰閣道」。

(254) 近年、咸陽宮の一號宮殿、三號宮殿の發掘調査が行なわれ、特に三號宮殿からは壁畫が發見されたが、これらはともに渭水の北側に位置している。秦都咸陽考古工作站「秦都咸陽第一號宮殿建築遺址簡報」(「文物」一九七六年一期)。咸陽市文管會「咸陽市博物館咸陽地區文管會」秦都咸陽第三號宮殿建築遺址發掘簡報」(「考古與文物」一九八〇年二期)。

(255) 史記「封禪書」自威、宣、燕昭使人入海求蓬萊、方丈、瀛洲、此三神山者、其傳在勃海中、去人不遠、患且至、則船風引而去、蓋嘗有至者、諸僊人及不死之藥皆在焉、(略)及至秦始皇并天下、至海上、則方士言之不可勝數、始皇自以爲至海上而恐不及矣、使人乃齎童男

女入海求之」。

- (256) 秦始皇本紀「齊人徐市等上書、言海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛洲、僊人居之、請得齋戒、與童男女求之、於是遣徐市發童男女數千人、入海求僊人。」同上「始皇聞亡、乃大怒曰、(略)徐市等費以巨萬計、終不得樂、徒姦利相告日聞。」
- (257) 史記 封禪書「上(武帝)遂東巡海上、(略)乃益發船、令言海中神山者數千人求蓬萊神人。」
- (258) 秦始皇本紀「二十八年、始皇東行郡縣、上鄒嶧山、立石、與魯諸儒生議、刻石頌秦德、議封禪望祭山川之事、乃遂上泰山、立石、封、祠祐、下、風雨暴至、休於樹下、因封其樹爲五大夫、禪梁父。」
- (259) 史記 封禪書「於是徵從齊魯之儒生博士七十人、至乎泰山下、諸儒生或議曰、(略)始皇聞此議各乖異、難施用、由此細儒生、(略)其禮頗采太祝之祀雍上帝所用、而封藏皆祕之、世不得而記也。」栗原朋信は、ここで始皇帝が封禪に當たり、雍で上帝を祀る時の儀禮を用いたと記しているのは、武帝時代の封禪の事實に關する知識からの類推とする。「史記の秦始皇本紀に關する二・三の研究」『秦漢史の研究』東京 一九六〇 三四頁。
- (260) 史記 封禪書「上念諸儒及方士言封禪人人殊、不經、難施行、(略)禮畢、天子獨與侍中奉車子侯上泰山、亦有封、其事皆禁。」
- (261) 栗原朋信「史記の秦始皇本紀に關する二・三の研究」二九—三六頁。
- (262) 秦始皇本紀「刻所立石、其辭曰、(略)皇帝躬聖、既平天下、不懈於治、夙興夜寐、建設長利、專隆教誨、訓經宣達、遠近畢理、咸承聖志、(略)。」
- (263) 史記 封禪書「申公曰、漢主亦當上封、上封則能僊登天矣。」同上「齊人丁公年九十餘、曰、封禪者、合不死之名也。」
- (264) 栗原朋信「史記の秦始皇本紀に關する二・三の研究」三五—三七頁。
- (265) 史記 李斯列傳「於是乃相與謀、詐爲受始皇詔丞相、立子胡亥爲太子、更爲書賜長子扶蘇曰、朕巡天下、禱祠名山諸神以延壽命。栗原朋信は、この偽詔は、當時、秦の政府から發表されたものであり、それ故に史料としては信用度の高い眞詔であるとする。注(263)参照。
- (266) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」一七二—七三頁。
- (267) 河北省文物管理處「河北省平山縣戰國時期中山國墓發掘簡報」三一—四頁。
- (268) 劉慶柱、李毓芳「西漢諸陵調查與研究」(『文物資料叢刊』六一九八二)。
- (269) 注(185)參照。
- (270) 漢書 高帝紀「(十二年)三月、詔曰、吾立爲天子、帝有天下、十二年于今矣。」
- (271) 魯琪「試談大葆臺西漢墓的梓宮、便房、黃腸題湊」(『文物』一九七七年六期)。西村俊範「漢代大型墓の構造」(『史林』六二卷六號)。
- (272) これらについては、稿を改めて論ずることとする。
- 挿圖出所目録
- 1 秦俑考古隊等『秦始皇陵兵馬俑』平面位置示意圖より
 - 2 筆者蒐集拓本
 - 3 秦鳴「秦俑坑兵馬俑軍事內容及兵器試探」圖一
 - 4 秦俑考古隊「一號坑簡報」圖二より
 - 5 購入スライドより
 - 6 Wen Fong, *The Bronze Age of China* (London, 1980), pl. 101, 102
 - 7 秦俑考古隊「三號坑簡報」圖五より
 - 8 兵馬俑博物館にて筆者撮影
 - 9 Wen Fong, *The Great Bronze Age of China*, pl. 93
 - 10 左 旅遊出版社等『秦始皇陵兵馬俑』圖一三七より
右 購入スライドより
 - 11 Wen Fong, *The Great Bronze Age of China*, pl. 99
 - 12 a 秦俑考古隊「二號坑簡報」圖二五
b 同右、圖二七
c 秦俑考古隊「三號坑簡報」圖一五
 - 13 a 秦俑考古隊「三號坑簡報」圖一六

- b 同右「二號坑簡報」圖二四
c 同右「三號坑簡報」圖一三
d 同右「二號坑簡報」圖二六
- 14 秦俑考古隊等『秦始皇陵兵馬俑』圖五〇より
15 秦俑考古隊「一號坑簡報」圖二四
16 兵馬俑博物館 秦俑考古隊 陝西人民美術出版社『中國歷代雕塑 秦始皇陵俑塑群』(西安 一九八三) 圖版より
17 上 『中國秦兵馬俑展圖錄』(大阪 一九八三) 圖一四
下 兵馬俑博物館にて筆者撮影。
18 旅遊出版社等『秦始皇陵兵馬俑』圖一三一より
19 左 秦俑考古隊等『秦始皇陵兵馬俑』圖二六
右 同右 圖三六
20 秦俑考古隊等『秦始皇陵兵馬俑』圖六六より
21 兵馬俑博物館にて筆者撮影。
22 秦俑考古隊「二號坑簡報」圖一より
23 左 秦俑考古隊等『秦始皇陵兵馬俑』圖四五より
右 Wen Fong, *The Great Bronze Age of China*, pl. 100
24 『中國の博物館 第一卷 陝西省博物館』(東京 一九八一) 圖版三一より
25 秦俑考古隊等『秦始皇陵兵馬俑』圖四四
Wen Fong, *The Great Bronze Age of China*, pl. 103
26 旅遊出版社等『秦始皇陵兵馬俑』圖二二九
27 秦俑考古隊「一號坑簡報」圖五
28 湖南省博物館等『長沙馬王堆一號漢墓』上集、圖九〇 1より
29 秦俑考古隊「二號坑簡報」圖二二 2
30 秦俑考古隊「二號坑簡報」圖二
31 兵馬俑博物館等『中國歷代雕塑 秦始皇陵俑塑群』圖版より
32 購入スライドより
33 秦俑考古隊「秦始皇陵二號銅車馬初探」圖三より
34 秦始皇陵と兵馬俑に關する試論

- 35 購入スライドより
36 「秦始皇帝陵の大型彩繪銅車馬」(『人民中國』一九八三年一〇期) 圖版より
37 購入スライドより
38 秦俑考古隊「二號銅車馬簡報」圖四七より
39 兵馬俑博物館にて筆者撮影
40 秦俑考古隊「秦始皇陵東側馬廄坑鑽探清理簡報」圖七 5
41 秦俑考古隊「臨潼上焦村秦墓清理簡報」圖二 3
42 兵馬俑博物館にて筆者撮影
43 『中國陶俑の美展圖錄』圖一一より
44 趙康民「始皇陵原名麗山」圖二
45 趙康民「秦始皇陵北二、三、四號建築遺迹」圖二
46 同右 圖六
47 河北省文物管理處「河北省平山縣戰國時期中山國墓葬發掘簡報」圖二五
48 『世界美術大系 中國美術(I)』卷頭圖
49 左 展力 周世曲「試談楊家灣漢墓騎兵俑」(『文物』一九七七年一〇期) 圖四
右 同右 圖一より
50 左 『中國陶俑の美展圖錄』圖一三より
右 楊家灣漢墓發掘小組「咸陽楊家灣漢墓發掘簡報」圖版一
51 左 咸陽市博物館「漢安陵的勘查及其陪葬墓中的彩繪陶俑」圖版九 3
右 『中國陶俑の美展圖錄』圖二二より
52 左 陝西省博物館にて筆者撮影
右 王學理 吳鎮烽「西安任家坡漢陵從葬坑的發掘」圖版七 3
53 楊家灣漢墓發掘小組「咸陽家灣漢墓發掘簡報」圖版二 2より
54 同右 圖四
55 『中國の博物館 第二卷 湖南省博物館』圖版八三

56 左 何介鈞 張維明『馬王堆漢墓』圖五三より

右 同右 圖五四

57 左 『中國の博物館 第二卷 湖南省博物館』圖版八三より

右 同右 圖版八二より

附記

本稿は林巳奈夫氏を班長とする「中國戰國時代出土文物の研究」研究班の研究報告の一部である。